

岡山大学構内遺跡調査研究年報18

2000年度

2001年10月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学構内遺跡調査研究年報18

2000年度

2001年10月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

2000年度における当センターの事業は、発掘調査としては、津島地区的総合研究棟新設工事および鹿田地区的医学部附属病院エネルギーセンターに伴う発掘調査が中心となりました。調査面積は前者が約1350平方メートル、後者が約1900平方メートルで、本年度もひきつづき発掘作業優先の体制で事業を進めました。これまでの発掘調査結果を報告書にまとめる作業がはかどらず、報告書を刊行するまでにいたらなかったのは遺憾でしたが、年報やセンター報などは定期刊行を実現することができました。また、秋に第4回目となる「岡山大学キャンパス発掘成果展」を開催したところ、本学内外から多数の来場者があり、好評を得ました。

エネルギーセンターの調査区は、弥生時代から古墳時代への移行期の文化層と中世の文化層が主体となっていました。すぐ北側の病棟建設地でおこなった発掘調査内容とも関連するようであり、今後、両者を一体としてその歴史的な意義を追求していく必要があると思われます。

津島地区的調査では、縄文時代後期にさかのぼる河道を確認しました。河道は、津島地区の他の旧河道と同じく、北東から南西への流れを示していました。したがって自然の流路の可能性が高いのですが、その西岸において長さ数十メートルにもおよぶと推定される杭列を調査できたことは、特筆すべき成果でした。水稻農耕が普及した弥生時代以降ではこの種の護岸施設は各地において見られるところですが、水田構造がまだ確認されていない縄文時代後期にどのような役割を果たした施設であったのか、この時期における農耕の有無ともかかわって、今後の重要な研究課題になりそうです。

また2000年度においては、本センターの理念・目的、調査・研究、管理・運営等について自己評価を行い、あわせて外部評価を受けました。外部評価委員を快くお引き受けくださった岡山県教育委員会文化課長松井英治氏、岡山県古代吉備文化財センター所長正岡睦夫氏、岡山市教育委員会文化課長川宮徳尚氏に厚くお礼申し上げます。外部評価の結果も踏まえ、文化財の保護をめぐって本学と地域関係機関との連携がいっそう進むことを希望しています。

発掘調査や室内作業の実施にあたっては、いつもながら事務局および関係部局から多くのご支援・ご協力をいただきました。各機関・各位にあらためてお礼申し上げます。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長

稻 田 孝 司

例　　言

- 1 本報告は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが岡山大学構内において2000年4月1日から2001年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査と保存、および活動成果をまとめたものである。
- 2 大学構内の埋蔵文化財の調査に際しては、設定基準を次のように定めた。
 - 1) 津島地区では、国土座標第V座標系（X=-144,500m, Y=-37,000m）を起点として、真北を基軸とした構内座標を設定した。一辺50mの方形区画である。また同地区では調査の便宜上、大きく津島北地区と同南地区に二分する（図1）。
 - 2) 鹿田地区では、国土座標第V座標系（X=-149,800m, Y=-37,400m）を起点として、座標軸をN-15°-Eに振ったものを基軸とした構内座標を設定した。地区割は一辺5mの方形を基準として用いており、図で示す場合は一辺10m四方の方形地区割りを用いている。
 - 3) 本文中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は真北を、他は磁北を用いている。
- 3 岡山大学構内の遺跡の名称は、周知の遺跡の場合はそのまま踏襲する。津島地区構内については、全域を「津島岡大遺跡」と総称する。三朝地区的発掘調査地点は小字名をとり「福呂遺跡」と呼称する。他地区は任意の名称で仮称する。
- 4 調査名称は、「発掘調査」に分類したものについては、各遺跡毎に調査順に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」「立会調査」に分類したものについては、任意の名称を用いる。発掘調査のうち、小規模で、確認調査から連続して調査したものは、「試掘・確認調査」に分類する。なお、試掘・確認調査は昨年度まで「試掘調査」としていたが、今年度から名称を変更することとする。
- 5 「発掘調査」についての記述は現段階における概要であり、詳細は正式報告によって頂きたい。「試掘・確認調査」については、本年報での記述を正式報告にかえる。
- 6 表に記載した所属部は、原則として各学部の頭文字を略号として用いている。
- 7 附表2-(2)に掲載する調査一覧については、中世層まで掘削したものを対象とし、その他については除外した。未掲載のデータについては、当センターにおいて管理している。
- 8 本文・目次・挿図・写真などで使用の調査番号は表1と一致する。
- 9 本文は高田浩司・野崎貴博・山本悦世・横田美香が分担執筆し、執筆者名を末尾に記した。
- 10 編集は稻田孝司センター長の指導のもとに、高田浩司が担当した。
- 11 本年報に掲載の地形図は、すべて国土地理院発行の1/25,000「岡山北部」を複写したものである。

岡山大学構内遺跡調査研究年報18 2000年度

目 次

第1章 2000年度岡山大学構内遺跡調査報告	1
第1節 調査の概要	1
第2節 発掘調査	8
1 津島地区	8
(1) 津島岡大遺跡第23・24・25次調査〈総合研究棟、総合研究棟渡り廊下、農学部圃場散水設備(ポンプ槽)〉	8
(2) 津島岡人遺跡第26次調査(事務局)	18
2 鹿田地区	19
(1) 鹿田遺跡第12次調査(エネルギーセンター)	19
第3節 試掘・確認調査	26
1 津島岡大遺跡における縄文～弥生時代の環境復元に伴う試掘・確認調査	26
2 津島地区事務局本館他予定地試掘・確認調査	32
第4節 立会調査	34
1 津島地区	34
2 鹿田地区	34
第2章 2000年度普及・研究・資料整理活動	38
1 資料整理	38
2 刊行物	38
3 展示会	38
4 調査員の活動	40
5 日誌抄	42
6 2000年までの遺物保管状況	43
7 遺物の保存処理	44
8 資料の活用状況	45
第3章 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項	46
第1節 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規則・規程	46
1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規則	46

2 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会管理規程	47
3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会規程	48
第2章 2000年度埋蔵文化財調査研究センター組織	49
1 センター組織一覧	49
2 運営委員会	49
3 自己評価委員会	50
第3章 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター関係委員会報告	50
1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会報告	50
自己評価報告	50
外部評価報告	60
2 岡山大学における教員の任期に関する規則	66
3 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項	67
第4章 2000年度業務のまとめ	59

挿 図 目 次

図1 津島地区全体図	3
図2 今年度の調査地点【1】津島地区	5-6
図3 今年度の調査地点【2】鹿田地区	7
図4 第23・24・25次調査地点位置図	8
図5 第23・24・25次調査地点土層断面図	10
図6 第23・24・25次調査地点の位置と想定される河道流路（縄文時代後期）	13
図7 縄文時代後期の河道と検出遺構平面図（第23次調査地点）	14
図8 弥生土器 壺（第23次調査）	15
図9 弥生時代前期の河道と検出遺構平面図（第23次調査地点）	15
図10 石棒（第23次調査）	16
図11 縄文時代後期河道内枕列平面図（第24次調査）	16
図12 縄文時代後期の遺構と河道平面図（第24次調査）	16
図13 中・近世の溝と杭平面図（第25次調査）	17
図14 第26次調査地点位置図	18
図15 鹿田遺跡発掘調査地点位置図	19
図16 鹿田遺跡第12次調査土層断面図	21

図17	近世の遺構全体図	22
図18	鹿田遺跡第12次調査地点周辺中世遺構全体図	23
図19	第12次調査地点周辺弥生～古墳時代遺構全体図	25
図20	試掘・確認調査地点	27
図21	土層断面図	28
図22	調査地点位置図	33
図23	上層断面図	33
図24	調査47地点位置図	34
図25	調査区割りと河道推定図	35
図26	①区間土層断面図	35
図27	④区間土層断面図	35
図28	遺物実測図（1）	36
図29	遺物実測図（2）	37
図30	遺物実測図（3）	37
図31	見学者の内訳	38
図32	展示会の状況	39
図33	1999年度までの調査地点【1】津島地区	83 84
図34	1999年度までの調査地点【2】鹿田地区	85
図35	1999年度までの調査地点【3】三朝地区	86

表　　目　　次

表1	2000年度調査一覧	1
表2	埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物一覧	43
表3	第4期木器処理工程	45
附表1	1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）	70
附表2	1999年度以前の構内主要調査（1983～1999年度）	71
附表2-（1）	発掘調査	71
附表2-（2）	試掘・確認調査	73
附表2-（3）	立会調査	76
附表3	埋蔵文化財調査室刊行物	81
附表4	埋蔵文化財調査研究センター刊行物	81

第1章 2000年度岡山大学構内遺跡調査報告

第1節 調査の概要

当センターでは、大学構内における掘削に伴う工事に際し、事務局施設部を通じて事務手続きを行ったうえで、発掘調査、試掘・確認調査、立会調査を実施している。

調査の対象は、津島地区の津島岡大遺跡と鹿田地区の鹿田遺跡が中心となっており、掘削に伴う工事に際し、必要に応じて届出を提出したうえで対応を行っている。

2000年度は、発掘調査5件（津島地区4件・鹿田地区1件）、試掘・確認調査2件（津島地区）、立会調査43件（津島地区31件・鹿田地区12件）を実施した。以下、調査の一覧を表1に示し、各調査の概要を述べていく。

表1 2000年度調査一覧

番号	調査地区	構内種別	所蔵	調査名稱	調査期間	面積	備考
1	発掘 津島北	A14~15, BA14~15	文政科	総合研究棟新宮工事に伴う調査	00.2.3~7.28	4.8	調査面積1339.0m ² 。繩文後期河原・杭列、弥生前期河原・墓・溝、弥生中期~古墳房・ビット、中世~近世廣（津島23次調査）
2	発掘 鹿田	CB~CV5~41, CX~CM8~41, CN28~38	医	ハスクギーセンター新宮工事に伴う調査	00.10.2~01.05.10	1.3~1.8	調査面積1893.2m ² 。弥生時代前・溝道、古墳時代上層・溝、中世井戸・柱穴群、房、近世土坑・溝（鹿田12次調査）
3	発掘 津島北	A14	文政科	総合研究棟設置工事に伴う調査	00.12.5~14	3.5	調査面積34.2m ² 。鞋文後期河原・杭列（津島24次調査）
4	発掘 津島北	BA15	農	農学部新校舎建設工事に伴う発掘調査	00.1.29~31	2.4	調査面積20.0m ² 。中世~近世の溝・杭（津島25次調査）
5	発掘 津島南	BC~BN14~15	市	看護系新宮に伴う発掘調査	01.3.26~	0.5	調査面積1550.0m ² 。（津島26次調査）
6	試掘 津島北 確認	AW00, AW00.02, 03, AZ06, AW08		繩文~弥生時代における埋蔵復元に伴う調査	00.8.3~4	2.6~3.2	6ヵ所探削。繩文・弥生時代の数高地、古代溝を確認。
7	試掘 津島北 確認	BB14	事	事務局本館新宮に伴う調査	00.12.21	2	造成+厚0.8m、埋没2.1mで黑色土を確認
8	立会 津島北	AW01	機	環境理工学部（Ⅲ期）配管工事	00.4.6	0.95	底成土内
9	立会 鹿田	C31	医 病	病院新宮工事 保育施設改修	00.5.8	0.65	底成土内
10	立会 鹿田	CR~DA32~43	医 病	病院新宮工事一休施設改修	00.5.25~29	0.7~0.95	既掘工事内、CL~0.7mで明治期の包含層、青褐色粘質土（上層）、納灰色粘土（下層）
11	立会 津島北	AB, AW08	工	工学部電線配管・通信ケーブル整理工事	00.6.8	0.5~0.8	造成+内
12	立会 津島北	A033, AZ02	機	環境理工学部（Ⅲ期）新宮工事。ヒマラヤスギ移植	00.6.21~22	0.6~0.7	CL~0.5mで灰褐色質土、埋没色土を検出
13	立会 鹿田	AE30, AE35, AE~AH12~41	医 病	医師外構水銀灯新宮工事	00.6.26~27	1.0~1.1	4ヵ所探削。うち2ヵ所は造成土直上に白灰色砂質土が堆積

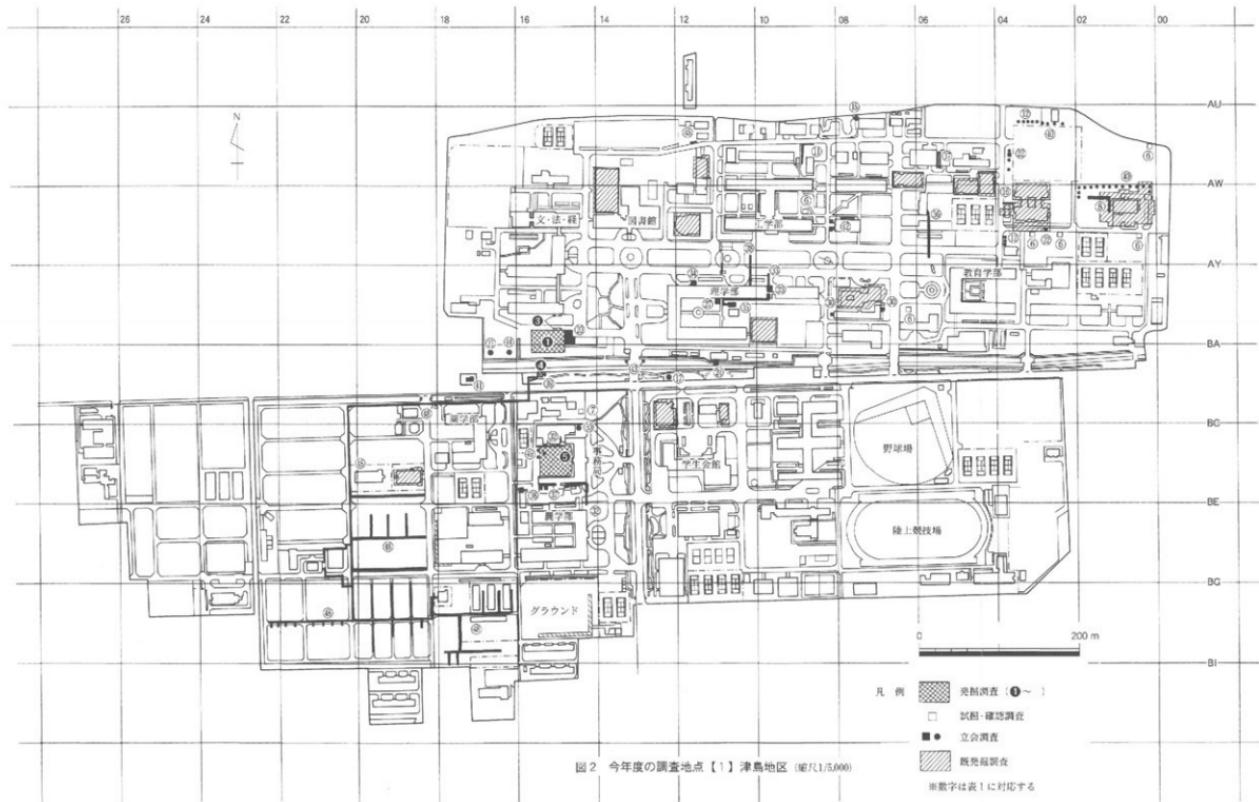
2000年度岡山大学構内遺跡調査報告

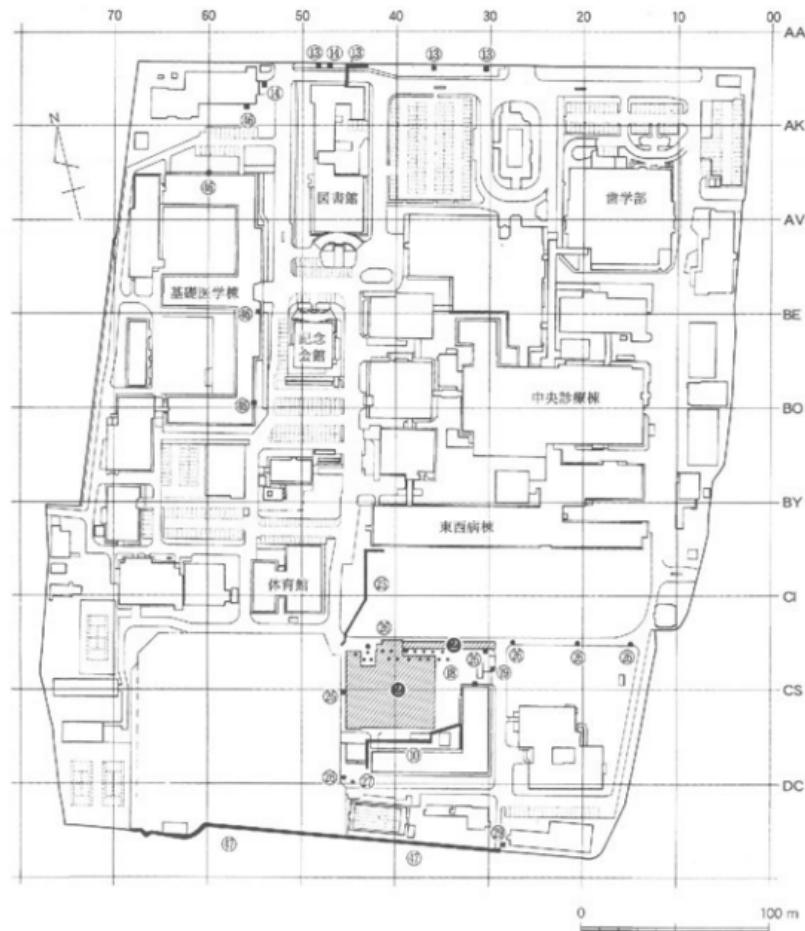
番号	種類	調査区域	調査実施者	所轄	調査名	調査期間	地質	備考
14 立会	露地	赤田 AB46	西	天然ガス切替に伴う配管切り離し及 びバーバ装置工事	00.7.10.13	1.3~ 1.5	造成土下に灰褐色粘土層を確認	
15 立会	津島北	AL07	西	シェイブ等小作株式会社 津島白 動車・飛越電気基地局ボーリング施 工事(既存工事廃止)	00.7.10.12	2.7	新規開工斜面の内側、地山	
16 立会	津島北	AV03	西	環境工学部試験(Ⅲ期)新設機械 設備工事	00.7.19	1	造成土内	
17 立会	津島北	BA12	西	津島南延尾工事	00.7.19	1.6	造成土上に灰色粘土層、鉛筆褐色粘土 層確認	
18 立会	東 四	CD-CV43~53	西	岡山大学(医山)旧学生寮建物取り扱 い、その他の秋(秋物移築)	00.7.21~ 8.1	0.6~ 1.0	移築元: 岡山市宇庭東近、強代賀南側、移 築先: 津島学舎全寮西側、馬場北・東・ 内側、全て造成土内	
19 立会	西 四	CP28, CB33	西	岡山大学(医山)旧学生寮建物取り扱 い、関連ガス管及び給水管の切断	00.7.21	0.8	造成土内	
20 立会	津島北	AZ14	文・法	文・法・経学生寮改修工事解体に伴う 電気ケーブル・電線機器改修工事	00.7.26	0.8	造成土内	
21 立会	津島北	AZ14, BA16	文・法	岡山大学総合研究棟・放送大学岡山 新宿キャンパス改修工事	00.8.11	0.8~ 0.9	文・法・経学生寮室の基礎解体工事、床木移 築、全て造成土内	
22 立会	津島北	AX02, AV03	理	岡山大学環境理工学部校舎(Ⅲ期) 新設工事	00.8.2	0.7~ 1.0	造成土上に灰褐色粘土層を確認	
23 立会	津島北	AV08	理	岡山大学(理)校舎改修工事 理学 部本館改修工事	00.8.29	1.3	造成土上に暗褐色粘土層を確認	
24 立会	津島北	BA11	理	理学部水資源系工事	00.8.30	0.9	全て造成土内	
25 立会	東 四	CH42~CH45	西	岡山大学(医病)病棟新設その他工 事(管路・雨水側)	00.8.30~ 9.27		雨と思われる遺構など確認	
26 立会	東 四	CV13, 22, 27, CS36, 43, CS45, CV45	西	電柱及び外灯の埋設工事	00.9.21	1.6	灰白色土層、淡褐色砂質土層、暗褐色砂 質土層を確認。いずれも1.5m足らず 堆積土と思われる	
27 立会	東 四	DA43, 44	西	看護婦舍向倉津川隣山入口改修工事	00.10.13	0.8	造成土内	
28 立会	津島北	AY10, AZ10	理	岡山大学(理)校舎改修機械設備工 事(電気)	00.10.16~ 25, 11.29, 1.6 12.8	0.85~ 1.6 0.85	看護婦舍向倉津川隣山入口改修工事(電 気) 1.5~1.6mまで掘削 1.6~1.7mで1.5mまで剥離 南東から北 東方向に向かって進行	
29 立会	東 四	DI27	西	理学部ガス配管切り離し用バルブ取 り工事	00.10.24	0.8~ 1.15	0.8~0.7mで新青灰褐色粘土層 0.7~0.5mで暗褐色粘土層	
30 立会	津島北	AX06, 07, 08	理	理学部附属一階取り扱い工事	00.11.2~ 6	0.5~ 1.1	造成土内あるいは廃棄工事内	
31 立会	津島北	BI14, 15	事	事務局グレハップ倉庫改修工事	00.11.16	0.4	造成土内	
32 立会	津島北	BI14, BI15	事	岡山大学(津島)本部棟改修配管工事	00.11.27, 29	0.9~ 1.0	一部既設排水管削除	
33 立会	津島北	AY10, AZ10	理	岡山大学(理)校舎改修機械設備工 事(ガス)	00.11.27~ 29	0.5~ 1.0	造成土内	
34 立会	津島北	AY10	理	岡山大学(理)校舎改修機械設備工 事(排水)	00.11.29	0.8	造成土内	
35 立会	津島北	AZ10	理	理学部校舎改修に伴う改修工事	00.12.26	0.35	造成土内	
36 立会	津島北	AX05	工	T字部土木棟内軸構造説明工事	00.12.8	1.3	0.8~1.2mで削除層	
37 立会	津島北	AY05	工	T字部操業場内修繕工事	00.12.22	0.3	造成土内	
38 立会	津島北	BD15	事	事務局電気改修迂回工事	01.1.16	1	造成土内	
39 立会	津島北	BA15	農	農長部ポンプ槽建設に伴う樹木移植	01.1.22	0.3	造成土内	
40 立会	津島北	AW00, AW01	理	環境理工学部尾辺改修木移植	01.1.22	0.7	造成土内	
41 立会	津島北	BA17	事	岡山大学(津島)本部棟新設に伴う 支障切削取扱工事	01.1.24	1	造成土内	

番号	種類 立会	調査地 区	構内座標	所轄	調査名稱	調査期間	掘削深度	備考
42	立会	津島北	A08, A308	二	岡山大学(工) 調査用化学科棟前 主ガス改修工事	01.1.25. 3.16	1.6~ 2.65	GL-1.45mで暗赤褐色粘質土(明治耕 作), GL-1.85mで灰灰褐色粘土(中世耕 作?)確認
43	立会	津島北	B12, 13	三	西門改修工事(車止め取替)	01.2.13	0.9	GL-0.75mで明治耕土上面
44	立会	津島北	B15, 16	文政橋	総合研究棟改修柱杭打工事	01.2.15	1.5~ 1.7	GL-1.4mで中世耕?跡(底層の築山、十 字架等)確認
45	立会	津島北	AE11	三	埋蔵文化財調査研究センター門扉設 置工事	01.2.27	0.4	造成土内
46	立会	鹿 川	A156, AP60, 鹿 54, BN55	医 痘	ガス管老朽調査	01.2.19	0.6~ 1.1	GL-1.0mで暗赤褐色粘土確認
47	立会	鹿 川	06~B128~87	医 痘	鹿田原地帯斜川水路接界施設改修	01.1.21~ 3.7	2.1~ 2.3	120mにわたって駆逐壁を行い開拓、古 代の河岸、道筋を確認
48	立会	津 島	BB15~19, BC19, BB~BG20	農	岡山大学農学部園芸散木設備その他 工事	01.2.16~ 3.22	0.75~ 1.3	近世層まで駆逐
49	立会	津島市		三	勝原新築工事に伴う樹木移植	01.3.6	0.8~ 1.2	造成土内
50	立会	津島市	BC10	三	岡山大学大学会館移築取り扱い工事	01.3.21	2.1	断面堆土内



図1 津島地区全体図 (縮尺1/20,000)





凡 例

- 発掘調査 (①)
- 試掘・確認調査
- ● 立会調査

図 3 今年度の調査地点【2】鹿田地区 (縮尺1/3,000)

第2節 発掘調査

今年度の発掘調査は、津島地区で4件（津島岡大遺跡第23～26次調査）、鹿田地区で1件（鹿田遺跡第12次調査）実施した。津島岡大遺跡第23・24・25次調査は、これまでほとんど調査が行われていなかった津島北地区南西地域で行った。微高地の広がりを確認するとともに、縄文時代後期、弥生時代前期の河道の利用状況を明らかにすることができた。特に、縄文時代後期の河道においては全国的にも類例の少ない杭列・杭群を検出するなど、大きな成果を上げることができた。津島岡大遺跡第26次調査については、2001年3月26日に開始し、次年度に継続している。

鹿田遺跡第12次調査では、弥生時代から古墳時代における井戸・溝・河道などを検出し、この時期の集落の南方への広がりを確認することができた。また、中世の建物群・井戸・溝、近世の水田畦畔・土坑・溝などを検出した。以下では、各調査ごとにその概要を述べていく。

1 津島地区

- (1) 津島岡大遺跡第23・24・25次調査（総合研究棟新営工事に伴う発掘調査 津島北 AZ 14, 15・BA 14, 15区—第23次、総合研究棟渡り廊下建設工事に伴う発掘調査 津島北 AZ 14区—第24次、農学部敷水施設ポンプ槽設置工事に伴う発掘調査 津島北 BA 15区—第25次）

a. 調査に至る経緯と調査の経過

第23次調査地点は津島北地区に所在する文・法・経済学部2号館の南に、第24次調査地点は文・法・経済学部2号館と第23次調査地点との間に、第25次調査地点は第23次調査地点の南で、岡山大学津島地区を東西に貫流する座主川の南に位置する（図4）。

1999になって文・法・経済学部2号館の南に総合研究棟が新営されることになった。この地点の周辺ではこれまで1981, 82年に岡山市教育委員会によって工事立会や試掘調査が行われていたが、遺構・遺物等は確認されていなかった。また、それ以後に行われた立会調査も掘削深度が大きいものは無かったため、第23次調査に先立ち、試掘調査を実施し

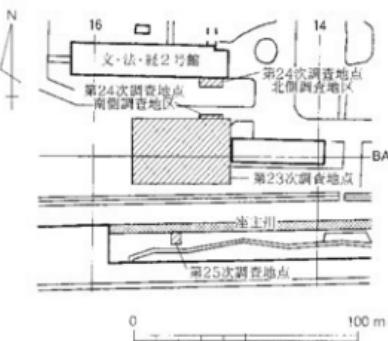


図4 第23・24・25次調査地点位置図 (縮尺1/2,500)

た⁵。試掘調査の結果、津島北地区南東域にも微高地が広がり、遺構が分布していることが明らかになった。また河道が通っていることも確認することができた。

試掘調査の成果を受けて行われた第23次調査は2000年2月3日から開始し、7月28日に終了した。調査面積は1339m²、調査員4名が担当して実施した。

発掘調査は造成土下の明治耕土上面の精査から行い、近世・中世の耕作面では耕作痕とみられる浅い溝を多数検出したが、畦や畝、溝などはほとんど確認されなかった。堆積の薄い微高地では弥生～古墳時代の溝、古墳時代の土坑、ピットを検出した⁶。微高地下の低地部では弥生時代中期の面でピット多数を検出した。また、弥生時代前期の河道では、流路に直交して築かれた堰と微高地への導水路と考えられる幅広の溝を検出し、弥生時代前期の水利施設の状況が明らかになった。弥生時代前期の河道のさらに下層では縄文時代後期の河道を確認し、河道西岸斜面では流路に沿った杭列、河道内最深部付近では不規則に打ちこまれた杭群を検出した。調査終了後、8月4日に縄文時代後期の河道の土壤サンプリングを行っている。

第23次調査終了後、文・法・経済学部2号館と総合研究棟を結ぶ渡り廊下の建設が計画された。第23次調査の成果から、渡り廊下建設予定地点の北側橋脚部では微高地が、南側橋脚部では河道が存在することが予想された。特に南側橋脚部では第23次調査地点の河道西岸斜面で確認された北東から南西に延びる杭列が検出される可能性があり、上記の点を確認するため、狭小な調査区ではあるが河道底面まで掘り下げることとした。調査面積は34.2m²、調査期間は2000年12月5～14日であり、調査員1名が担当した。

さらに2000年11月には、農学部圃場に散水施設を整備するためのポンプ槽の設置が計画され、事前に調査を行うこととなった。この地点の北側約25mには第23次調査地点が位置しており、縄文時代後期の河道が調査地点を通ることが予想された。また、現在の座主川流路の南側に接した位置にあり、東西方向の水路が形成された段階がいつまで遡るのかを確認できる可能性も考えられたため発掘調査を行った。調査面積は20m²、調査期間は2001年1月29～31日で、調査員1名が担当した。1月29日から機械掘削による造成土の除去を行ったのち、近世層以下の包含層の調査を行い、31日に調査を終了した。

b. 調査の概要

① 層序（図5）

第23次調査地点 現地表面の標高は約4.3mであり、地表下約1.2～1.3mが近代以降の造成土（1層）である。2層は青灰色弱粘質土で、明治時代の耕土であり、上面には南北方向に延びる畝の跡が多数検出される。3～5層は近世の耕土と考えられる明黄褐色砂質土であり、上面では耕作痕とみられる浅い溝状の遺構が多数検出される。6～8層は中世の水田層と考えられる灰褐色粘質土である。遺構の残存状況は悪く、ほとんど確認できなかったが、8b層上面

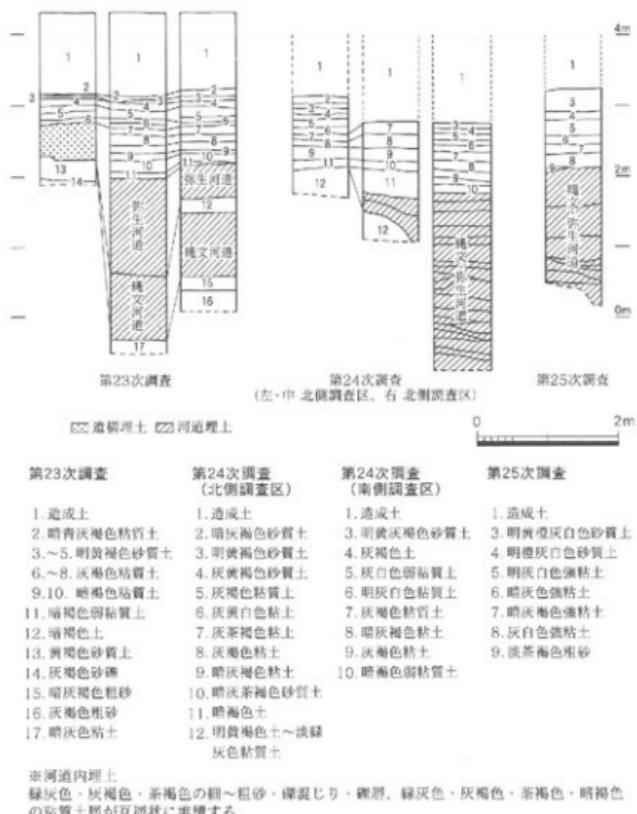


図5 第23・24・25次調査土層断面図 (縮尺1/80)

で満2条を検出している。9, 10層は暗褐色粘質土, 11層は暗褐色弱粘質土である。11層は弥生時代中期段階に埋没した河道の上層にのみ堆積しており、河道埋没後は、湿地状を呈していたと推定される。12層は弥生時代前期の暗褐色土層である。12層は調査区南東の微高地に堆積している。これは津島地区で「黒色土」と呼称している弥生時代前期の鍊層である。13層は黄褐色砂質土であり、調査区北西の微高地を形成している。この層は津島地区的他の調査地点では縄文時代後期の基盤層として認識されている。土質や出土土器から本調査地点においても同様に縄文後期の基盤層と認識した。14層は灰褐色砂礫層であり、地山の礫層である。15層は暗

灰褐色粗砂層で、縄文時代後期の段階には河道東岸の自然堤防状の高まりであったと考えられる。16層は灰褐色粗砂層で砂粒は粗い。17層は暗灰褐色粘土である。上面が縄文時代後期の河底面にあたる。

第24次調査地点 北側調査区は微高地上から谷へと向かう部分の堆積、南側調査区は河道の中の堆積ということで、それぞれ堆積の状況が異なる。そこで、各々の調査区における上層の状況について以下に述べることとする。

南側調査区は第23次調査地点に隣接しており、堆積は同様の状況を示している。地表下約1.2~1.3mは近代以降の造成土（1層）である。2層は暗青灰色砂質土、明治時代の耕土である。3層は近世の耕土とみられる明黄褐色砂質土、4~8層は中世の水田層と考えられる灰褐色粘質土である。9層は灰褐色粘土であり、弥生時代後期~古代の水田層と考えられる。10層は暗褐色弱粘質土である。第23次調査地点と同様、河道の上層にのみ堆積しており、河道埋没後、潟地状を呈していたと推定される。河道内は暗灰褐色粘質土、黃褐色砂質土、暗褐色土、層中に明緑灰色砂質土がラミナ状に堆積する暗灰褐色粘土、炭化物を多く含む暗褐色粘土、暗灰褐色粗砂、暗灰褐色粗砂と、暗灰褐色砂礫層、暗灰褐色粘質土が互層状に堆積する。

北側調査区では上層のはとんどが既設建物の基礎により失われていたが、一部で明治時代の耕土である暗灰褐色砂質土（2層）を確認した。3層は明黄褐色砂質土であり、上面に鉄分の沈着が顕著である。近世の耕作土と考えられる。4~8層は灰褐色を呈する粘質土であり、中世~近世の水田層と考えられる。9層は暗灰褐色粘土である。微高地部では9層下に弥生時代前期の鍵層である黒色土層（11層）、縄文時代後期の基盤層と考えられる明黄褐色土（12層）が認められる。一方、谷部では9層下に暗灰茶褐色砂質土（10層）が堆積している。上面には鉄分の沈着が認められ、層中には弥生土器片を含む。さらに下位には黒色土層が堆積する（11層）。黒色土は谷部に向かうに従って色調が濃くなる。黒色土下には暗褐色~黒褐色粘質土が堆積するが、谷に向かうに従って粘性が強くなる。さらに下位では暗灰褐色粘質土を確認した。谷の埋土であり、縄文土器を多く含む。縄文時代後期の基盤層である明黄褐色土（12層）は谷へ向かうに従ってグライ化し、粘性を増す。色調も淡緑灰色を呈するようになる。

第25次調査地点 各層から遺物はほとんど検出されず、各土層の歴史的な時期同定は行えないが、これまでの津島地区の土層の堆積状況を勘案して以下の記述を進めることとする。

1層は明治時代以降の造成土である。3層は明黄橙灰白色砂質土、4層は明棕灰白色砂質土であり、近世の耕作土と考えられる。5層は明灰白色強粘土であり、中世~近世の堆積層と考えられる。6層は暗灰褐色強粘土、7層は暗灰褐色強粘土であり、中世の堆積層と考えられる。8層は灰白色強粘土、9層は淡茶褐色粗砂である。

以下の堆積状況は、第23次調査地点河道東側の堆積に近似しており、上層から暗褐色粘質

土、層中に暗緑灰色微砂がラミナ状に堆積する暗褐色～暗緑灰褐色粘土、暗灰色粘土：ブロックを多く含む暗褐色～暗灰褐色粘土、植物遺体を多く含む暗灰褐色弱粘質土、暗灰色微砂～粗砂、暗茶褐色土、植物遺体を多く含む暗灰色微砂～粗砂、暗灰色～暗緑灰色粘土の順で堆積している。

② 地形

第23次調査地点では、以下の点が確認された。

1. 中央部に北東から南西に流れる河道が通る。この河道は縄文時代後期の段階には存在しており、西側の微高地と河道底面との比高差は約2.6mにおよぶ。
2. 河道の両岸には微高地が広がるが、西側の微高地は津島地区で縄文時代後期の基盤層と認識している黄褐色砂質土、東側の微高地は弥生時代前期の黒色上層から形成されている。
3. 弥生時代中期～後期に河道が埋没した後、上面は湿地状を呈していたと考えられる。その後、河道の中心部に向かう若干の傾斜が認められるものの、堆積が進行することで徐々に解消されていく。堆積状況から中世段階にはほぼ水平な面を形成していることがうかがえる。

第24次調査地点では以上の成果を補うデータを得ることができた。すなわち、第23次調査地点に隣接する第24次調査地点南側調査区では第23次調査地点から連続する河道を、第24次調査地点北側調査区では西半部で微高地、東半部で谷を確認することができたのである。その結果、第23次調査地点で確認した河道の走行方向を想定する事が可能となった。第23次調査地点で南北に近い形で走行することが確認された河道は、第23次調査地点の北側で屈曲し、東西方向の流路を志向することが明らかとなつた（図6）。これは第23次調査地点で確認した弥生時代前期の堰と導水路が河道の攻撃斜面に構築されたことを裏付ける結果である。

第25次調査地点は狭小であり、調査区内では地形復原を行えるだけのデータを十分に得ることはできなかったが、断面では9層以下で南から北に向けて地形が下がる堆積状況を確認した。地形の下がりを埋める埋土は弱粘質土と粗砂が互層状に堆積しており、本調査区の北約25mに位置する第23次調査地点で検出した縄文時代後期の河道東岸においても確認された堆積状況に類似している。したがって、この地点は第23次調査地点で確認された縄文時代後期の河道の東岸に連続するものと思われる。

c. 遺構の概要

① 第23次調査地点

第23次調査地点で確認した遺構には、明治から近世の耕地、堆積の薄い微高地上では古墳時代のピット群、弥生時代後期～古墳時代の溝群、弥生時代前期の河道、堰、溝群、貯蔵穴群、縄文時代後期の河道と杭列、杭群がある。

縄文時代後期の遺構（図7） 縄文時代後期では、河道に直交して倒れている大木の周辺に

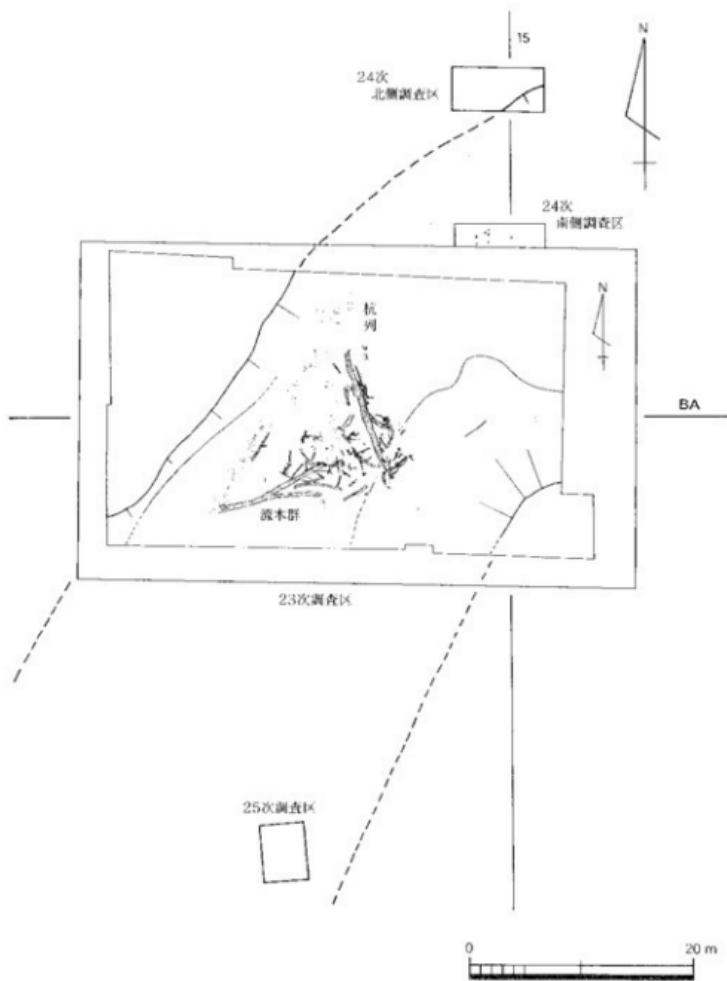


図6 第23・24・25次調査地点の位置と想定される河道流路（縄文時代後期）（縮尺1/500）

打ちこんだ杭群や、河道の縁辺に沿って密に打ちこんだ杭列を検出した。大木は倒木あるいは流木といった自然の營力によるものか、人為的に倒したものか判断することができなかった。周辺からは板材や加工を施した丸木材なども出土している。杭は良好なものでは60cm程度の長さで遺存している。直径はいずれも3cm程度と比較的細いものである。また、いずれの杭も先端を火で焼いている。これらの杭群の機能や性格については、全国的にも類似した例が少なく、不明な点が多い。このような状況であるため、河を渡るための橋としてあるいは堰堤としての利用、桟橋状の施設、貯木、魚を獲るための仕掛け、川岸の護岸施設といった機能が想定されるが、特定はできない。現時点では縄文人たちが様々な目的で河を利用した痕跡であり、その目的に応じた複合的な機能を有していたのであろうと考えている。

弥生時代前期の遺構（図9） 弥生時代前期の主な遺構として、河道に直交して築かれた堰と微高地上に掘削された導水路がある。また微高地の縁辺には数条の溝が北から南に向かって掘削される。調査区の中央には北東から南西に流れる自然河道が通るが、堰は河道に直交して水流を堰き止めるかたちで築かれる。さらにこの堰の西側、河道の攻撃面にあたる斜面に取水口を設けた幅約5mの導水路を掘削し、微高地上に水を引いている状況を確認した。河道の攻撃面に水路を設けることで堰に対する水圧を減少させたと考えられ、農耕開始期における水田

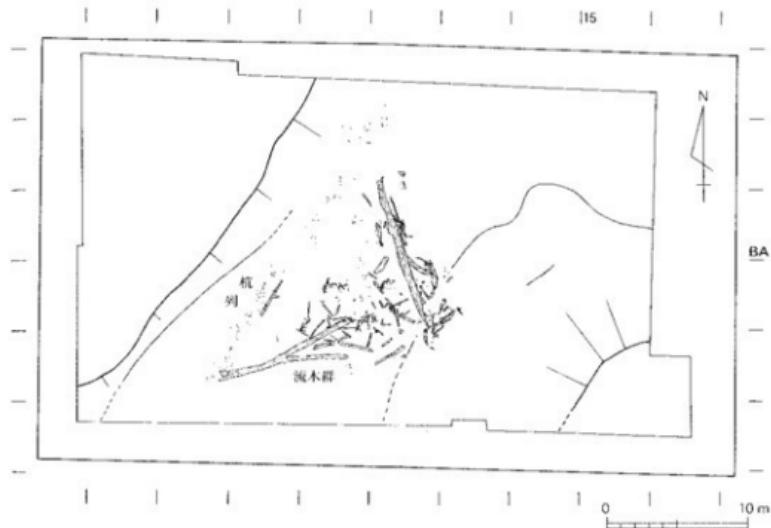


図7 縄文時代後期の河道と検出遺構平面図（第23次調査地点）（縮尺1/100）

経営技術の高さをうかがわせるものである。また、堰と取水口の間で完形の壺が1個出土した(図8)。これは祭祀に供されたものと考えられるが、福岡市板付遺跡で同様の例が見られる。このことは水稻農耕技術のみならず、思想面でも影響を受けたものであることを示すものといえる。

また、河道埋土内からは石包丁、石棒などの石製品が出土した。石包丁は黒色の砂粒を含む明緑灰色の泥岩系の石材で作られる。津島岡人遺跡周辺ではこの種の石材は確認されておらず、搬入品と考えられる。同じく河道内埋土から出土した石棒(図10)は暗緑褐色の片岩系の石材を用いて製作されており、石材や形態の特徴から徳島県の吉野川流域で製作された製品が搬入されたものと考えられる³⁾。この他にもサスカイトを用いて製作された石鎌や人型剣片も出土しており、石材から各地の製品や素材が搬入されている状況がうかがわれる。

貯蔵穴は河道の東岸のゆるやかな斜面において数基検出され

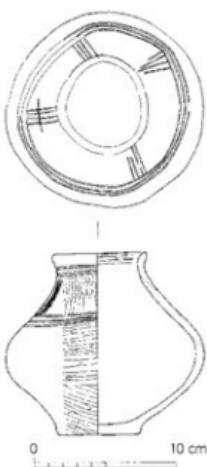


図8 弥生土器壺(第23次調査)
(縮尺1/4)

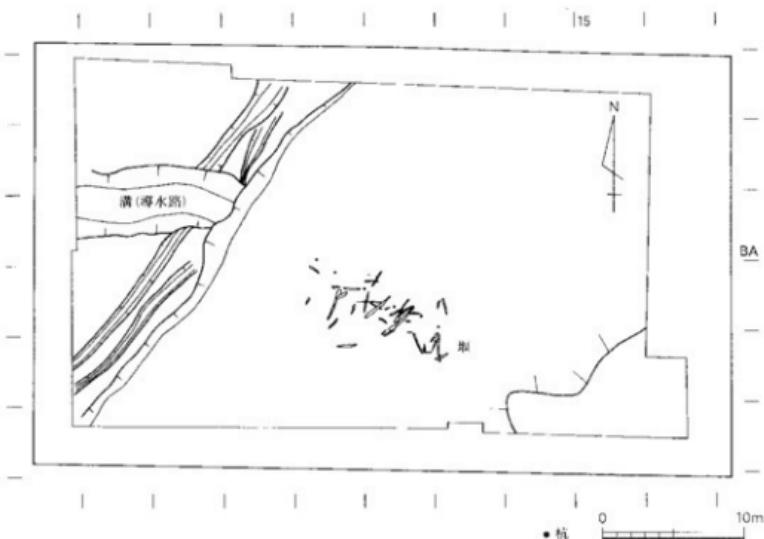


図9 弥生時代前期の河道と検出遺構平面図(第23次調査地点) (縮尺1/400)

た。これらの貯蔵穴は使用後に廃棄されたものと思われ、武面にドングリ等の堅果類がわずかに残るのみであった。

② 第24次調査地点（図11、12）

第24次調査地点で確認した遺構は、明治から近世の耕地、縄文時代後期の河道と杭列、ピット群である。

縄文時代後期の遺構 縄文時代後期の遺構は、第23次調査地点に隣接する南側調査区では第23次調査地点と同様、河道の縁辺に沿って密に打ちこんだ杭列を検出した。杭は良好なものでは80cm程度の長さで遺存している。直径はいずれも3cm程度と比較的細い。いずれの杭も先端を火で焼いている。これらの杭列は第23次調査地点で確認した杭列に連接するものであろう。

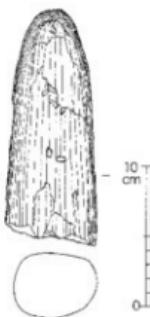


図10 石棒（第23次調査）
(縮尺1/4)

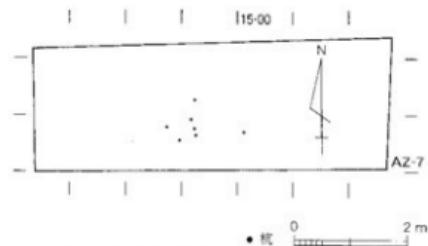


図11 縄文時代後期河道内杭列平面図
(第24次調査南側調査区) (縮尺1/100)

北側調査区では微高地上で7基のピットを確認した。これらの内、数基から土器・石器が出土している。

③ 第25次調査地点（図13）

本調査区で確認された遺構は近世・中世の東西方向に走る溝2条である。この2条の溝はいずれも位置を変えずに埋没後に再掘削されている。このうち古段階の水路は中世段階に堆積したと考えられる8層を掘

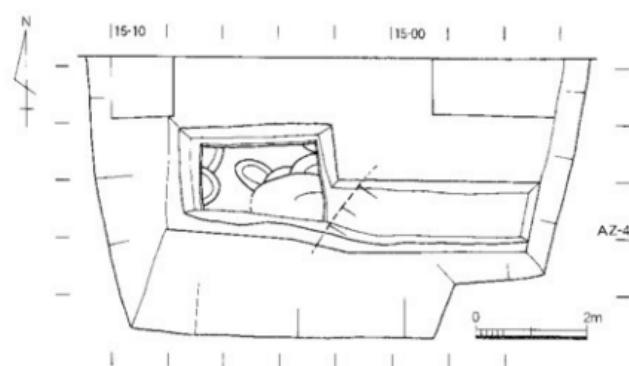


図12 縄文後期の遺構と河道平面図（第24次調査北側調査区）(縮尺1/100)

りこんで掘削されていることが確認されたことから、現在の座主川の流路が中世段階に既に形成されていた可能性がある。また、近世層から掘削される上位の溝では流路の南側の掘り方に沿って杭を打ち込んでいる状況を確認した。

d. まとめ

第23、24次調査地点で行った縄文時代後期の河道の調査では、流路に沿って長さ約30m以上にわたって密に打ちこまれた杭列、河道最深部に不規則ではあるが密に打ちこまれた杭群、河道中心に向かって倒れた大木を検出した。これらの遺構については全国的にも類例が少なく、杭列については管見によれば埼玉県芳能遺跡¹⁰を挙げ得るに過ぎない。したがって、その機能や性格をうかがい知ることは難しいが、現段階では先述のように理解しておきたい。

弥生時代前期の遺構面の調査で検出した堰と導水路は、岡山平野における初期の水稻農耕を考えるうえで重要な資料である。堰は「直立堰」¹¹と分類される構造をとるものであり、福岡県板付遺跡など弥生時代の堰で認められる構造である。また、導水路取水口付近での水口祭祀のあり方は水田農耕の伝播に伴って技術的な側面のみならず、思想的な面でも影響を受けていたことを示すものである。さらに遠隔地からの石製品や石材の搬入状況は、この段階の活発な地域間交流の実態を示すものと評価できる。

さらに、第24次調査地点の北側調査区において敵高地から谷へ落ちる傾斜変換点を確認することができ、第23次調査地点で確認した河道の流路を推測するためのデータを得ることができた。この河道は東から西へ西流していたものが総合研究棟の調査地点で蛇行し、北東から南北に向かって南流すると考えられるようになった。これは弥生時代の堰と導水路が河道の攻撃斜面に築かれたことを補強するデータである。

第25次調査地点では、中・近世の東西方向の水路2条を確認した。現在、大学構内を東西に貫流する座主川は今回確認した東西方向の水路の流路を踏襲していると考えられ、座主川の形成された時期および、現在の岡山市街北部における正方位の地割が中世段階まで遡ることを示唆するものである。また、弥生時代前期の鍵層である黒色土層以下の堆積状況をみてみると、本調査区の北側約25mに位置する第23次調査地点における弥生時代前期以前の河道の堆積状況と極めて近似している。この堆積状況は本調査区が総合研究棟調査地点の河道流路に連続する地点であることを示すものである。

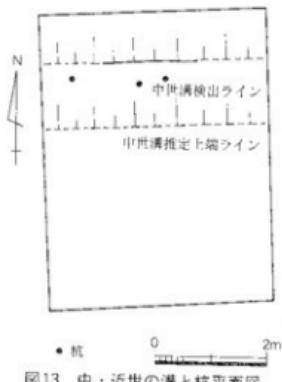


図13 中・近世の溝と杭平面図
(第25次調査) (縮尺1/100)

第23、24、25次調査地点は津島北地区のなかではこれまでほとんど調査が行われてこなかった地点であり、津島北地区南西の地域にも微高地が広がり、遺構が分布していることを明らかにすることことができたこと、縄文時代後期、弥生時代前期の河道利用状況を明らかにすることことができたことは大きな成果であった。

なお、本概要報告は調査成果のほとんどが未整理の段階であるため、その内容は暫定的なものであることを断っておきたい。

(野崎貴博)

註

- 1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『岡山大学構内遺跡調査研究年報』17 pp. 19-22 2000年
- 2) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『岡山大学構内遺跡調査研究年報』17 pp. 7-9 2000年
- 3) 小村豊「近畿・瀬戸内地域における石棒の終焉」『縄文・弥生移行期の石製呪術具』3 pp. 49-80 2001年
- 4) 埼玉県教育委員会「大内能記帳層遺跡発掘調査報告書」1984年
- 5) 広瀬和雄「墓と水路」『弥生文化の研究』2 pp. 39-53 1988年

(2) 津島岡大遺跡第26次調査（事務局本館新築工事に伴う発掘調査 津島南 BC ~ BD 14・BC ~ BD 15）

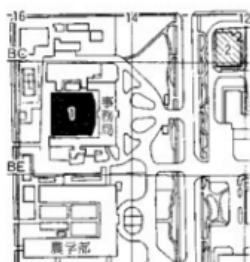
a. 調査にいたる経緯

老朽化の進む事務局本館の新築が、現在の本館建物の西側に計画された（図14）。1983年度と2000年度に行った試掘・確認調査の結果から、本地点が埋蔵文化財の調査対象範囲となるため、発掘調査を実施することとなった。

b. 調査の経緯と経過

2001年3月14日から重機による造成土の除去を開始した。試掘・確認調査の結果から、近世および中世層は洪积砂の堆積によって形成された遺構・遺物とも希薄であると判断した。そこで調査区の周囲に上層観察用の上手を残して、中世と近世の上層までは、造成土とともに重機で掘削した。造成土の除去は3月22日に終了した。

発掘調査は2001年3月26日に始まった。2000年度は、造成土除去後の調査開始面での清掃を行って終了した。



1. 本調査地点 2. 第14次調査地点
図14 第26次調査地点位置図
(縮尺1/5,000)

(横田美香)

2 鹿田地区

(1) 鹿田遺跡第12次調査 〈医学部附属病院エネルギーセンター 鹿田 CO ~ CV 35~44区, CN・CM 38~41区, CN 28~38区〉

a. 調査に至る経緯

鹿田キャンパスでは医学部附属病院の病棟建設に伴って、1998年度からⅠ期工事分の敷地において第9次・11次の発掘調査を行ってきた。今回は、それに引き続いて、病棟に附属するエネルギーセンター建設予定地の調査を行うこととなった。

発掘調査区は、本体部分（A地点）と共同溝部分2カ所（B・C地点）とに分かれている。各調柶地点は接しているが、通路確保のために、それぞれを順次行うこととなった。また、調柶に先立って、A地点にある既設建物の撤去が必要であった。撤去に際しては、包含層の破壊をできる限り避けるため、表土掘削時に建物の基礎底部を残し、調柶終了後にその部分を撤去して下部の確認を行うこととした。

b. 調柶の経過

B地点（共同溝1地点）においては2000年10月2日に造成土取りを行い、3日から発掘調柶

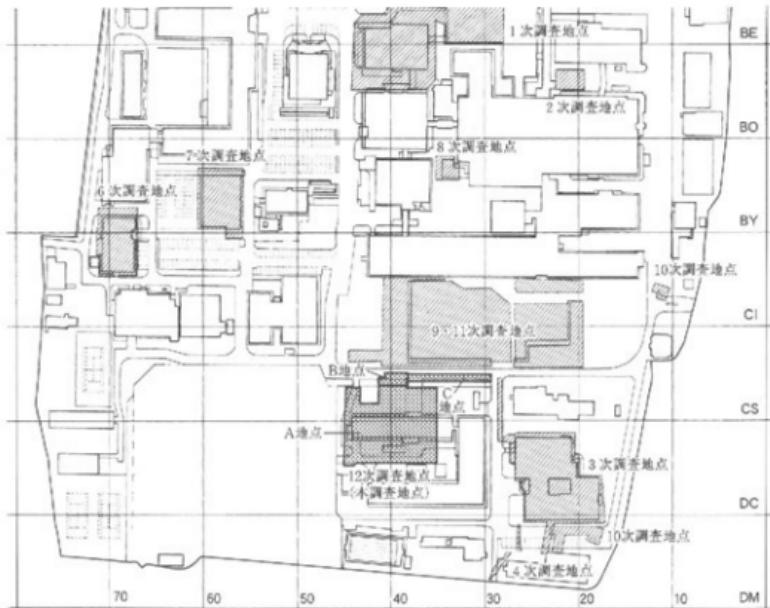


図15 鹿田遺跡発掘調柶地点図 (縮尺1/3,000)

を開始した。調査範囲内には擾乱坑が多く認められたが、近世から弥生時代までの遺構を確認し、10月26日に調査を終了した。

A地点（本体部分）では、10月6日から表土掘削を始めた。ただし、通路の関係から、B地点側の一部を残した状態で、表土掘削の一段階を終えた。16日から開始した発掘調査は、当初、南側約2/3の範囲を調査対象として調査を進めた。その後、B地点の調査終了を受けて、11月6日～14日に残りの表土掘削を完了し、近世遺構面で全体の進行状況をあわせることができた。その後、中世から弥生時代に至る遺構群を調査し、2001年3月14日に手掘りによる調査を終了した。15日に重機で下層の状況を確認し、全ての作業を終了した。最後に、建物基礎の撤去にともなう下層の遺構確認を行った。

C地点（共同溝2）は、A地点の調査終了後、2001年3月14・15日に造成土を除去した。19日から発掘調査を開始し、5月10日にすべての作業を終了した。

調査期間は全体で2000年10月2日～2001年5月10日である。調査面積はA地点で1606m²、B地点で67m²、C地点で224m²をそれぞれ測り、全体では1897m²である。調査員は、A地点で4名、B・C地点で1～2名が調査にあつた。

なおC地点に関しては、一部、2001年度にわたって調査が行われたが、調査の継続性から本年報で報告することとする。

c. 調査概要

① 調査地点（図15） 発掘調査地点は、鹿田キャンパスの東南部分に当たる。1986年に発掘調査を行った第3次調査地点の西側、そして1998年～1999年に調査を実施した第9・11次調査地点の南側に隣接する場所である。敷地内の南北部には、旧看護学校宿舎の建物が建っていた。構内座標では、A地点は鹿田 CO～CV 35～44区、B地点は同 CN・CM 38～41区、C地点は同 CN 28～38区の範囲を占める。

② 層序（図16） 1層：現地表面は標高2.1～2.3m（以下、標高を略す）にあり、約40～50cmの厚さに堆積する造成土である。

2層：淡灰色の粘質土で近代の耕作土である。上面は1.2～1.4mにある。

3層：灰褐色から緑灰褐色の砂質土である。細分可能であるが、全体として近世の耕作土としてとらえている。調査区東半部にのみ堆積が認められ、西側では削平されて消失したと考えられる。時期は中世末まで遡る可能性もある。上面レベルは1.15～1.2mである。

4層：やや緑色がかった灰褐色系の上で中世の包含層である。調査区西半の微高地部では二分され、それぞれが遺構面をなす。東半部では完全に削平された部分も多い。上面レベルは1.05～1.3mである。

5層：灰褐色系の土層である。上面では古墳時代初頭・古墳時代後期・中世の遺構が検出され

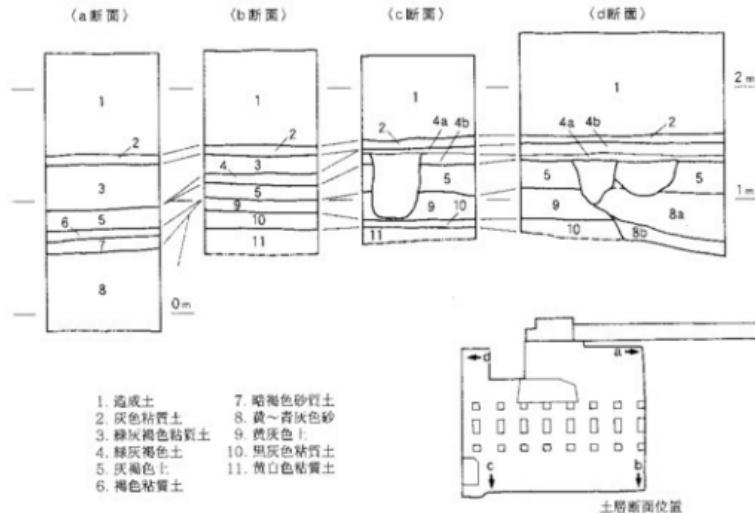


図16 鹿田遺跡第12次調査土層断面図 (縮尺1/50)

たが、出土遺物から古墳時代初頭の包含層と判断される。こうした状況から、上部が中世以降に大きく削平されたことが窺われる。上面は西半部で1.1~1.15m、東半部で0.7~0.95mに位置する。

6~8層は調査区の北半部にのみ堆積する。8層は河道内に堆積した土層群である。河道は出土遺物が僅少のため時期の特定は今後の課題であるが、弥生時代中~後期に属する可能性が考えられる。

6・7層：6層は褐色の粘質土、7層は暗褐色の砂質土である。いずれも水田耕作に関わる上層で、それぞれ上面において関連遺構を検出した。上面は0.55m前後、0.45m前後に位置する。

8層：黄～青灰色あるいは黒灰色を呈する砂層である。調査区北半部に確認した河道の埋土を一括している。上面は0.35m前後にある。

10~12層は河道に切られる形で調査区の両側に堆積する。出土遺物は認められないと、時期は弥生時代の範疇で考えている。

10層：黄灰色土である。上面は0.8~0.9mにあり、遺構がわずかに検出された。

11層：黒灰色粘質土で、明瞭に他と区別される。0.6~0.7mにある上面では遺構が検出された。

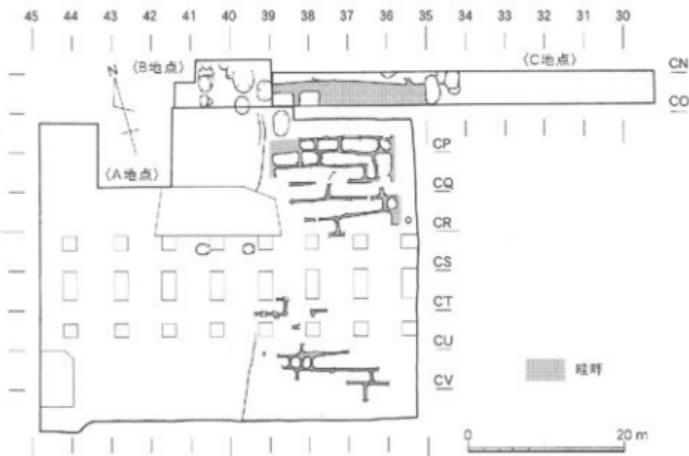


図17 近世の遺構全体図 (縮尺1/700)

12層：黄白色粘土層で基盤層と判断される。上面は0.5m前後にあり、遺構が認められた。

(③) 遺構・遺物（図17～20） 検出した遺構の所属時期は、近世、中世、古墳時代後期、古墳時代前期～弥生時代にまとめられる。各時期ごとに概要をまとめてみよう。

近世・近世～中世末（図17） 土坑21基と水田関連遺構（胎群など）2面を3層において検出した。土坑はCRライン付近以北（B・C地点からA地点の北半部）に偏在する傾向を示す。特に、CN～COラインに集中する土坑群は、南北方向の軸を有し、二群に分かれる可能性が高い。B地点では1基の土坑から塗りの櫛が出土した。

水田関連遺構は、A地点の東半部（36～39ライン付近）で検出したが、一段高い地形を示す西半部では未確認である。近世以降の上部削平によって消失した可能性も考えられる。水田胎群は幅25cm前後・高さ8cm程度が残存し、東西方向の胎群が明瞭であった。

中世（図18） 4a・4b・5層の各上面において、井戸4基、土坑3基、柱穴約200基、溝10数条と小溝を検出した。所属時期は鎌倉時代を中心とする。

井戸と柱穴群はA地点の南西部、CTラインと40ラインに囲まれた南西部に広がる。2基の井戸では組み合わせ式の井戸側が残存していた。

溝は、方向・配置場所・切り合い関係などから二時期に大別される。

新段階の溝は、南北方向の構内座標軸にはほぼ平行し、39ライン付近以西に集中する。その東端にあたる39ライン付近を南北に走る溝は最大幅4m・深さ80cmを有し、他の皿状の掘り方を呈す浅い溝と際だった差を見せる。同位置は遺構集中分布域の東端部に当たっており、屋敷地の境界を示す主要な溝の可能性が高い。

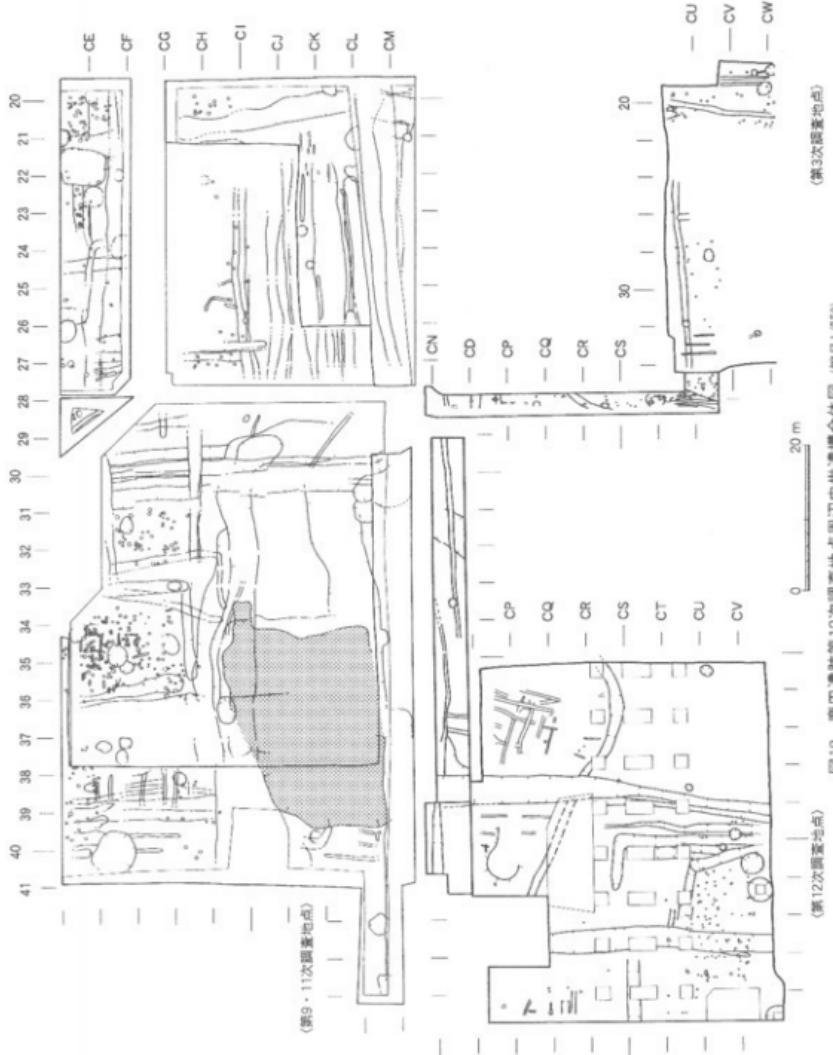


図18 越田遺跡第12次調査地点周辺中世遺構全体図 (縮尺1/750)

古段階の溝はA地点の北東部に集中する。北西—南東方向を示す。同溝群の南端に位置する溝は、規模や周辺の状況から用水路的機能が想定されるが北側に集中する溝群はいずれも規模で耕作に関わる溝の可能性も強い。時期については、出土遺物が少量であり詳細は不明であるが、新段階に属する溝群との相違点から今後慎重に時期決定を行いたい。

古墳時代後期（図19） 5層上面において溝10数条を検出した。幅約50cm・深さ40cm前後の規模で、U字形の掘り方を有する溝が中心を占める。方向は北東—南西を示し、中世の溝とは明らかに異なる。

古墳時代初頭～弥生時代（図19） 検出遺構として土坑4基、土器窪まり1カ所、溝10数条、水田・畦畔などが挙げられる。そのほかには河道を確認した。河道は調査区中央部を北西—南東方向に走る。検出面は10層上面である。

河道の北側では、6・7層において弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられる水田畦畔状の高まりと溝群を検出した。高まりの北側を数条の溝が巡り、削り残された基盤層が畦畔状を呈している。この高まりの南側には、やや規模の大きな溝が断片的に確認された。

河道の南側では、土坑4基・上器窪まり1カ所・溝数条を検出した。検出面は、5・9・10・11層上面に求められるが、5・9層の遺構が古墳時代初頭、10・11層の遺構が弥生時代ととらえている。後者に属する遺構は溝数条のみである。土坑の性格は、その規模から井戸が有力であるが、湧水砂層まで掘り抜いていない場合も多く、今後慎重に検討を進みたい。

d.まとめ

本調査の成果を、鹿田遺跡全体の中で時代別に考えてみよう。

① 中世 鹿田遺跡全域に集落の広がりが想定されているが、北側に隣接する第9・11次調査地点との関係から、井戸や建物群の集中域が約60m程度の間隔で存在することが確認された。第3次調査地点の状況からも同様の距離を認めることができる。今後、時期的な問題を詰めることが必要ではあるが、東西南北でそれぞれ一定の距離を保って屋敷地が配される状況を復元することはできそうである。こうした区画には大小の溝が用いられ、主要な境界に配された大形の溝の中には、近世にまで続く場合があることも改めて確認できた。

② 古墳時代後期 本時期に属する遺構の出土例は、第1次調査地点における住居などの集落関連の遺構がわずかに確認されるのみであった。今回、用水路的機能が考えられる溝群が集中して検出されたことは、同時期の状況を考える上で重要な成果である。

③ 弥生時代～古墳時代初頭 これまでに水田関連遺構が確認された地点は、第7次調査地点の一部、第8・9・11次調査地点であったが、今回の調査によって、その広がりの南端部をおさえることができた。さらに、古墳時代初頭の集落に関して、第1～2次調査地点付近のはかには第7次調査地点で確認される程度であったが、今回の調査によって南への広がりがとら

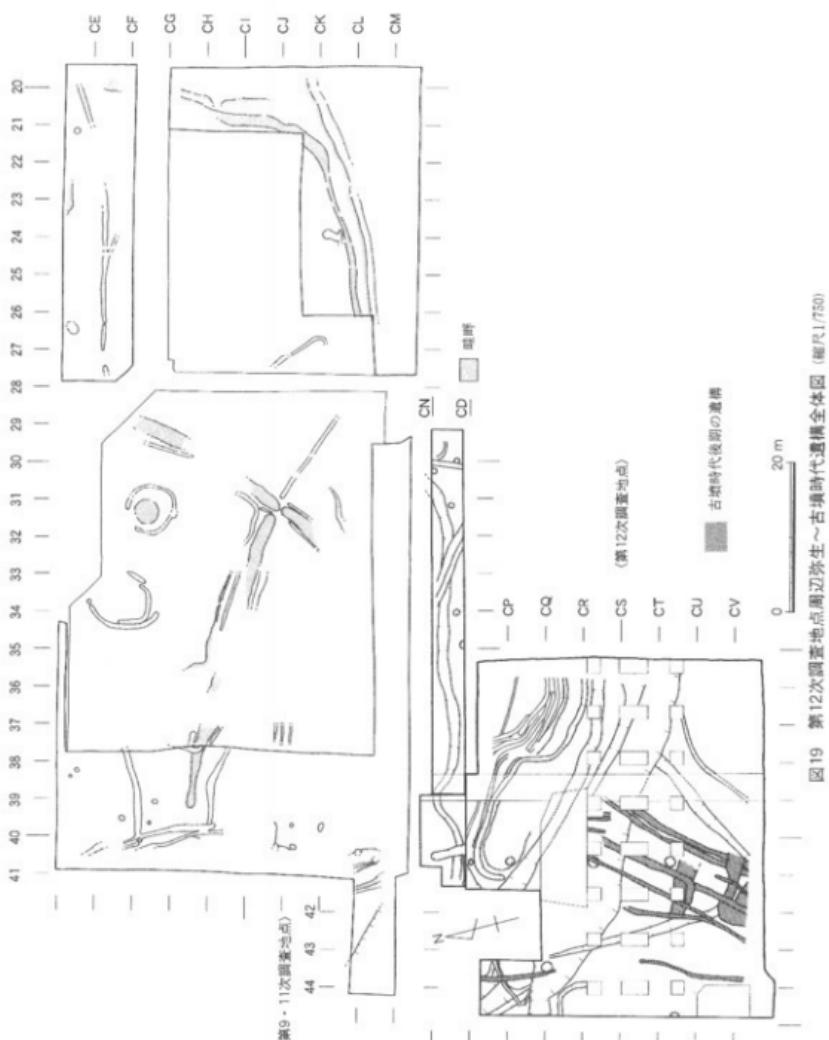


図19 第12次調査地点周辺弥生～古墳時代遺構全体図 (縮尺1/750)

えられた。本地点の北側に当たる第9・11次調査地点では集落痕跡が認められないことや水田域の分布状況を考え合わせると、庭田キャンパス中央部付近に東西にのびる水田域が、その周縁部に古墳時代の集落が立地するという概略的な復元が想定される。このように、本調査での成果は同時期の様相を面的に理解する上で重要と言えよう。

以上が今回の調査成果についての概要であるが、いずれも現段階での暫定的な報告であり、正式な報告は今後の整理・分析後としたい。
(山本悦世)

第3節 試掘・確認調査

本年度は、津島地区において2件の試掘・確認調査を実施した。以下、概略を記す。

1 津島岡大遺跡における縄文～弥生時代の環境復元に伴う試掘・確認調査（津島北 AV 00, AX 00・02・03, AZ 06, AW 08）

a. 調査に至る経緯

津島岡大遺跡では、1982年度の第1次調査以来、現在までに23次に及ぶ発掘調査あるいは試掘・確認調査を行い、多大な成果を上げている。特に、縄文時代～弥生時代前期における遺構・遺物の状況は特筆に値する。

今回、「縄文時代の環境復元」を目的とした研究が文部省科学研究費（一般研究C）によって認められた。その中で調査対象とした地区は、津島岡大遺跡のなかでも縄文時代の遺構密度が最も高く、学内において遺跡保護区として設定した地域周辺であった。そのため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターでは業務との関係が強いと判断し、構内遺跡の遺構分布状況を確認する目的も兼ねて調査を実施することとした。調査経費は文部省科学研究費によるものである。

b. 調査の経過

2000年8月3～4日にT1～6の6箇所に試掘坑を設定した（図20）。調査は研究代表である山本悦世と研究協力者である横田美香が担当し、センター職員が随時協力した。

本調査では、縄文時代における遺構分布状況の確認と地形復元のほかに、環境復元へのアプローチとして土壤分析を行った。専門家に土壤のサンプリングから、プラントオパール分析・花粉分析・年代測定の各分析を依頼した。ここでは、試掘・確認調査から得られた土壤堆積状況とそこから復元される地形などを中心に概要を述べる。

c. 調査の概要

① 層序（図21）

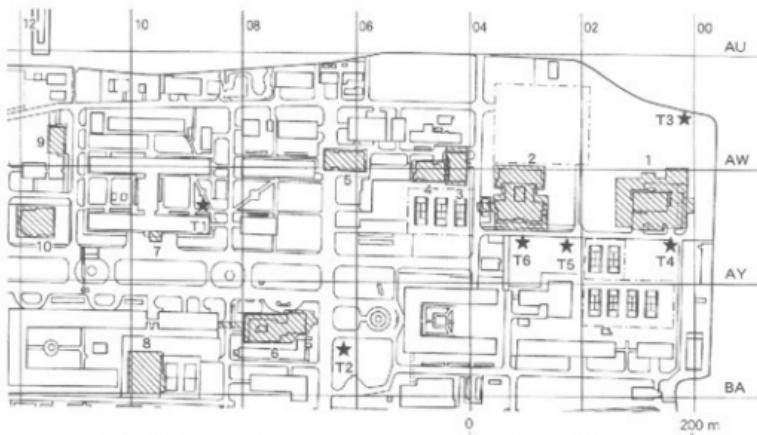


図20 試掘・確認調査地点 (縮尺1/500)

1層： 明治40～41年以降に堆積した造成土の一群である。津島キャンバスには同年に旧陸軍屯営地が設営される際に1m前後の盛り土がなされた。その造成土を主体とし、それ以降に施された造成土をまとめて1層と捉えている。

2層： 淡青灰色系の土である。粘性は地点によって異なるが、造成土直下に広がる明治期の水田耕作土である。

3層： 一部で（T 3）粘性を強めるが、基本的には灰色系の土層で、地点によっては鉄分の沈着の影響などで、黄色や褐色をおびる。鉄分やマンガンの沈着の度合いや粘性の違いで細分が可能であるが、全体として近世の耕作土と見られる。

4層： 灰色の粘土層あるいは粘質土層である。やはり、鉄分の沈着で一部黄色をおびる部分も認められる。T 3以外では中世の水田耕作土と考えられる。

T 3では、近世土層以下において灰色粘土層が厚く堆積しているが、包含物や土層のしまり具合などから、中世段階以前の河道あるいは谷部の埋土と考えられる。ただし、最上層の4a層に関しては中世耕作土の可能性が残る。

5層： 灰色の粘土層である。4層よりは粘性が強い。一部の地点では、鉄分やマンガンの沈

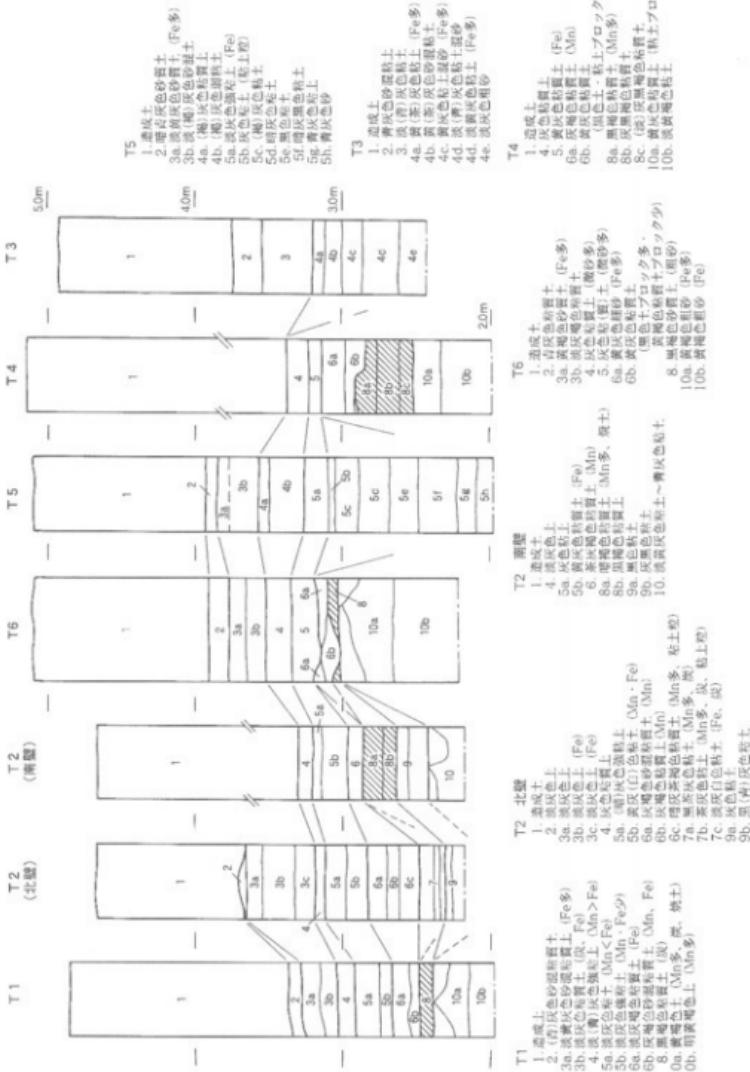


圖21 土層斷面圖 (縮尺1/40)

着の度合いや粘性の違いで細分される。従来の成果から、古代の水田耕作土の可能性が高いと判断される。ただし、分層される場合、下半は古墳時代後期の可能性を考えている。

T 5 では、5 a 層以下に非常に軟質の粘土を中心とした上層が連続的に堆積する。それぞれの特徴から 5 b ~ 5 h 層は古代に埋没した溝あるいは河道・谷部の埋土と判断される。

6 層： 弥生時代（～古墳時代前期）の堆積土を一括した上層で、堆積時期や性格によって三群に大別される。一つは新しい段階に堆積した褐色系の粘質土層群である。T 1 の 6 a · 6 b 層、T 2 北壁の 6 層、T 4 の 6 a 層がこれにあたる。古い時期の土層群は、8 層にあたる「黒色土」をブロック状に含む黄灰色粘質土層であり、T 6 の 6 b 層と T 4 の 6 b 層が含まれる。これらの二群は水田耕作土の可能性が考えられる。もう一つは、T 6 の 6 a 層で、6 b 層を覆う細砂層として、他とは区別される。

7 層： 灰色系の粘土層である。T 2 北壁のみで確認された。河道内埋土と考えられる。時期は弥生時代前期と想定される。

8 層： 弥生時代早期～前期に形成されるいわゆる「黒色土」にあたる。黒褐色系の土層で、地形によって粘質土から砂質土まで粘性に強弱の差が認められる。

9 層： 灰色あるいは灰黑色系の粘土層で、T 2 のみで確認された。8 層の下から河道内に向けて堆積する土層で、弥生時代早期の段階が予想される。

10 層： 繩文時代後期の包含層あるいは基盤層に想定される。色調は、一般的には黄褐色系の土層であるが、粘性が強い地点では黄灰色を呈する。粘性は粗砂から粘土まで地点によって異なる。また、T 1 · T 2 北壁 · T 6 では、粘土ブロックや炭・焼土などの包含が認められ、包含層になる可能性が考えられる。

② 各試掘坑の状況

試掘坑は、上端で 3 m × 3 m 程度の規模で、T 1 ~ T 6 の 6 個所を設定した（図20）。

T 1： T 1 は津島岡大遺跡第21次調査地点の北側に設定した。同調査地点において縄文時代中～後期にさかのぼる遺構が検出されたことから、古い時期の礎高地の存在を確認することを目的とした。

地表下 2.8 m 程度までを掘削した。本地点の北には丘陵残丘があり、地形的に上昇するのではないかと予想していたが、10 層上面（縄文時代対応上層）は標高 2.45 m（以下標高略す）、8 層上面（弥生時代前期対応）は 2.5 m と相対的に低い数値を示し、第21次調査と同様の状況が広がることを確認した。地形の高まりは本地点より北にあるようで、比較的急峻な高まりとなると考えられる。

T 2： T 2 は、第5次調査で検出した縄文時代の河道と礎高地の広がりを確認するため、同調査地点の東側に位置する教育学部入口の駐車場に設定した。

ここでは、弥生時代前期以前の土層堆積状況が南壁と北壁で異なる。南壁では、10層上面は2.45m程度に位置し、縄文時代はT1と同様に低い状態を示す。しかし、弥生時代前期にあたる8層では約2.85mとかなり高い数値となり、微高地が本地点の南側に安定していることが想定される。一方、北壁では8層・10層は堆積していない。時期的に8層に対応する7層上面のレベルは2.5mで、南壁とは大きな段差を示す。7・9層の土質からも、同地点が弥生時代前期までは河道内にあたっていたことは明らかである。両壁面の変化から、北側に広がる河道の肩部が本地点にあることが確認された。

T3： T3は朝寢鼻貝塚から南に20m足らずの位置に設定した。半田山丘陵裾付近に立地する朝寢鼻貝塚と沖積部に広がる津島岡大遺跡との地形的つながりを把握することが目的であった。

本地点では、中世以前の段階まで河道あるいは谷状地形の堆積上が厚く認められ、丘陵端部をめぐる谷部分にあたることが判明した。朝寢鼻貝塚と津島岡大遺跡との間には深い谷の存在が想定される。

T4： T4は第3・15次調査地点の南側に設定した。同調査において確認した弥生前期水田土層のサンプリングと地形変化を調査するためである。

本地点では、従来の知見と同様の十層堆積が認められ、弥生前期水田と想定される上層の安定した広がりを確認した。地形的には、10層が粘性を強める点や8・10層上面レベルがやや低い点から、第15次調査地点周辺から南に向けてやや下降する傾向があることも指摘される。

T5： T5は第3・15・17次調査地点の南側に設定した。第3・15次調査地点で調査した縄文～弥生時代前期の河道の位置をさぐる目的であった。しかし、試掘地点は古代に埋没した谷状地形の中にあたったため、古い段階の状況は確認できなかった。

この谷状地形の性格に関しては、調査範囲が狭小であるため不明瞭ではあるが、古代の大形溝で条里関連遺構となる可能性も考えられる。

T6： T6は第17次調査地点で調査した縄文時代の微高地の状況確認などを目的とし、環境理工学部校舎の南側に設定した。

上層の堆積状況は前回の調査と共通し、縄文～弥生時代前期の微高地が南に広がることが確認され、8層（黒色土）上面には駐畔の可能性を有する高まりも認められた。また、本地点での10層（縄文時代）上面レベルは3mで、他の調査地点とは際だって高い数値を示し、8層（弥生時代早期～前期）においても3.05mと高い状態が維持されており、各時期の中心的微高地であることが確認できる。

③ 地形の変遷

〈縄文時代〉

当該期の土層が確認されたのはT 1・T 2・T 4・T 6においてである。

縄文時代後期対応土層（10層）上面のレベルを比較すると、T 6では約3mを測るのに対して、T 1・T 2南壁・T 4においては2.4～2.5mと、T 6の高まりが際だつ数値を得た。両者間には50～60cmの比高差を生じており、T 6地点に核となる微高地が存在することが明確となった。ただしその広がりは、T 6とT 4の差に見るように、南に一律に広がるものではないことも指摘できる。また、T 2とT 1の間に河道が、そして、T 3周辺に半田山丘陵裏をめぐる谷が入り込んでいることも確認された。

さらに従来のデータを合わせると、本遺跡を中心となる微高地は第17次調査地点からT 6地点にその広がりを想定できる。また、この微高地は大小の河道を含みつつ、第3・15次調査地点方向に続くことが予想され、同地域の地形的安定性と検出遺構の密度の高さに必然性を見るこどもできよう。

一方、河道あるいは谷状地形の広がりを見ると、第3・15次調査地点からT 2へ、そして第5次調査地点へ流れる河道の存在と、半田山丘陵と本遺跡との間に深い谷状地形が想定できる。朝霞鼻貝塚とはその谷をはさむ関係になろう。

中期に関しては、データ的に依然不十分であり、地形的評価については今後のデータの蓄積が必要となろう。

〈弥生時代〉

早期～前期：微高地部を形成する8層（黒色土）が堆積するのは、T 1・T 2南壁・T 4・T 6である。上面のレベルが最も高い数値を示すのはT 6の地点で、3.1m程度。T 2南壁とT 4では2.9m前後である。縄文時代と比較すると、その比高差は約60cmから20cm程度までに縮小している。しかし、位置がやや離れるT 1では上面レベルは2.5mを測り、その差は依然として60cmを保つ。こうした状況から土層の堆積は均一ではなく、縄文時代の微高地（T 6）縁辺を中心に有機質を多量に含む上層の堆積が急速に進むことが想定される。その結果、T 6周辺に広がる微高地は面積的にも安定感を増し、その土層上に水田が形成されていくのではなかろうか。

河道部をみると、9層はT 2南壁から北壁にかけて堆積しており、微高地縁辺部から堆積が進み、前期にはほぼ埋没する状況が看取される。その他に、T 3にみられる丘陵裏部に広がる谷地形についてはかなり深い谷であったことがうかがわれる。

中期以降：6層がこれにあたる。6層上面はT 6・4で3.2m、T 2南壁で約3m、T 2北壁で2.85m、T 1では2.65mとなり、T 6から東に向けて平坦な地形が広がることを示す。西に向けても、徐々に下降傾向は見られるが、15～20cm程度の比高差にとどまる。前段階の地形と比較すると、低位部における土層堆積の進行が顕著に認められ、全体的な平坦化の進行が想定さ

れる。

〈古墳時代～近世〉

弥生時代中期以降に形成された地形がほぼ踏襲されており、この地形がただ単なる自然地形というよりは、耕作地の形成を背景とする地形であることを窺うことができる。T3において広がっていた谷状地形は、近世段階には耕作地に変化すると考えられる。

d.まとめ

今回の確認調査によって、津島岡人遺跡の北東部における地形変化を復元する上で、一定の成果を得ることができた。

縄文時代後期には、周辺とかなりの比高差を有する微高地の存在が、ある程度限られた範囲で確認できた。津島岡人遺跡第17次調査にみる集落の広がりと同遺跡第3・15・21次調査で確認された遺構の分布状況の差を理解する上でも、整合性の高いデータといえる。朝寝鼻貝塚との関係は、津島岡人遺跡との間に谷状地形が広がっており、直接につながる地形は確認できなかった。しかし、当時の起伏の激しい地形を考えると、その谷が実際の生活にどれほどの隔絶をもたらすかはそれほど大きな問題とは考えにくい。土地利用を考える上で、それぞれの立地を考慮することでより具体的な実像復元に近づくことができよう。

弥生時代早期～前期では水田城と地形との関係をおさえることができた。前段階の微高地縁辺部に有機物を多量に包含する土層の堆積が進むことによって、面積的にもレベル的にも安定した新たな微高地が形成され、水田はそうした土層上に確認されている。土壠の特性が選択された可能性も否定できないが、平坦で一定の面積が確保できるという地形的特性が選択の背景にあったことも窺うことができよう。

また、耕作域に関わる問題では、弥生時代後期以降の地形に共通性が高いことから、遅くとも弥生時代後期には全面的に水田耕作が可能な程度の平垣地形が形成され、以後踏襲されていくことが想定できる。弥生時代後期における耕作地の拡大、そして生産性の上昇を示すデータとして重要な成果であった。

(山本悦世)

2 津島地区事務局本館他予定地試掘・確認調査（津島南 BB 14）

a. 調査に至る経緯

岡山大学では、事務局本館の老朽化に伴い、本館を新築する事になった。そのため、遺跡の状況を把握する必要性が出てきた。

試掘地点は現在の事務局建物の北側に広がる縁地帯に位置しており（図22），この付近では発掘調査や試掘・確認調査を実施していない。しかし、周囲では外灯埋設工事などにともなう立会調査を行っており、予定地付近にも弥生から縄文時代の包含層が存在することが想定でき

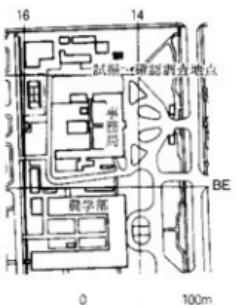


図22 調査地点位置図 (縮尺1/5,000)

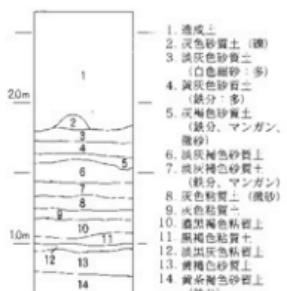


図23 土層断面図 (縮尺1/50)

た。

こうした状況から、包含層の厚さや遺構の存在などを確認するために試掘・確認調査を行うことになった。調査は2000年12月21日に行い、調査員1名がこれを担当した。

b. 調査概要

試掘坑は上面で一辺2mを設定した。掘削は重機を使って行い、地表下-2.1mまで掘り下げた。その後断面を精査し、観察と記録を行った。(図23)

造成上厚は65cm～75cmをはかる。現地表の標高は3.65mである。

2層・3層は近代の耕作土である。4・5層は灰色の砂質の強い上層で、特に4層は鉄分の沈着が顕著であった。近世に帰属すると考えられる。6・7層は、砂質土であるが、4・5層よりもしまりがよい。時期は中世と考えられる。8層は灰色の粘質土である。9層も同じく灰色の粘質土であるが、8層よりも粘性が強い。8層は古代に、9層は古墳時代後期頃に帰属するであろう。

10層は津島地区一帯に広がるいわゆる「黒色土」で、弥生時代前期～早期段階の土層である。11層は10層と似ているが、色調が若干薄かったため一応区別した。12層は淡黒灰色の粘質土である。13・14層は黄褐色の砂質土で、縄文時代後期に帰属する。

中世から近代までの十層は全体に砂質が強く、調査地点の北側を流れる座主川の洪水などの影響を受けている可能性が考えられる。遺構や耕作に伴うと考えられる土層は確認できなかつた。縄文時代から古代にかけての上層でも、遺構などを確認することはできなかつた。また、遺物もほとんど出土しなかつた。少なくとも試掘用のトレーンチを設定した地点では、遺構・遺物とも希薄と言えよう。しかしながら、本試掘地点の北約80mに位置する第23次調査地点では、縄文時代後期の河道から杭列が見つかっている。該期の遺構が、建設予定地内で見つかる可能性は十分に残されている。

(横田美香)

第4節 立会調査

1 津島地区（表1）

2000年度の津島地区における立会調査は、計31ヶ所で行っている。立会調査の多くは掘削深度が浅く、造成土内で掘削がとどまっていた。ここでは特記すべき状況が確認された調査について詳細を記す。なお、その他については表1に明記した。（第1節1～3頁）

調査8は、ジェイフォン中国株式会社津島自動車・携帯電話基地局ボーリング接地工事建柱工事施行に伴う立会調査である。津島北地区北辺の工学部精密応用工学科別棟の西側に残る残丘の部分において掘削が行われた。掘削深度は2.7mで、すべて地山である。

調査21は、理学部校舎改修電気設備工事に伴う立会調査である。この地点は理学部校舎の南東に位置するコラボレーションセンターの北西の位置にあたる。この地点では地表下約1.5mで南東から北西方向に向かって走行する溝1条を検出した。溝の埋土は明灰色砂質土である。コラボレーションセンター建設に伴う発掘調査の際にも同様の埋土を有し、南東から北西方向に走行する溝を数条検出しており、今回の立会調査で確認した溝もこれらの溝のいずれかに連接するものと考えられる。

（野崎貴博）

2 鹿田地区（図21～27、表1）

2000年度の鹿田地区の立会調査は、計12ヶ所で行ったが、多くは掘削深度が浅く、造成土での掘削にとどまった。その中で、調査47については、用水路の護岸工事に伴い鹿田地区の南辺を約200mにわたって掘削した（図24）。距離は長いものの、古い護岸の石垣を重機で撤去する際に壁面が若干破壊される程度だったため土層断面の記録に重点を置いて、立会調査で対応することとした。調査47は2001年1月15日から3月7日まで、工事の進行状況に応じて随時立ち会った。

以下、調査47について詳細を述べていく。

- ① 層序と地形 調査区間中の土層の堆積状況は、大きく図25の①～④の四つに区分することができる。はじめに①区間の土層についてみていく。1層は造成土である。2層は茶灰色砂質土で細礫を含み、鉄分の沈着が顕著である。3層は青灰色砂質土である。4、5層は黄灰色砂質土で、鉄分とマンガンの沈着が認めら

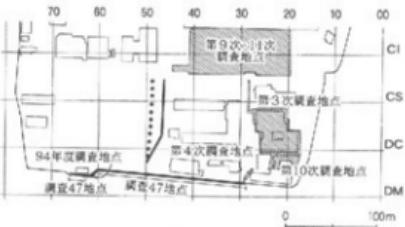


図24 調査47地点位置図 (縮尺1/6,000)

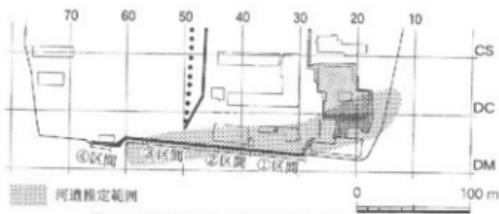


図25 調査区割と河道推定図 (縮尺1/5,000)



図26 ①区間土層断面図 (縮尺1/60)



図27 ④区間土層断面図 (縮尺1/60)

れる。6層は粘性を帯びた灰色砂質土で鉄分の沈着が顕著である。7、8層は灰色砂質土で粗砂を多く含む。9層は灰色粘質土、10層は黒灰色粘土で河道あるいは湿地状の堆積状況を示す。遺構は壁面で溝と思われるものを確認したにとどまった。遺物も土器片が數点程度ではほとんど出土しなかった。この部分については、遺構・遺物ともに希薄な状況であった。

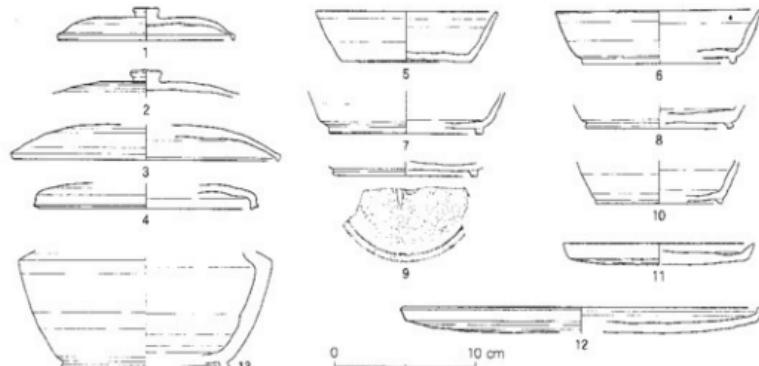
②区間は、1～4層までの土層堆積状況は①区間と同様だった。5層から下層は、①区間でみられたような基本土層が存在しなかった。巨大な遺構、大きな溝か河道が通っていたと考えられる。これらの埋土は灰色または黒褐色の砂質土層や粘質土層などからなる。炭や焼土、土器片を多数含む土層が長距離にわたって認められた。出土する土器は、おおむね古代に位置づけられる。その下層には、黒灰色の粘質土あるいは灰色粘土と粗砂層の互層状を呈する。②区間は遺物が大量に出土し、遺物を含んでいた層も炭や焼土などが含まれることから、付近に古代の集落が存在したことが想定される。しかし、②区間自体は遺構埋土の下層に粗砂層が統き、微高地に立地しているとは考えにくい。

③区間は①区間と似たような土層である。遺構・遺物とも希薄な状況である。①・②区間同

様に河道にあたる部分に位置していたようである。後世の擾乱や、工事中の壁面の崩落のため、記録できた部分は多くない。

①区間は、敵高地上に位置していたようである。1層は造成土である。2層は青灰色砂質土で小礫を含む。3層は緑灰色砂質土で鉄分の沈着が認められた。4層は灰褐色砂質土、5層は灰褐色粘質土である。6層は茶灰色粘質土、7層は暗灰色の粘質土、8層は黒灰色粘質土、9層は灰色粘土層、10層は白灰色粗砂層である。6層と8層は庭田遺跡第9・11次調査で確認された弥生時代の水田層に似る。①～③区間までとは6層以下の堆積状況が異なっている。

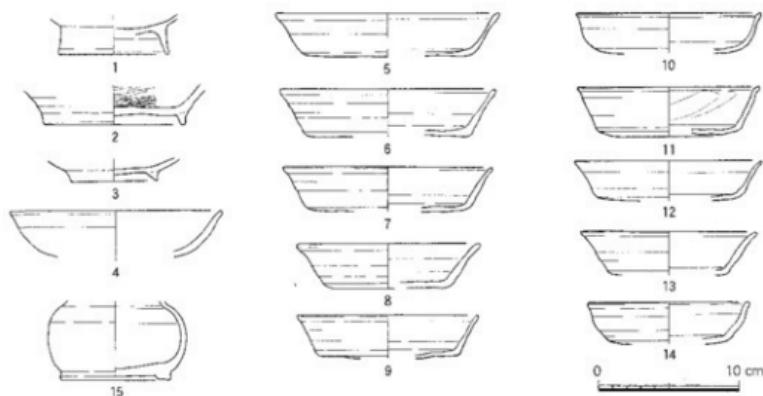
② 遺物 遺物の大半は、②区間の遺構と考えられる埋土の中から出土しており、須恵器の杯・蓋・皿、土師器の杯が中心となる。ここから出土した遺物の時期は、平安時代になると考えられる。ほかには、図示できなかったが竈や甕の破片なども出土している。（横田美香）



遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土
		口	底	径			
1	須恵器 蓋	(12.2)		2.3	横ナデ、天井部外面へラ削り後ナデ、天井部外面自然輪	(内)灰(外)暗灰	精良
2	須恵器 蓋			1.5	横ナデ、天井部外面へラ削り後ナデ	灰	精良
3	須恵器 蓋	(19.0)		2.5	横ナデ、外面周部分へラ削り後ナデ	黄灰	粗砂
4	須恵器 蓋	(15.0)		1.8	横ナデ	灰褐	精良
5	須恵器 杯	(12.8)	(9.3)	3.6	横ナデ、底部外面へラ切り、内面自然輪	灰白	精良
6	須恵器 杯	(14.6)	(10.0)	3.8	横ナデ、底部外面へラ削り後横ナデ	(内)灰(外)暗灰	粗砂
7	須恵器 杯		(10.9)		横ナデ、底部外面へラ削り	灰	粗砂(少)
8	須恵器 杯		(9.6)		横ナデ、底部外面へラ削り	青灰	精良、微砂(少)
9	須恵器 杯		(9.4)		横ナデ、底部外面へラ削り、ヘラ記号	灰～黑灰	粗砂
10	須恵器 杯		(9.0)		横ナデ、外面自然輪	濃灰	精良
11	須恵器 皿	(13.6)		(1.5)	横ナデ、底部外面へラ削り	灰白	精良
12	須恵器 整	(25.0)		(1.8)	横ナデ、底部外面へラ削り後横ナデ、武部内面仕上げナデ	灰白 白灰	精良
13	須恵器 平瓶		(11.8)		外面へラ削り、底部外面横ナデ、内面横ナデ	灰	粗砂(少)

() は復元值

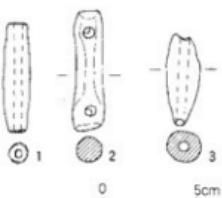
図28 遺物実測図（1）（縮尺1/4）



遺物番号	器種	法景(cm)		形態・手法の特徴	色調	胎土
		口径	底径			
1	土鍋器 梗	(7.9)		外面横ナデ、内面ミガキ	(内) 黒褐色 (外) 黄褐色	精良
2	土鍋器 梗	(10.0)		黒色土器。外面横ナデ。内面ミガキ後擦素吸着	(内) 黑 (外) 黄褐色～褐色	精良 角閃石僅か
3	土鍋器 梗	(6.2)		外面横ナデ、内面は摩滅で不明	(内) 深灰褐色 (外) 灰褐色	細砂(少)
4	土鍋器 梗	(15.0)		横ナデ	棕褐色	精良 精砂僅か
5	土鍋器 杯	(16.0)		(3.0) 横ナデ、底部外面ヘラ切り、内面薄く煤付着	棕褐色	精良
6	土鍋器 杯	(15.2)		(3.4) 横ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。外面丹塗から残る	灰白色	精良 細砂
7	土鍋器 杯	(14.8)		(3.2) 横ナデ、底部外面押圧後ナデ	黄灰白色	細砂僅か 実物 (多)
8	土鍋器 杯	(14.9)		(3.2) 強い横ナデ、底部外面ヘラ削り、内面擦付着	(内) 黑(外) 黄褐色	精良
9	土鍋器 杯	12.8	10.2	横ナデ、底部外面ヘラ切り	(内) 黄褐色 (外) 棕褐色	細砂
10	土鍋器 杯	(11.0)	2.9	横ナデ	淡黒褐色	精良
12	土鍋器 杯	(13.4)		横ナデ、底部外面押圧	淡灰白色	精良
13	土鍋器 杯	(12.4)	3.1	横ナデ、底部外面押圧後ナデ	(内) 淡灰褐色 (外) 茶褐色	角閃石(多)
14	土鍋器 杯	(11.3)		(3.0) 強い横ナデ、底部外面ヘラ削り後ナデ	淡灰褐色	精良 角閃石
15	胸器 壺		7.8	内外面に鉛釉	淡藍灰色	

()は復元值

図29 遺物実測図(2) (縮尺1/4)



遺物番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土錐	5.8	1.4	1.3	ナデ	淡黒褐色	精良
2	土錐	6.5	1.7	1.4	ナデ、上・下端部削り	黄灰褐色	精良
3	土錐	5.0	1.8	1.6	外面削離のため調整不良	淡黒褐色	細砂(多)

図30 遺物実測図(3) (縮尺1/3)

第2章 2000年度普及・研究・資料整理活動

1 資料整理

本年度は次の2件について発掘調査資料の整理を行った。

- ① 津島岡大遺跡第10次調査（保健管理センター）：遺物の実測
- ② 津島岡大遺跡第12次調査（附属図書館）：土器の復元、遺構図整理

2 刊行物

刊行物については、以下の4冊を編集・発行した。

- | | |
|---------------------------------|----------|
| ① 岡山大学構内遺跡調査研究年報 第17号 | 2000年8月 |
| ② 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第24号 | 2000年9月 |
| ③ 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書 | 2000年12月 |
| ④ 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第25号 | 2001年3月 |

3 展示会

2000年10月16日から31日まで、当センターで保管している資料を広く学内外に公開することを目的に展示会を開催した。1989年度、1990年度、1996年度に行った展示会に続き今回で4回目の展示会となる。会場は当センターの展示室を利用したが、新たに棚を設けるなどして、より多く資料が展示できるように工夫した。また、学内外へのビラの送付、ホームページやマスコミ関係を通じての宣伝活動、展示解説のパンフレットを作成するなどの準備活動を行った。

見学者は合計188人であり、小規模な展示会にもかかわらず予想を上回る数の見学者が訪れた。見学者にはアンケートを行い95人から回答を得ることができた（回収率51%）。以下、その結果を報告する。

（1）見学者の内訳について

見学者は学内ののみならず学外からも多く、広く資料を開くことができた。見学者の年齢層については60代の見学者が最も多く、ついで20代の見学者が多かった。60代は学外者が中心で、20代は学内の学生が中心であった。一方、10代以下の若年層と30・40代の中年層の見学者が少なく、今後この年齢層の見学者をどのように増やすかが課題である。

（2）見学者が興味をもった展示 () 内は人数

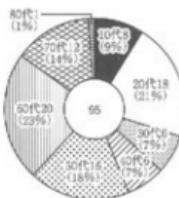


図31 見学者の内訳

- | | | |
|----------------|-----------------|-------------|
| 1. 猿形木製品 (15) | 2. 井戸の木枠 (12) | 3. 井戸祭祀 (9) |
| 4. 墓 (8) | 5. 貯蔵穴の編み物 (6) | 6. 弥生土器 (5) |
| 7. 土層の剥ぎ取り (4) | 7. 繩文時代の装身具 (4) | |

*上位を占めたものは井戸、墓、貯蔵穴の編み物、土層の剥ぎ取りなど遺跡の生の様子を伝えるようなもの多かった。また、土器や石器といった一般的な遺物よりも猿形木製品のような珍しく親近感をもてるようなものに人気があることも分かった。

(3) 展示をみての感想・意見

- わかりやすい展示でよかったです (30)
- 親切でていねいな解説がよかったです (18)
- 自分の住む近くにこのような遺跡があることに驚いた、興味深かったです (9)
- パネル解説がよかったです (3)
- 展示が工夫・整理されていてよかったです (3)
- 展示品を間近にみることができてよかったです
- 実際の発掘現場を見学したくなったり
- 出土状況の写真をもっと展示してほしい

*全体的に好意的な意見が多かった。特に職員が見学者一人一人に展示の解説を行ったのは好評であった。

(4) 普及活動などに関する意見

- 定期的に今後も開催してほしい (11)
- もっと展示会の宣伝を行った方がよい (4)
- 常設してほしい (2)
- 小学生などの学生にもっと展示をみせては

・岡山大学内だけではもったいない
ので他の場所でも展示しては

・遺跡見学会などを企画してほしい

*資料のより積極的な公開が望まれ
ていることが分かった。

(5) 埋文センターの施設に関する 意見

- 展示室をもっと広くした方がよい (5)
- もっと多くの展示品を出してほしい



図32 展示会の状況

い

- ・資料館、学芸員の整備充実を行う必要がある

*展示施設の充実が望まれていることが分かった。

〈アンケート結果から〉

わかりやすい展示で良かったなど全体的に好意的な意見が多かった。また、今後も開催して欲しい、常設を行って欲しいなどの意見も多かったように、より積極的な資料の公開が求められており、このような展示会を定期的に開催するなどして、より一層、資料公開を進めていく必要がある。しかし現在の展示スペースでは展示できる資料に限界があり、施設の充実は今後の課題であろう。

4 調査員の活動

(1) 科学研究費補助金採択状況

山本悦世：平成12年度科学研究費（基盤研究C）「縄文時代の景観復元と生業に関する実証的研究」

野崎貴博：平成12年度科学研究費（奨励研究A）「古墳時代の上製棺の集成的研究」

(2) 資料収集活動

忽那敬三：古墳出土形象埴輪の調査（福岡県吉井町）、古代土器棺の調査（大阪大学）、日本原始絵画資料及び関連文献の調査（広島県、山口県、東京都、福島県の関連諸機関）、人面上器の調査（福島県表揮村）、向日丘陵の古墳踏査（京都府）、丹後半島の墳丘墓・古墳の踏査（京都府）

高田浩司：弥生時代の石器、銅鏡の資料調査（鳥取県、島根県、香川県、徳島県、岡山県）、丹後半島の墳丘墓・古墳の踏査（京都府）

野崎貴博：平成12年度科学研究費（奨励研究A）「古墳時代の上製棺の集成的研究」に関する資料調査（福岡県、熊本県、三重県、大阪府、静岡県、埼玉県、和歌山县、京都府、東京都）、福岡県、熊本県、三重県、京都府、埼玉県、千葉県の古墳踏査

光本 順：向日丘陵の古墳踏査（京都府）、丹後半島の墳丘墓・古墳の踏査（京都府）

山本悦世：縄文～弥生前期土器関連資料の収集（新潟県立歴史博物館、下関市立考古博物館、上井ヶ浜人類学ミュージアム他）

横田美香：縄文～弥生前期土器関連資料の収集（新潟県立歴史博物館、下関市立考古博物館、土井ヶ浜人類学ミュージアム他）

(3) 学会・研究会参加等

岩崎志保：考古学研究会総会（4月）

高田浩司：考古学研究会総会（4月），鉄器文化研究会（9月），考古学研究会第5回シンポジウム（11月）

忽那敬三：考古学研究会総会（4月），日本考古学協会総会（5月），埋蔵文化財研究集会（8月），鉄器文化研究会（9月），考古学研究会第5回シンポジウム（11月）

野崎貴博：考古学研究会総会（4月），日本考古学協会総会（5月），鉄器文化研究会（9月），考古学研究会第5回シンポジウム（11月）

光本 順：考古学研究会総会（4月），鉄器文化研究会（9月），考古学研究会第5回シンポジウム（11月）

山本悦世：考古学研究会総会（4月），中近世備前焼研究会（11月），考古学研究会第5回シンポジウム（11月）

横田美香：考古学研究会総会（4月），考古学研究会第5回シンポジウム（11月）

（4）研究発表他

忽那敬三：「土器棺墓制にみられる未成人の埋葬の変遷」（考古学研究会9月例会）

高田浩司：「弥生時代の銅鏡」（考古学研究会岡山1月例会）

野崎貴博：「津島岡大遺跡における縄文時代・弥生時代の『水場造構』の調査—津島岡大遺跡第23次発掘調査の概要—」（考古学研究会岡山12月例会）

光本 順：「古墳における物と身体の分節法とその論理—副葬品配置の研究から—」（考古学研究会岡山5月例会）

山本悦世：「鹿田遺跡出土の備前焼」第3回中近世備前焼研究会

（5）論文・資料報告

岩崎志保：「山東臨淄戰國・漢代墓葬論述」「渡米系弥生人のルーツを大陸にさぐる」（翻訳）

忽那敬三：「吉備の後期古墳」「第8回東海考古学フォーラム三河大会 東海の後期古墳を考える」

高田浩司：「弥生時代銅鏡の2つの性格とその特質」『考古学研究』第47巻第4号

野崎貴博：「吉備の集団と地域間交流—埴輪と棺から—」「国家形成過程の諸変革」

「造山古墳と小方墳」『古代吉備』第22集

「1999年の動向 古墳時代 中国地方」『考古学ジャーナル』No. 460

山本悦世：「岡山・鹿田遺跡」『木簡研究』第22号

（6）その他（博物館の資料展示に関する実態調査・講演）

山本悦世：東京大学総合研究博物館（3月），講演「縄文・弥生のくらし」（岡山県生涯学者大学講師，5月）

横田美香：東京大学総合研究博物館（3月）

5 日誌抄

2000年

4月3日	忽那敬三助手・高田浩司助手・光木順助着手任、第1回月例会議	10月16日	第4回岡山大学キャンパス発掘成果展開始（10月31日まで）、鹿田遺跡12次調査A区開始
4月6日	第43回運営委員会	10月20日	木器処理第4期分引き上げ
4月12日	建設作業主任者講習受講（忽那・光木、4月14日まで）	10月26日	鹿田遺跡第12次調査B区終了
4月26日	第4回木器処理PEG濃度70%から80%に上昇	11月2日	第8回月例会議
5月1日	第2回月例会議	11月21日	倉敷市に写真貸し出し（11月28日返却）
5月17日	山川出版社にスライド貸し出し	11月30日	自己評価委員会、津島岡大遺跡24次調査造成土掘削
6月1日	第3回月例会議、木器処理PEG濃度80%から90%に上昇	12月1日	第9回月例会議
6月16日	山川出版社よりスライド返却	12月5日	津島岡大遺跡第24次調査開始
6月28日	津島岡大遺跡第23次調査現地説明会	12月14日	津島岡大遺跡第24次調査終了
7月4日	第4回月例会議。	12月20日	発掘調査積算基準説明会に出席
7月10日	年報17号納品	12月21日	津島岡大遺跡事務局本館他予定地試掘・確認調査、室内ワックス掛け
7月25日	木器処理PEG濃度90%から95%に上昇	12月22日	第45回運営委員会、自己評価委員会御用納め
7月28日	津島岡大遺跡第23次調査終了	12月28日	2001年
7月31日	第5回月例会議	1月4日	御用始め
8月1日	文学部博物館実習開始（8月9日まで）、建設作業主任者講習受講（高田、8月3日まで）	1月11日	第10回月例会議
8月2日	センター報24号入稿	1月15日	鹿田撲壁工事の立会開始
8月3日	津島岡大遺跡試掘・確認調査（縄文～弥生時代における環境復元に伴う調査）	1月16日	倉敷市遺物貸し出し
8月4日	津島岡大遺跡試掘・確認調査、古環境研究所によるサンプリング採取	1月25日	木器処理第5期分開始
8月17日	安城市立歴史博物館に遺物貸し出し	1月26日	自己評価委員会報告書入稿
9月4日	第6回月例会議	1月29日	津島岡大遺跡第25次調査開始
9月5日	第44回運営委員会、年報17号納品	1月31日	津島岡大遺跡第25次調査終了
9月8日	センター報24号納品	2月1日	第11回月例会議
9月12日	年報17号・センター報24号発送、第4回岡山大学キャンパス発掘成果展示会・ビラの発送	2月9日	自己評価委員会報告書納品
9月14日	安城市より遺物返却	2月27日	門扉取り付け工事開始、センター報25号入稿
9月29日	第7回月例会議	2月28日	第12回月例会議
10月2日	鹿田遺跡第12次調査B区造成土掘削開始	3月14日	鹿田遺跡第12次調査C区造成土掘削開始、津島岡大遺跡第26次調査造成土掘削開始
10月3日	鹿田遺跡第12次調査B区開始	3月15日	鹿田遺跡第12次調査A区終了、
10月6日	鹿田遺跡第12次調査A区造成土掘削開始	3月16日	センター報25号納品
		3月19日	鹿田遺跡第12次調査C区開始、自己評価委員会報告書・センター報25号発送
		3月23日	倉敷市より遺物返却
		3月26日	津島岡大遺跡第26次調査開始
		3月30日	開　辛代技術補佐員退職

6 2000年度までの遺物保管状況

2000年3月31日における本センターの遺物収蔵量は表2に掲げる通りで、約30リットル収納のコンテナに換算して2496箱である。昨年度から423箱の増加となった。これは沖島岡人遺跡第23次調査、鹿田遺跡第12次調査でそれぞれ130箱前後増加したことと上器の整理作業が進んだことが主な理由である。一方、試掘・立会調査における遺物の出土は少なく、若干の増加にとどまった。遺物保管状況については、依然として発掘調査が連続して行われており、箱数が増加するのは確実である。残りの保管スペースにはほとんど余裕がなく、早急に対応策を講じていく必要がある。

表2 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物一覧

所属・施設	地区	調査者名	箱数(1箱: 約30リットル)					備考	文献
			総数	土器	石器	木器等	種子等		
医病・発掘	鹿田第1次調査 (外来診療報)		663.5	556	7	70	0.5	1	29
" "	鹿田第2次調査 (NM R-UT型)		128.5	103	1	20	0.5	4	弥生後期～中世。田舎・木簡等
医病	鹿田第3次調査(校舎)		147.8	42	0.5	100	0.3	5	古代～中世
" "	鹿田第4次調査(配管)		3.5	2	0.3		0.2	1	古代。鹿角製品
医病	鹿田第5次調査(管理棟)		116	93	2	20	1	2	弥生後期～中世
ア	鹿田第6次調査 (アイトソーブ組合センター)		65	59	0.5	1	1.5	3	中世。青銅製鏡
医	鹿田第7次調査(基礎医学棟)		81	66		10		1	4
医	鹿田第8次調査(R-I治療棟)		8	8					弥生～近世
医病	鹿田第9次調査(病棟)		120.1	96	0.1	13		9	2
医病	鹿田第10次調査(共同調)		2	2					弥生～近世
医病	鹿田第11次調査(病棟E期)		74	66		4		2	2
医	鹿田第12次調査 (エネルギー・センター)		132	77	1	54		15	弥生～近世。繩
全	発掘 沖島岡大第1次調査 (NP-1)		1.3	1	0.3				弥生中期～古代
農	沖島岡大第2次調査 (農学部合併処理情報・配管)		14	12	1			1	縄文後期～弥生前期
学生	沖島岡人第3次調査 (男子学生室)		55.5	42	1.5	2	5	5	縄文後期～弥生。古代～石器・輪轤・蛇頭状土器片
" "	沖島岡人第4次調査 (屋内運動場)		1	1					縄文後期～弥生前期 (試掘調査遺物を含む)
大自	沖島岡人第5次調査 (大学院自然科学研究科棟)		92	69	2	1	10	10	縄文後期～弥生。古代～近世耳栓・木製櫛(縄文)
T.	沖島岡人第6次調査 (生物応用工学科棟)		66	31	1	30	4		縄文後期～弥生。人形木像、アンペラ
工	沖島岡人第7次調査 (情報工学科棟)		31.5	10	0.5	1		20	縄文後期～近世
全	沖島岡大第8次調査 (遺伝子実験施設)		9.5	9	0.5			1	縄文後期～近世
工	沖島岡人第9次調査 (半体機能認定工学科)		60.5	32	1.5	12		15	縄文後期～近世

所属	種類	地 区 調 査 名 称	箱数(1箱:約30リットル)						備 考 文 獻		
			総 数	土器	石器	木器等	种子等	その他	サンプ ル本		
全	#	津島岡人第10次調査 (保健管理センター)	119	99		10			10	弥生前期～近世	30
#	#	津島岡大第11次調査 (総合情報処理センター)	3.5	3	0.5				2	縄文後期～近世	36
#	#	津島岡大第12次調査(図書館)	59	24	1	24			10	縄文後期～近世	33
#	#	津島岡大第13次調査 (福利厚生施設 北)	13	12	1					縄文後期～占墳前期・中 41世	
#	#	津島岡大第14次調査 (福利厚生施設 南)	14.5	13	0.5				1	弥生～古墳	46
#	#	津島岡大第15次調査 (サテライ・ベンチャービジ オスラボラトリ)	77	13	10	20	10		24	縄文後期・晩期・弥生～ 中世 アンペラ	38
農業	#	津島岡大第16次調査 (動物実験棟)	0.3	0.3						縄文後期・弥生～中世	43
環	#	津島岡大第17次調査 (環境理工学部校舎Ⅰ期)	76	61	3				12	縄文後期～近世	43
全	#	津島岡大第18次調査 (南福利ポンプ棟)	1	1						縄文後期～近世	53
#	#	津島岡人第19次調査 (カラボンショージンセンタ)	45	24	1	4		2	14	縄文後期～近世	53
環	#	津島岡人第20次調査 (環境理工学部ポンプ棟)	1	1						縄文後期～近世	53
工	#	津島岡人第21次調査 (丁字型 レバータ)	7	5	2					縄文中期～近世	53
環	#	津島岡人第22次調査 (環境理工学部校舎Ⅱ期)	34	26	2	3			3	縄文後期～近世・古代陶 器材、曲げ物	53
文法 經	#	津島岡大第23次調査 (総合研究棟)	127	29	1	90	2		5	縄文後期～近世。石織	56
文法 經	#	津島岡大第24次調査 (総合研究棟裏下廊)	2.1	1	0.1	1				縄文後期～近世	60
農	#	津島岡大第25次調査 (農芸学部水施設)	0.3	0.1		0.2				中・近世	60
固	#	稻山遺跡第1次調査 (実験研究棟)	10	7	1				2	縄文早期・弥生中期・中 世	55
固	#	稻山遺跡第2次調査 (実験研究棟スロープ)	3.1	3				0.1		中世～近世	55
		立ち会い他	28	28							
		総 箱 数	2496	1727	43.8	490.2	35	15.1	199		

*木器・種子・サンプルについては、資料整理が進むにつれ時に収容形態が変化するため、箱数の変化が顕著であることを断っておく。

(註) 文献番号は附表3-4に対応する。なお、60は本年報である。

7 遺物の保存処理

本センターでは1992年度より構内遺跡から出土した木製品についてPEG(ポリエチレングリコール)含浸による保存処理作業を行っている。これまでに、第1期保存処理を1992年7月～1993年11月、第2期保存処理を1994年6月～1996年8月、第3期保存処理を1996年12月～1999年6月まで実施してきた。

今年度は昨年度より継続中の第4期分について最終的な作業を行い、さらに第5期分処理を

開始した。

(1) 第4期保存処理

第4期保存処理は1999年7月から開始し2000年10月に終了した。処理工程は表3の通りで、約1年4ヶ月を費やした。PEG濃度は30%から開始し、10%ずつ徐々に濃度を上げていった。90%になった段階で5%上昇させて95%とし、処理槽の蓋を開け、水分を蒸発させることで最終的に100%とした。

(2) 第5期保存処理

第5期保存処理は2000年1月25日より開始した。PEG処理濃度は30%から開始し、次年度に継続して処理を行った。

8 資料の活用状況

(1) 資料等の貸し出し

月 日	資 料	貸し出し先	用 途
5月17日	鹿田遺跡弥生時代水田の写真	山川出版社	「岡山県の歴史」掲載のため
8月17日	鹿田遺跡出土人面線刻土器	安城市立歴史博物館	常設展示「歴のメッセージ」の資料とするため
11月21日	津島岡大遺跡出土縄文時代の土器・石器・ドングリ、写真など	倉敷埋蔵文化財センター	企画展「縄文時代の人とくらし」に展示するため
1月18日	米作りに関連する写真	ボプラ社	「調べ学習 日本史」に掲載するため

(2) センター展示・発掘調査見学状況

① 津島岡大遺跡第23次調査見学

4月24日 岡山大学文学部地理学学生

6月8日 岡山大学文学部考古学入門学生

6月28日 現地説明会（約70名参加）

② センター展示見学

8月1日 岡山大学博物館実習学生19名ほか、

10月16～31日 第4回岡山大学キャンパス発掘成果展188名

2000年度合計277名

1999年7月15日	濃度30%
9月16日	濃度40%へ
10月27日	濃度50%へ
2000年1月9日	濃度60%へ
3月16日	濃度70%へ
4月26日	濃度80%へ
6月1日	濃度90%へ
7月25日	濃度95%へ
10月20日	第4期分処理終了

表3 第4期木器処理工程

第3章 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

第1節 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規則・規程

1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規則

(設 置)

第1条 岡山大学（以下「本学」という。）に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

(目 的)

第2条 センターは、本学の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。
- 四 その他の埋蔵文化財の保護に関する重要な事項

(自己評価等)

第2条の2 センターは、岡山大学学則（平成6年岡山大学規程第64号）第2条の定めるところにより、センターに係る点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

- 2 前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けるよう努めるものとする。
- 3 第1項の自己評価を行うため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「自己評価委員会」という。）を置く。
- 4 自己評価委員会に関し、必要な事項は、別に定める。

(教育研究等の状況の公表)

第2条の3 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

(センター長)

第3条 センターにセンター長を置く。

- 2 センター長は、専門的知識を有する本学の専任教授のうちから学長が命ずる。
- 3 センター長は、センターに関する業務を掌理する。
- 4 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(調査研究室)

- 第4条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。
- 2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。
 - 3 室長は、専門的知識を有する本学の専任教授のうちから学長が命ずる。

- 4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。
- 5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

(調査研究専門委員)

第5条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

- 2 専門委員は、本学の専任教官のうちから学長が命ずる。
- 3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(管理運営の基本方針等)

第6条 センターの管理運営の基本方針等は、岡山大学部局会で審議する。

(運営委員会)

第7条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

- 2 運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。

(事務)

第8条 センターの事務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第9条 この規則に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、学長が別に定める。

2 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程

(趣旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規則（昭和62年岡山大学規程第48号）第7条 第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

(組織)

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
- 二 本学の教授のうちから学長の命じた者若干名
- 三 センターの調査研究専門委員のうちから学長の命じた者1人
- 四 センターの調査研究室長
- 五 施設部長

岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

2 前項第2号の委員の任期は、1年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(庶務)

第6条 運営委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会規程

(趣旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規則（昭和62年岡山大学規程第48号）第2条の2第4項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）に係る点検及び評価の実施並びにその結果の公表に関し、必要な事項を審議する。

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる者で組織する。

一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二 埋蔵文化財調査研究センター調査研究室長

三 センターに勤務する教官のうちから若干名

四 埋蔵文化財調査研究センター運営委員会委員のうちからセンター長が委嘱した者若干名

五 施設部長

2 前項に定める委員のほか、センター長が必要と認めた者を加えることができる。

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

(会議)

第5条 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

2 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

(庶務)

第6条 委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

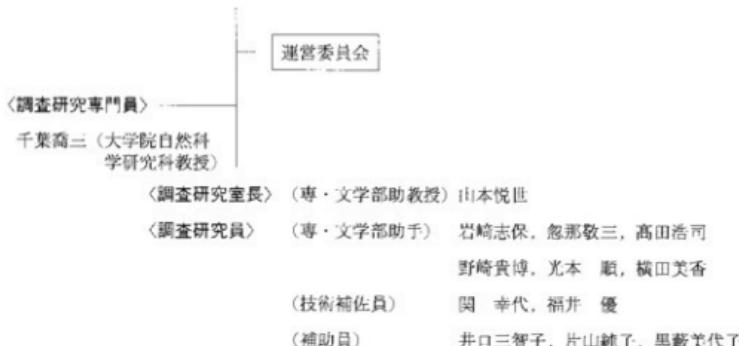
(隸属)

第7条 この規程に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、別に定める。

第2節 2000年度埋蔵文化財調査研究センター組織

1 センター組織一覧

〈埋蔵文化財調査研究センター長〉(併・文学部教授) 稲田孝司



2 運営委員会

委 員

センター長	稲田孝司	文学部教授	新納 素
文学部教授	久野修義	理学部教授	柴田次男
医学部教授	村上七郎	事務局	遠藤久男 (2000年6月30日まで) 森内壽一 (2000年7月1日から)
環境理工学部教授	名合宏之		
大学院自然科学研究科教授	千葉喬三 (調査研究専門員)		
埋蔵文化財調査研究センター	山本悦世 (調査研究室長)		

審議事項

- 2000年4月6日 平成11年度決算及び平成12年度予算案について
岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全基準について
平成12年度事業計画
- 2000年9月5日 助手の任期制について
津島岡人遺跡第23次発掘調査概要
埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会の開催について
- 2000年12月22日 発掘調査の予定について
運営委員会委員の任期について

津島岡大遺跡第24次発掘調査概要報告

3 自己評価委員会

自己評価委員

文学部教授	稲田孝司	文学部教授	久野修義
文学部教授	新納 泉	理学部教授	柴田次男
医学部教授	村上宅郎	環境理工学部教授	名合宏之
大学院自然科学研究科教授	千葉喬三	埋蔵文化財調査研究センター助教授	山本悦世
埋蔵文化財調査研究センター助手	横田美香	施設部長	森内壽一

外部評価委員

岡山県教育委員会文化課長	松井英治
岡山県古代吉備文化財センター所長	正岡睦夫
岡山市教育委員会文化財課長	出宮徳尚

審議事項

2000年11月30日	埋蔵文化財調査研究センター自己評価報告書原案について 外部評価委員について
2000年12月22日	埋蔵文化財調査研究センター自己評価報告書について 外部評価委員による埋蔵文化財調査研究センターに対する評価

第3節 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター関係委員会報告

1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会報告

今年度、当センターでは自己評価委員会を2回開催し、1987年以来2度目となる自己点検・評価を行った。今回から自己評価委員会に加えて、新たに外部評価委員からの意見を得、より幅広い観点からの点検・評価につとめた。以下では、その報告を記す。

自己評価報告

2000年12月22日

(1) 理念・目的に関する点検・評価

〔現状の説明〕

埋蔵文化財は、地中に埋もれた住居跡や貝塚などの遺構・遺跡と土器・石器などの遺物からなり、文献

史料とならんて過去の歴史を物語る資料として重要な意義をもつ。文化財保護法は、文化財をわが国の歴史・文化等の正しい理解のために欠くことのできないものであり、貴重な国民的財産として保護する必要を述べている。しかし、これらの文化財は都市開発や産業の発展のもとでともすれば忘れられ、破壊の危機に陥る場合も少なくない。とりわけ埋蔵文化財については、近年の大規模な土木工事が増加する状況のもとで、その系統的な調査研究と保護対策の必要が強調されてきた。遺跡に埋もれた文化財の調査成果の一端は佐賀県吉野ヶ里遺跡や青森県三内丸山遺跡の例に示されており、豊かな内容を持ったわが国の歴史を復元するためには、今後さらに埋蔵文化財の調査研究の重要性が増すものと思われる。

岡山県南部には、原始・古代の遺跡がきわめて多い。備讃瀬戸地域のサヌカイトを用いた旧石器文化、彦崎貝塚・津雲貝塚等の縄文時代遺跡、造山古墳・作山古墳をはじめとする古代吉備勢力の面影をとどめた遺跡など、その内容も変化にとんでいる。とりわけ旭川の沖積作用で肥沃な土地が形成された岡山平野は、水稲農耕の開始と発展の先進地域の一つとみなされている。たとえば1968年に岡山駅総合グラウンド内の武道館建設予定地で発掘の行われた津島遺跡では、弥生時代初頭の水田遺構の実態がはじめて明らかにされ、きわめて重要な遺跡として国史跡に指定されている。また近隣の津島江道遺跡（岡北中学校）においては、鞋群をもつ水田遺構が從来縄文時代晩期に属するとされていた上器とともに発見され、それまで弥生時代前期に始まると考えられてきた水稲農耕がさらに古くさかのぼることを明らかにした。

岡山大学はこうした原始・古代遺跡の集中地域にあり、施設建設等に際しては事前の試掘調査等により遺跡の保護に努めてきたところであるが、1982年、津島キャンパスにおいて多量の遺物を含む弥生時代遺跡を確認し、本格的な発掘調査を行った。これが津島岡大遺跡の最初の本格的な発掘であった。つづいて1983年には鹿田キャンパス附属病院外来診療棟建設地で2,000平方メートルをこえる発掘があり、以後、両キャンパスにおいては系統的に調査が進められることとなった。

津島岡大遺跡の最初の発掘は文学部考古学研究室が主体となって実施したが、日常の研究教育に支障が生じ、長期にわたる調査は不可能となった。キャンパスでのあいつぐ遺跡の発見と発掘に対応するため、1983年、本学では施設設定委員会のものにて岡山大学埋蔵文化財調査室を設置し、専任の助手1名を配置した。さらに1987年には学則により岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを設立し、助手7名をもって本学構内における埋蔵文化財の調査・研究・保護に万全を期すこととなった。1999年度には助手ポスト1を助教授に振り替えることができ、より一層の体制の強化を計った。現在では助教授1名と助手6名を中心としたスタッフが業務にあたっている。

本学にかかる以上の歴史環境と本センター設立の経緯がものがたるよう、本センターは、岡山平野及び広く西日本における開拓遺跡を念頭におきつつ、本学構内の遺跡・遺物の調査研究を通じて原始から現在に至るまでの歴史展開の究明に寄与するとともに、調査研究の成果を本学内外に広く公開することによって資料の活用を推進し、あわせて遺跡・遺物の保護をはかることを目的としている。

〔点検・評価〕

津島岡大遺跡は縄文時代・弥生時代・古代の遺跡を主とし、鹿田遺跡は古代から中世にかけて栄えた遺跡である。また津島岡大遺跡の弥生時代以後の遺構が水田を主としているのに対し、鹿田遺跡は集落遺構

が中心をなしている。本学構内でのこれまでの発掘で明らかとなった多くの時代にわたる遺構、多彩な生活内容を示す痕跡は、本センターが目的とする系統的な歴史展開の究明が適切であったことを裏付けていく。

本センターは、発掘調査報告書・年報・センター報などの刊行を通じて調査成果をくわしく公表してきた。また、こうした印刷物による公表以外に一般公開として、発掘調査現場ごとの現地説明会や数年おきに開催している発掘調査成果の展示会では、多数の一般市民の参加を得ている。さらに、研究・教育面での利活用も新たな動きとして評価されよう。学内外の他分野を含めた研究者や学生への資料提供、あるいは、学内ののみならず地域の小学校による授業での利用は、学校教育への有効性が徐々にではあるが、認められ求められはじめていることを示している。その他に、インターネットによる公開も新たな取り組みとしてあげられる。本センターで運営している画像データベースは全国的にも注目されており、2000年度には文部省大学共同利用機関であるメディア教育開発センターによって、その目的や管理・運営に関する調査が行われた。このように、本センターで行っている様々な形での継続的な情報発信は、学界はもとより地域にも浸透しつつあるといえよう。展示会などで実施しているアンケート結果にも端的にあらわれているように、各方面から、成果の公表・公開が今後とも強く望まれている。

本センターは、本学構内での建設工事等の計画がある場合には、立会調査・試掘調査等により地下遺構への影響をできるだけ少なくするよう努め、大規模な工事の場合は発掘調査を実施してきた。その調査成果から、特に津島キャンパスの東北隅における遺跡の重要性・希少性が明らかになり、遺跡保存の必要性を強く求めることが決まり、1999年12月22日の施設設定委員会において、大学敷地内（津島地区）の東北隅地域に遺跡保護区を設けることが決定され、その範囲が明示された。遺跡・遺物保護の目的は、文化財保護法の精神を本学において具体化するものであり、学術研究を支える諸施設の建設の推進とともに、いっそう発展させるべき理念であろう。遺跡保護区の設定はそうした点で重要な意義をもつと評価される。

〔長所と問題点〕

本センターの理念・目的の最大の特徴は、多面向的な内容を持つ遺跡の発掘を基礎にして当地域の歴史の解明に寄与すると同時に、かけがえのない文化遺産の価値を広く知らせ、その保護をはかるという、学術研究機能と社会的機能の両面を掲げるところにあるといえよう。

公開・展示の要望あるいは授業での利用など、発掘調査や展示会などを通じて教育あるいは生涯学習・地域交流の拠点としての役割を担える可能性は高い。しかし現状においては、期待に答えられる展示施設・人材・時間などの諸条件は極めて限定的で不十分な状況にあり、こうした優れた特色や実績を教育活動などに活かしていく道がまだ十分に準備されていない。大学の共同利用施設として、教育活動と人材養成にかかる理念・目的を明確にしていく必要が痛感される。

〔将来の改善・改革へ向けた方策〕

本センターの将来あるべき目的としては、①遺跡・遺物にもとづく地歴史の研究 ②文化財の調査と保護 ③調査成果と文化財の保管・公開・活用 ④調査成果と文化財の教育への活用及び人材育成、という

4点をあげることができよう。こうした目的を実現するためには、例えば調査・研究・教育・人材育成について専任の教授を含む人員配置が必要であり、また文化財の保管・公開・活用については恒久的な研究・収蔵・展示施設が不可欠となろう。しかし現在の岡山大学学則の設置による施設ではこうした条件を満たすことが極めて困難であり、本センターのあるべき目的を達成するには省令設置による大学博物館等として再編整備していくことが要請される。

（2）調査・研究活動に関する点検・評価

a. 検証システムの適切性

〔現状の説明〕

センターの調査・研究活動については、1999年度までは発掘調査・出土遺物の整理等に関する作業経過を年1～3回程度当センター管理委員会および運営委員会に報告し、その進捗状況と成果の点検を行ってきた。2000年度からは管理委員会が廃止され、部長会議が本センターの点検を行うこととなっているが、まだ軌道に乗っていない。センター内においては、月1回のセンター会議で、より詳細な報告と検討を実施している。また、各年度の調査研究成果を翌年度に岡山大学構内遺跡調査研究年報として印刷し、学内各部局と他大学・地方公共団体の発掘調査関係機関等に公表している。

〔点検・評価〕

管理委員会（1999年度まで）、運営委員会では、全般的な立場からの適切な評価があり、センター内の定期会議による恒常的点検も有効に機能している。さらに、年報による1年間の活動内容の掲載や岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報による成果の速報等は、センターの調査・研究活動の自己評価と外部からの評価を進めるための条件を整えるという面で、積極的な意義を有するといえよう。

また、展示室や展示会で実施しているアンケートは、集計後、年報やセンター報に掲載している。こうした試みも外部からの意見・評価を知る上で有効であり、積極的な取り組みといえよう。

〔長所と問題点〕

管理委員会（1999年度まで）、運営委員会による点検評価は、主要な業務である構内遺跡の発掘調査や出土遺物整理の作業等の進行に効果を發揮してきた。反面、調査研究の内容あるいは質的側面に関する点検・評価については、必ずしも十分とはいえない面を残している。

〔将来の改善・改革へ向けた方策〕

センターにおける調査研究の成果を質的側面から検証するためには、学内の考古学・歴史学および自然科学諸分野等を含む学内関連部局との日常的な連携を基礎に、それらの研究者の集団的な討議による廣範な検証システムを考えていく必要があろう。

b. 活性化状況

〔現状の説明〕

センターの研究活動は、構内遺跡の発掘調査・出土遺物整理・報告書刊行等を主体とする総合研究と、

総合研究を充実・発展させるのに必要なセンター専任職員の個別研究からなっている。

総合研究については、1996年度から2000年12月までの5年間に発掘調査を計18件（総面積13,934.8m²）、年平均で3.6件（年間平均測量面積2,787m²）実施し、調査報告書5冊、年報5冊、センター報9冊、その他に1冊を刊行してきた。1997年度からは、新たな調査対象遺跡として三朝地区的福呂遺跡が加わった。個別研究では、計9本の論文・報告等の公開があったほか、計5件の文部省科学研究費補助金が交付されている。

また、出土遺物の保存処理に関しては、木製品のPEG処理3工程を実施した。一部、特に重要な遺物に関しては外部委託を行った。

【点検・評価】

総合研究における発掘調査に関しては、着実な成果をあげてきたといえる。前回の自己評価実施データと比較すると、発掘調査に関しては、年間平均調査件数を比較すると、年平均1.5件から3.6件へ、年間平均調査面積も1,250m²が2,787m²へと倍増以上の数値を示す。特に1998年度・1999年度は発掘件数・発掘面積とも急増した。発掘調査の報告書については、およそ1年間に平均1冊を刊行し、従来とほぼ同じペースを確保するよう努めてきた。しかし、発掘調査が増加した分の整理作業や報告書刊行が遅延している。その他、年報は年1冊、センター報は年2冊ではほぼ定期的刊行を維持することができた。遺物の保存処理に関しては、大半の木製品を独自に保存処理することが可能となっており、軌道にのりつつある。しかし、遺物の保存処理については、新しい技術開発が絶えず進んでいるが、本センターではそれに対応するだけの体制が整備されていない。さらに、金属器などの保存処理もこれからの課題である。

一方、個別研究については、発掘調査件数が急増する中で、論文・報告等の発表件数が低下しており、文部省科学研究費補助金の交付件数はほぼ横這い傾向にある。発掘調査に直接かかわる遺構・遺物のテーマの場合は、比較的研究を進めやすい。しかし、例えば山地・海浜地域の生産遺跡と平野部の集落遺跡との関係の追究といったより幅広い分野を含む研究、生産・流通・集落・祭祀・政治・国家体制との関係の追究といったより高い見地からの研究の推進については、なお今後の課題といえよう。

【長所と問題点】

センターが総合研究において調査対象としている津島地区津島岡人遺跡、鹿田地区鹿田遺跡、三朝地区福呂遺跡は、それぞれが特有の歴史的個性を示す。津島岡人遺跡は縄文時代の集落と弥生時代以降の水田開発の歴史の解明に主な意義を有し、鹿田遺跡は弥生時代以降の集落の変遷、とりわけ古代・中世の遺跡構造を知るうえで重要性をもつ。そうした遺跡を長期間にわたって継続的に調査・研究することは、岡山平野という一つの舞台を背景に展開される歴史をより具体的に解明するという意味で、非常に有効な方法といえる。問題点としては、総合研究の推進において学内の他の部局・研究者との連携による成果が、例えば石器石材の研究や出土植物種子の研究など個別のなケースにとどまっていること、発掘調査の成果を畿内・九州・大陸等のより広い地域、旧石器時代から歴史時代までのより幅広い時代の研究成果とも関連づけて、その歴史的意義を把握していく方向がなお十分に明確にされていないことがあげられる。

総合研究で実施した近年の発掘調査の報告書が多く未刊行状態にあることは、きわめて重大な事態であ

る。最も古い木刊行報告書は1992・1993年度発掘分までさかのぼり、1999年度末で12の発掘調査資料が木報告となっている。予算執行の関係上、施設建設に伴う事前の発掘調査をある程度優先させることはやむを得ないが、木報告資料が長期にわたって増加する事態は、調査内容を学問的に「分担署しないまま発掘を繰り返す悪循環を招くものであり、看過し得ない。また、このことは調査内容を速やかに学界や一般に公開する義務を怠るものであり、文化財保護法の趣旨に反する恐れがある。

個別研究の面においても、論文・報告等の数の減少が問題点としてあげられる。前回と比べると、年間平均5本弱が2本弱に低下している。職員のいっそうの努力が期待されるが、同時に、その背景に発掘調査への比重が非常に大きい状況にあることも否めない。一定の研究活動の時間を確保するため、体制の拡充が望まれる。

[将来の改善・改革へ向けた方策]

本センターにおける調査研究事業については、総合研究と個別研究、総合研究における発掘調査と報告書刊行のそれぞれのバランスを適正なものに回復させることが緊急の課題である。その改善策の一つとしては、職員の増員があげられる。政府においても閣議決定等で、埋蔵文化財行政における調査員不足が危惧されているが、本学の地域を所管する岡山県教育委員会、岡山市教育委員会とも調査員に余剰はなく、行政機関からの職員派遣はきわめて困難と思われる。施設建設に伴う発掘調査が1998年度・1999年度の水準で今後とも行われる場合は、本センター独自に職員増あるいは臨時職員の雇用等を検討していく必要がある。

学内研究者との連携を推進するため、センターに設置されている調査研究専門委員を拡充し、全学的かつ多角的な共同研究体制を整備していくことが重要である。また資料のデータベース化をはかって関係機関との情報交換を推進し、よりグローバルな視点から発掘成果を比較検討する必要がある。個別研究についても、少なくとも科学的研究費等の裏付けのある課題に関しては研究条件を整えていかなければならぬ。

c. 活性化促進の条件整備状況とその有効性

[現状の説明]

総合研究の中心的業務である発掘調査は、建物の建設を契機として行っている。そのため、調査は、一般的な学術調査とは異なり、工事計画との兼ね合いのものとに進められる必要があり、こうした限定された条件のなかで調査員は効果的な調査に対する知識や意識を高めることによって、学術的に遺漏のないように努めている。

また、比較的順調に進んでいる調査の背景には、発掘調査と建設工事との密接な連携が保たれていることも忘れてはならない。全学的な理解や日常的な事務局との連絡関係などが、こうした状況の強力なバックアップとなっている。

総合研究にかかる経費は文部省および学内予算によっているが、発掘調査経費を除くと、すべて学内予算に依存している。学内経費の構成は、全学共通負担額と当該部局負担額に大別され、そのほかに職員旅費が認められている。前者にはセンター管理費・発掘調査整理費・調査員研究費が含まれるが当該部局

負担額はすべて発掘調査整理費である。こうした予算の中から、研究と資料保管のための施設が建設され、研究資料の整理を補佐する非常勤職員・パート職員が雇用されている。専任職員の研究費・出張旅費等はほぼ学内の平均水準にある。科学研究費については、文・法・経済学部事務部を通じて申請を行っている。内地留学・海外留学・長期の海外研修の実績はない。

〔点検・評価〕

本センターが省令設置でないという条件のもとでは、現在の研究経費や施設のあり方は、本学各部局からの相応の協力・支援の結果として十分に評価される。しかし、国立大学の付属施設として本来あるべき状態を想定するならば、現在のプレハブ建物では、出土遺物・研究資料の恒久的かつ安全な保管に重大な危惧があり、建物規模も今後の資料増加を考えれば十分なものとはいえない。特に、近年の発掘調査の急増により遺物量は増加の一途をたどっている。その量は建物内に占める収蔵スペースを凌駕しつつあり、こうした遺物の収蔵のために、整理・研究・分析などの主要業務に必要なスペースが充分に確保できず、書籍などの収蔵にも苦慮する状態に陥ってきている。そのため、徐々に充実させている顕微鏡や赤外線カメラなどの分析機器の活用にも支障が出ている。木製品の保管も大きな問題を生んでいる。保管スペースの不足もさることながら、保存処理後の湿度・温度管理を必要とするため、現在の環境が好ましくないことは明らかである。保存処理なども含め、文化財の自然科学的手法による研究が進展する中で、専門的知識を行する人材の育成や施設の整備は今後に残された大きな課題であろう。

また、経費の問題も重要であろう。現在は全学的視点によって支援されているが、例えば各学部の予算規模の大小によっては、当該部局負担額などは部局の予算を圧迫する可能性も危惧される。

〔長所と問題点〕

学則設置の機関として独立の施設が確保されていることは、今までの研究実績を支えてきた研究条件面での基礎として、重要な意義をもっている。しかし本センターが国民共有の財産である文化財を研究対象としているという特殊な性格を考慮すれば、研究と資料保管のための施設・機器の整備は急務といえる。特に、出土遺物の収蔵と整理作業の困難を打開するため、当面、プレハブ建物の増設が必要である。職員の長期の留学・研修等が実質的に困難となっている状況は、長期的な人材育成という観点から改善を検討していく必要があろう。外部からの留学・研修の受け入れについても、検討課題となろう。

〔将来の改善・改革へ向けた方策〕

研究の内容にふさわしい恒久的な建物建設と人材育成をおこなうには、本センターの省令設置施設としての再編を検討するなかで、建物の必要スペースを確保あるいは研究条件の改善をはかっていくことが不可欠であろう。

再編の具体的な方向としては、1996年1月に学術審議会学術資料部会が報告したユニバーシティミュージアムを検討していくことが重要である。この博物館は文化財に限らず広く大学での研究にかかる学術標本を収集・整理・保存・活用していくための機関であり、専任職員の配置と施設建設の必要がうたわれている。共同利用施設として本学にユニバーシティミュージアムを設立するならば、文化財を含む学術資料の恒久的な保存がはかられるとともに、学術資料を基礎として本学内外の学際的研究の活性化にも貢献

するであろう。

センターの業務は、調査研究を進める上での環境整備あるいは予算的裏付けなど、多くの点で学内から の多人な理解・協力によって支えられている。組織的な改革を目指す同時に、これまで以上に学内の諸 関係機関・事務局などの連携を深めていくことも重要であろう。

(3) 管理運営に関する点検・評価

〔現状の説明〕

本センターの管理運営については、岡山大学学則により、学長を委員長とする管理委員会が運営の基本 方針を策定し、センター長を委員長とする運営委員会がその実施に関する方針を決定してきた。しかし、 全学における委員会等の統括会に伴い、本センター管理委員会は1999年度をもって廃止され、2000年度か らは部局長会がその役割を引き継ぐこととなっているが、なお具体化されていない。随時学長の指揮を得 つつ、運営委員会がセンターの運営に関する具体的な事項を審議・決定しているのが現状である。それともに、センター長を中心とするセンター会議（月1回開催）において業務のより具体的な実施計画をたて、進行状況を点検している。センター長・センター室長・運営委員会委員は学長による任命である。 1999年6月から助手ポスト1が助教授に振り替えられたことにより、専任助教授を室長に充てることが可 能となり、センターにおける発掘調査や整理作業など基本的な業務の執行体制を強化することができた。 なお、センター内外の日常的な連絡・調整役については、従来通り専任職員が持ち回りで担当している。 センターの業務のうち、事務処理は施設部企画課があたっている。職員のうち、助教授・助手は文学部に 所属し、非常勤職員・パート職員は本センターに属している。

1999年3月の岡山大学規定第3号では、岡山大学学内共同利用施設における助手の任期に関する規定が 定められ、本センターにおいても1999年11月25日以降に任用される助手については任期が適用されること となった。当初、任期は3年で再任は原則として1回とされたが、2000年10月評議会決定の「岡山大学にお ける教員の任期に関する規則」において、本センターに新たに採用される助手については「任期3年、再任 可（原則として1回、最大2回まで）」となった。

その他、構内遺跡発掘調査での事故防止・安全確保のため、2000年1月以降、センター専任職員すべて が「地山掘削と土止め支保工」の技能講習を受講した。また、本センター及び施設部においては、2000年5 月15日付で「岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項」を定め、施設部の監督職員及び請負 業者の常駐させる現場代理人のもとで、発掘調査現場でのいっそうの安全強化をはかることとした。

〔点検・評価〕

管理委員会は年に1～2回程度開催され、各部局長等によって全学の意見が反映され、全学共同利用施 設としての点検が行われてきた。管理委員会は1999年度をもって廃止されたので、今後、全学的な意見の 反映をどのように行うかが課題であろう。小人数の運営委員会では一歩踏み込んだ率直な討議が行われ、 実質的運営に有効性を発揮している。センター内では定期的に開いており、職員 全体の討議によって業務の進行状況や問題点などを明らかにし、相互の意思疎通をはかっている。

岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

2000年4月には、任期を定めて任用する助手を3名採用し、岡山大学規則に則った形での任用を行っている。

その他、発掘調査における安全管理を定めたことは労働安全衛生法の観点からも評価されよう。

〔長所と問題点〕

本学構内遺跡の調査方式としては、これまでに文学部考古学研究室が本務外の仕事として行った調査、施設設定委員会のもとにおかれた岡山大学埋蔵文化財調査室が行なった調査があったが、それらに比較すれば、現在のセンターは専門予算を年度当初にたて、一定数の助教授・助手ポストを確保しうる等、より改善された条件にあるといえる。学内共同利用施設という現状においては、現在の管理運営は、全学の意思を反映すことのできる体制であろう。一方、学問研究の進歩には当該組織および職員の自発的・内在的な意欲の発揮が不可欠であることはいうまでもない。センターは学則設置機関であるという制約上、文部省への概算要求には困難があり、その意味で財政的・組織的な固有の基盤がはなはだ弱体であるといわざるをえない。センターの組織と職員個々の自覚性をいっそう発揮させるためには、自立した組織としての制度を確立していく方向が考慮されなければならない。

任期が適用された助手の任用については、2000年度から実施しているが、これまでのところ効果や問題点は顕在化していない。今後の状況を見守る必要があろう。

〔将来の改善・改革へ向けた方策〕

本センターを省令設置のユニバーシティミュージアムとして再編していくならば、教授・助教授ポストを配置し、専任職員による日常業務の管理・指導体制が確立されるほか、助教授・助手・補佐員等の職員が複数部局の所属であるという不正常な事態が解消し、調査研究事業と専務業務との一体的な管理運営が実現するであろう。

本学における大学博物館の設置については、現在14の部局から委員・オブザーバーが参加する「岡山大学総合研究博物館（仮称）構想検討会」によって運動が進められている。同検討会では、『岡山大学自然と人間の共生博物館』の冊子や資料・研究編を刊行するとともに、本学内外に広く冊子を配布し、構想内容に関する学外アンケートも実施している。本センターもこれに積極的に参加し、ワーキング・グループ等での活動に寄与している。さいわい2000年4月に決定された「21世紀の岡山大学構想」では、学術情報基盤の整備として、大学図書館の整備とともに大学博物館の設置がとりあげられた。今後とも大学博物館の設置に向けて努力する必要があろう。

（4）自己点検・評価の組織体制に関する点検・評価

a. 自己点検・評価の恒常的システムとその活動の有効性

〔現状の説明〕

センターでは1993年に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会を設置した。自己評価委員会は、現在、センター運営委員9名とセンター助手1名の計10名で構成している。

〔点検・評価〕

自己評価委員会は前回1996年11月に開催してから2000年まで行っていない。センターとしては、毎年刊行している午報等において年次毎の業務の内容の総括と点検を行ってきたところであるが、評価委員会の開催が第1回目から第2回目の開催まで4年の間隔があつたことは、定期的に自己点検・評価を行っていく上での反省点といえる。

〔長所と問題点〕

自己評価委員はセンターの職員あるいは運営委員としてセンターの理念・目的をふまえ、日常の業務にも多少なりとも接する機会のあるメンバーであり、率直な意見交換により具体的かつ将来展望をふまえた点検・評価が可能であろう。一方、センターの業務にあまり接する機会のない本学内外の方々からの意見を得ることができないことが問題点としてあげられよう。

〔将来の改善・改革へ向けた方策〕

本センターの自己評価委員会規程では、上記委員の他に必要な者を加える余地を残している。構内遺跡あるいは広く文化財に関心をもつ本学教育や学外の方々を加え、日常的な運営から一歩離れた立場からの意見を得ることも有効であろう。建設工事に伴う発掘は全国で広く行われており、地方公共団体の教育委員会・埋蔵文化財センター・各人学の埋蔵文化財センター等が調査にあたっている。相互にその調査や研究を点検・評価することは大きな意義があると思われる。

本センターの自己評価委員会については、今後定期的に開催し、自己点検・評価を行っていく必要がある。

b. 自己点検・評価を基礎に将来の発展に向けた改善・改革を行うためのシステムに関する 点検・評価

〔現状の説明〕

本センターにおいては、自己点検・評価の結果を将来の改善・改革へ結びつけるための独自の組織を設置していない。今回の評価・点検については、その結果を十分にふまえ、学長及び部局長会あるいは運営委員会等にはかりつつ、今後の方策を検討していくことになろう。

〔点検・評価〕

具体的な作業が進んでいないため、現状の点検・評価を行うことは今後の課題である。

〔長所と問題点〕

本センターは1987年に設置されたが、設置を承認した同年11月25日の評議会では、設置期間について「期限を10年として、在り方の見直しを行うこととしたい」と決定している。これについては1997年1月の管理委員会で承認された『岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの現状と将来構想について』の中で、1997年11月以降、省令設置への改変が実現するまで学則設置によってセンターを存続させるが、省令化が実現しない場合は10年後に再度見直すこととなつた。こうした中で、本センターはいずれにしても将来の在り方を見直していく必要があり、自己点検・評価の結果を将来の発展に向けた改善・改革に生かしていくシステムづくりは、それだけで重要な意義をもつことになる。

〔将来の改善・改革へ向けた方策〕

自己点検・評価の結果を将来の発展に向けた改善・改革に生かしていくため、今後は自己評価委員会に岡山県や県内市町村の教育委員会等で埋蔵文化財行政に携わっている学外の有識者を外部評価委員として迎えることが重要である。将来的には自己評価委員会・運営委員会において改善・改革が最も実現しやすい機動的で強力な組織をシステムとして確立していく必要がある。

外部評価報告

(1) 外部評価委員報告

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価報告書に対する所見

2000年12月22日

岡山県教育委員会・文化課長

松井英治

1. 理念・目的に関する点検・評価

*津島地区の東北隅に遺跡保護区を設定されたことは、大いに評価できる。

*試掘・確認調査の積極的実施により、遺跡の保護・保存を前提に学内準備計画との調整に更なる取り組みを期待する。

*資料の公開は積極的に実施していると評価されるが、広報活動が十分でない様に思われる。

*当該センターは学則設置機関の位置付けであるが、今後どうあるべきかの議論が重要である。例えば、省令設置の大学博物館の調査・研究機関としての位置付けも論点であろう。大学は、特に国立大学は地域に密着した高等教育機関としての使命が益々求められる。その意味では単なる研究機関にとどまらず、実践できるメリットを最大限に活用し、地域の埋蔵文化財関係者の研修機関を担うとか、最先端研究機能を備え地域の埋蔵文化財研究をリードする方向性が期待されるのではないかと思慮される。

2. 調査・研究に関する点検・評価

a. 検証システムの適切性

*「調査研究年報」「センター報」や、展示機能等によって、外部には効果的に機能している。

*宮城県内の民間研究機関で生じた事実のねつ造問題を受けて、文化庁は順法化と発掘調査関係の改善策を公共団体に通知した。報告書のすみやかな刊行や、内部的検証にとどまらず適切な検証システムが公的機関（国立大学・公共団体等）には一層求められる。そのため、透明性が確保された検証システムの構築は緊急の課題である。

b. 活性化状況

*調査・研究では報告書の刊行の遅れはみられるが、発掘調査では多大な成果を上げていると思う。

*調査、報告書発行、遺物保存処理を適切に行うためには、適切な人的配置を主とする執行体制の充実

が望まれる。

c. 活性化促進の条件整備状況とその有効性

*大学内でのコンセンサスの醸成が常に必要。

*長期的な展望のもと施設の整備をすべきである。

*将来的には人文学博物館でのセンター機能等として充実させるべきである。

3. 管理運営に関する点検・評価

*専任助教授を配置し、センター事業の現行体制が確立できたことは評価できる。

*労働安全対策で、熱心な取り組みがなされていることは評価できる。

*情報化への適切な対応が不可欠。

4. 自己点検・評価の組織体制に関する点検・評価

a. 自己点検・評価の体制(常設的システム)とその活動の有効性

*自己評価委員会が、1996年以来なげ開催されなかつたかの整理(反省)は意識改革の面からまた、今後の機能活性化のために必要でないかと思われる

b. 自己点検・評価を基礎に将来の発展に向けた改善・改革を行うためのシステムに関する点検・評価

*学外の機関や有識者、更には学生も入れた人々による点検・評価は必要である。

*特に情報公開の理念・方策が強く求められる。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価について

2000年12月22日

岡山県古代吉備文化財センター・所長

正岡 雄夫

1. 理念・目的に関する点検・評価

岡山大学では、独自な調査体制を作り、対応されてきたが、岡山県下で実施されている県市町村による発掘調査等との連携を視野に入れることも、今後必要になるのではないだろうか。今後に向けた継続的な体制整備によって、調査・研究・遺物の保管・公開といった取り組みのさらなる発展が期待される。

2. 調査・研究に関する点検・評価

a. 検証システムの適切性

学内の研究者による日常的な連携が必要と考えられているが、諸分野の研究者は、目的をもった研究活動を行っておられ、発掘調査のように、常に対象も異なり、何時、どのようなものを調査・研究すればよいのかといったことは、なかなか難しい対応を迫られることにならないだろうか。

b. 活性化状況

発掘調査件数・面積の増加は、どうしても整理作業や報告書刊行の遅延につながりかねない。体制の強

岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

充が望まれるが、将来を見据えた対応策が課題とならないだろうか。

c. 活性化促進の条件整備状況とその有効性

学則設置の機関という性格もあり、ユニバーシティミュージアム構想の重要性が考えられるが、文部省の予算化の中で、全国の国立大学に設置する事が可能なのがどうか、また、増加する一方の遺物の保存・保管への対応が十分に実施する事が可能なのか、今後も検討が進められることと思う。

3. 管理運営に関する点検・評価

自立した組織としての確立を望まれているが、継続して雇用される職員の充実が必要ではないだろうか。

4. 自己点検・評価の組織体制に関する点検・評価

a. 自己点検・評価の恒常的システムとその評価

大学内外の関係者との意見交換を実施することは、問題点を明確化する事ができるのではないだろうか。

b. 自己点検・評価を基礎にした将来の発展に向けた改善・改革を行うためのシステムに関する点検・評価

現在のところ、大学内で実施される開発に伴う発掘調査等については、県市町村との関係において、十分な交流が実施されていなかったように思われる。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価報告書に対する意見

2000年12月22日

岡山市教育委員会・文化財課長

出宮 鶴尚

直接に市民・法人等との行政的対応を義務付けられている「市」という地方（窓口的）行政段階で、埋蔵文化財保護政策に携わっている者として、「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価報告書」に対する意見・感想を申し述べる。

1. 全体的感想

国立岡山大学の岡山キャンパスは、従来埋蔵文化財包蔵地にはないと認識されていたが、施設建設に伴う大学からの依頼による岡山市教育委員会の試掘調査で、1981年に鹿田キャンパス、1982年に津島キャンパスと相次いで遺跡遺物が発見され、埋蔵文化財包蔵地として文化財保護法の適用地に至った。1983年から施設建設に伴う埋蔵文化財の保護保存という行政的課題を岡山大学が独自に対応するようになった経過の歴史から見れば、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「埋蔵調査センター」とする）がこれまで行った大学構内における記録保存の発掘調査の実績と実施体制の整備については、国立の大学にふさわしい対応と評価される。

その一方で、施設建設に伴う埋蔵文化財の保護保存という行政的課題に対して、埋文調査センターの設置基盤（根拠法規）と所管事象並びに職務権限などの、大学内における一セクションとして行政的機能を果たすための条件整備が、どのように用られているのか不透明感を覚える面もある。

2. 理念・目的に関する点検・評価について

市の行政役割としては埋蔵文化財の記録保存の発掘調査は、建設等による他の目的に起因するその破壊に対する対処措置としての、あくまで行政的対応策との認識に立っている。記録保存は、その手段手法が学術研究の発掘調査と同じであるが、学術研究の理念・目的とは次元を異にしており、破壊に伴う埋蔵文化財の保存協議を経た後の事後措置であって、あくまで「行政」的対応の領域と考えられる。従って、埋文調査センターが記録保存を主務とする機関であれば、保存協議の職務権限とその結果に基づく記録保存の遂行の職掌が、大学機構内において確立されるべきだと思われる。

なお、津島キャンパスにおいて遺跡保護区を設定して、全学的に埋蔵文化財の保護に取組んだ実績は、文化財保護法の理念の体現として高く評価される。

3. 調査・研究活動に関する点検・評価について

1983年以降、埋文調査センターの記録保存を目途とした発掘調査は、独自の学術的成果を上げており、岡山平野の歴史的再構成の検証・考察に不可欠の歴史資料の蓄積となっている。また、こうした成果の市民社会と学界への還元においても、現地説明・保存活用・公開運用を通して積極的な取り組みがなされており、大学機関内という学際的環境に恵まれた体質ならではの実績と、高く評価される。

表題項目の中項目「検証システムの適切性」については、前掲2の項目で述べたように、埋文調査センターの大学機構上での位置付けと職掌の権限が、必ずしも明確でない今までの執務形態のように見受けられ、前記のように職務の本旨が行政的対応策の施行ということであれば、大学事務系職域の検証もさることながら、大学の研究機能の面からの全学的な学際レベルの検証評価のシステム化が要請されると言える。こうした観点からは、学内という同一レベルでの検証形態の一元で、上級レベルや学外の関係者による検証評価のシステムも必要であろう。

また「活性化状況」については、報告書の掲げる実績と課題は、そのとおりであると思われるが、将来的改善に対する展望では、これまでに提言して来たように埋文調査センターの設置基盤（法制面）・大学機構上での位置付け・職務権限と職員配置をオーソライズすることが、前提条件のように思われる。

さらに「活性化促進の条件整備状況とその有効性」については、記録保存の発掘調査段階と、成果の還元と公開活用の段階の、2段階から成り立っている要素を考慮すると、埋文調査センターとしての人員配置と職掌体系の整備が、さらには成果に基づく研究活動と情報サービス及び公開展示並びに学習機能の提供等々を備えた施設整備が要請されるといえよう。特に後者は開かれた大学という面からも、成果に即した施設規模を備える必要があるといえよう。

4. 管理運営に関する点検・評価について

本項目の問題点と将来的課題は、これまでに提起しているように埋文調査センターの実務組織としての

不安定さにあると言えよう。特に職員の任用制については、記録保存が最終手段であることを考慮すると、成果の蓄積には担当者の経験的難読性が不可欠であり、また、地域への還元にあたっても人との繋がりの心地性も大切であり、地域との連携の面からも組織の発展のために、期限を前提としない方が良いのではないか。発掘現場における労働安全衛生法の適用は、事業主体者の法規への積極的対応として評価される。

5. 自己点検・評価の組織体制に関する点検・評価について

本項目の設定と内容分析・検証・問題提起は、報告書としてよく取り纏められている。

6. 報告書に係る外部委員としての提言

報告書は、埋蔵調査センターの置かれた現況認識とその改善を、本旨の一つにしていると理解される。記録保存の重責を担いながら、これまでに提起した組織体としての不明確な要素、換言すれば不安定な職場環境に対して、私案の改善策を提言したい。

岡山大学は、岡山キャンパス内の埋蔵文化財に限らず、施設に近代化遺産や登録文化財に該当する有形文化財を少なからず保有している。また、岡山大学総合研究博物館（仮称）検討会が岡山大学の博物館整備を提起しており、大学の収集・所蔵・保管する学術資料の公開活用と情報提供が、今後課題となるであろう。このような文化財や学術資料を、学術的且つ一元的に管理運用する人材博物館の機能整備は、社会的にも学際的にも強く要請されているところであり、埋蔵文化財調査研究センターが、その機構及び施設の整備における中心的セクションとして、法規面と職掌面及び人員配置の整備を図る将来展望にあるといえよう。

（2）外部評価委員報告への対応

1. 理念・目的に関する点検・評価

a. 「地域の埋蔵文化財関係者の研修機関を担うとか、最先端研究機能を備え地域の埋蔵文化財研究をリードする方向性」の提案（松井委員）、「市町村による発掘調査等との連携」の指摘（正岡委員）について

「21世紀の岡山大学構想」は地域との連携を特に強調しているところであり、地元教育委員会の埋蔵文化財担当部局との結びつきを強化することが必要である。研修を担当する等の具体的な提案については、学内での本水の業務や課題とのかねあいがあり、今後、本学内外の関係方面との協議が必要である。

b. 「大学内における一セクションとして行政的機能を果たすための条件整備が、どのように図られているのか不透明感を覚える（出宮委員）について

本学構内での施設建設にあたっては岡山大学長が文化財保護法第7条の3の規定に基づいて文化庁長官に協議し、その回答として岡山県教育委員会教育長から「工事着手前に発掘調査を実施して下さい」という文書が岡山県教育委員会経由で本学学長宛に出されている。本センターは、この回答に基づいて発掘調査を実施し、本学の文化財保護法上の責任を果たす役割を担っているのであって、文化財保護にかかる特別な法的権限や「行政的機能」を有しているわけではない。本センターの設置・目的・職掌等は岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程で明瞭に規定されており、不透明感はない。ただ、その指摘が、本

センターが省令設置となっていない問題を意味するのであれば、現在大学博物館を目指していることを含め、今後とももらかの形で省令設置となるよう努めたい。

c. 広報活動の不十分さ（松井委員）について—

発掘調査現場の説明会・展示会等の企画については、地域への案内の配布や報道機関等との連携によりそれなりに広報活動をおこなってきたが、本センターの設置の意義や役割そのものについては必ずしも十分に理解されていない面があると思われる。今後は、たんに文化財保護に関する社会的な責任を果たす面にとどまらず、開かれた大学、地域に密着した大学の理念を実現する意味でも役割が大きいことを再確認しつつ、本学広報委員会等との連携も図りながら、広報活動の改善に努めたい。

2. 調査・研究に関する点検・評価

a. 発掘調査内容の検証システムの整備（松井委員）について—

従来から本センター運営委員が発掘調査現場を視察する方法をとっている。今後は、この面での地元教育委員会との連携もふくめ、検討していきたい。

b. 「適切な人員配置を主とする執行体制の充実」（松井委員）や「体制の拡充」（正岡委員）について—

近年の発掘調査件数と調査面積の増大により報告書刊行が遅滞しているが、当面、関係部局との協議により、報告書刊行のための整理作業を主におこなう臨時職員の雇用が実現するよう努めたい。

c. 「長期的な展望のもとでの施設の整備」（松井委員）、「増加する一方の遺物の保存・保管への対応」（正岡委員）、「成果に基づく研究活動と情報サービス及び公開展示並びに学習機能の提供等々を備えた施設整備」（出宮委員）について

大学博物館として恒久的な保管・展示施設を希望している。当面、収蔵・展示・整理作業をおこなうとのできる収蔵スペースの増設を目指したい。

3. 管理運営に関する点検・評価

a. 「職員の任期制」の問題（出宮委員）、継続して雇用される職員の充実（正岡委員）について—

本センター助手の任期制については、他の学内共同利用施設とともに実施することとなったものだが、指摘の通り調査研究業務には土地に根ざした永年の経験の蓄積が必要であり、また、本学と地域との密接な関係を発展させるうえで重要な役割を果たしうる本センターとしては、職員個々が地元各方面といかに信頼関係を築くかが重要な問題となる。指摘された問題点をふまえ、一定期間経過の後、助手の任期について点検をおこないたい。

4. 自己点検・評価の組織体制に関する点検・評価

a. 「自己評価委員会の活性化」（松井委員）、「学外の機関や有識者、さらに学生もいた人々による点検・評価」（松井委員）について—

自己点検・評価に対し、今回、初めて外部評価委員からの意見を得ることができた。今後ともこの方向を重視し、できるだけ幅広い立場の方々から点検・評価をしていただくよう努めたい。

2 岡山大学における教員の任期に関する規則

2000年9月5日に開催された運営委員会での審議をへて、10月26日付で下記のように制定された。昨年度、埋蔵文化財調査研究センターの助手の任期について「任期3年、再任可（原則として1回）」という条件が付されたが、本規則によって「任期3年、再任可（原則として1回、最大2回まで）」という条件に変更となった。

岡山大学における教員の任期に関する規則

（平成12年10月26日）
（岡大規則第5号）

（目的）

第1条 大学の教員等の任期に関する法律（平成9年法律第82号。以下「法」という。）第3条第1項の規定に基づき、岡山大学における教員の任期に関する規則を定める。

（教育研究組織及び職等）

第2条 任期を定めて任用する教員の職等は、別表に定めるとおりとする。

（同意）

第3条 任用に際しては、文書により、任用される者の同意を得なければならない。

（周知）

第4条 この規則を定め、又は改正したときは、岡山大学学報等により、広く周知を図るものとする。

（廃止）

第5条 この規則に定めるものほか、この規則の実施に関し必要な事項は、評議会の議を経て、学長が別に定める。

附 則

1 この規則は、平成12年10月26日から施行する。ただし、別表第1号関係に係る規定は、平成13年4月1日以降に任用される者について適用する。

2 岡山大学学内共同利用施設における助手の任期に関する規則（平成11年岡山大学規程第3号。以下「旧規則」という。）は、廃止する。

3 この規則の施行の際、現に旧規則により任用されている者の任期及び再任に関する事項については、なお従前の例による。

別表 法第4条第1項の規定に基づき任期を定めて任用する教員の職等（第2条関係）

（第1号関係）

教育研究組織	対象職種	任期	再任に関する事項
学部等	学科、講座、部門等		
環境理工学部	環境物質工学科全講座	助手	3年 再任可（最大2回まで）

(第2号関係)

教育研究組織		対象職種	任期	再任に関する事項
学部等	学科、講座、部門等			
総合情報処理センター	研究開発室セキュリティ技術部門	助手	5年	再任不可
遺伝子実験施設	遺伝子応用学部門	助手	5年	再任不可
埋蔵文化財調査研究センター		助手	3年	再任可(原則として1回、最大2回まで)

3 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項

1999年度に埋蔵文化財調査研究センター内で検討してきたものを、2000年4月6日開催の運営委員会で協議し、5月15日付けで下記の通り制定された。

岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項

平成12年5月15日

埋蔵文化財調査研究センター長

施設部長

I 諸負業者が留意すべき事項

- 諸負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
- 発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること。
- T事用電力の保安責任者をおくこと。
- 非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。
- 重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守せること。

II 発掘現場で注意すべき事項

1 服裝・装備・用具等

- 安全で機能的な服装にする。
- 平坦面から2m以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
- ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
- グラインダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
- スコップ・草削りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。

2 挖削

- のり面の角度

造成土：通常の土壤の場合は50～60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成上の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。

堆積土：基本的には75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。

発掘区の壁際を深さ1.5m以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。

その場合の段の巾は、60cm以上とする。

2) のり面の保護

のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。

3) 深い遺構（深さ1.5m以上の遺構）

遺構掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。

なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。

3 高所（高さ2m以上の場所）での作業

1) 作業中には安全帯を使用する。

2) 架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。

3) 2段以上の架台は、分解して移動させる。

4 発掘用機械類の操作

（ベルトコンベア・ポンプ等）

1) 調査用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。

2) ベルトコンベア・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。

3) ベルトコンベアを重ねたつなぎ目の部分には、なるべく土が落ちないような措置をする。

4) 原則としてベルトコンベアの直下での作業・通行を避ける。

5) ベルトコンベアの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。

（重機関係）

1) 重機の免許所有者以外は運転しない。

2) 運転者は、周囲の安全に注意する。

3) 稼働中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。

5 健康管理

1) 作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

III その他

1) 作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。

2) 調査区の状況や遺構などの特殊性・重要性等により、上記の2の1)～3)どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

以上

第4章 2000年度業務のまとめ

2000年度はセンター長以下、年度当初は助教授1名、助手6名、技術補佐員2名の業務体制で、構内遺跡の調査及び整理分析作業を行った。8月からは助手1名が特別休暇・育児休業をとり、助手5名の体制となった。

今年度の発掘調査は、ほぼ切れ目なく津島地区で4件、鹿田地区で1件実施された。まず、津島地区については、昨年度からの継続事業として津島岡大遺跡第23次調査が実施された。縄文時代後期の河道において、全国的にも類例の少ない杭群・杭列を検出し、縄文時代における河川利用の状況を知る上で貴重な情報を得ることができた。また、弥生時代前期では河道と、それに直交して築かれた堰と導水路が検出され、農耕開始期の水田技術を明らかにした重要な成果であった。第24・25次調査はいずれも小規模な発掘ではあったが、それぞれ有益な情報を得ることができた。第26次調査は今年度の3月に調査を開始し、2001年度に繼續されている。

鹿田地区では、エネルギーセンター建設に伴う第12次調査を実施した。弥生から古墳時代の井戸・溝・河道などを検出し、この時期の集落の南方への広がりを確認できた。また中世段階では、溝で区画された建物群や井戸を確認し、第9次・11次調査の成果とあわせて当時の土地利用の状況についての知見を得ることができた。

試掘・確認調査は2件実施した。内1件は、文部省科学研究費による津島岡大遺跡の縄文から弥生時代の環境復元を目的とした調査であり、遺跡の分布状況の確認や地形復元を行うとともに、土壌分析を実施し当時の自然環境の復元を行うことができた。

立会調査は津島・鹿田地区あわせて、計43件実施した。この内、鹿田地区的擁壁工事に伴う立会調査では、古代を中心とした土器が多く出土し、付近に古代集落の存在が想定できた。

室内業務の成果としては、定期刊行物である構内遺跡調査研究年報17号とセンター報24・25号を刊行した。また、自己評価・外部評価報告書の刊行も行った。今年度は発掘調査が続き室内作業を十分に行えなかったこともあり、発掘調査の報告書を刊行することができなかつたが、順次、報告書の刊行にむけて整理作業を進めている。

その他の活動として、今回で4回目となる「岡山大学キャンパス発掘成果展」を10月に開催した。小規模な展示会ではあったが、合計188人という予想を上回る見学者があり、発掘調査の成果を広く公開することができた。

今年度は、発掘調査5件（うち1件は次年度に継続）、試掘・確認調査2件、立会調査43件の実施、展示会の開催など、充実した業務内容であった。今後も学内外を問わず調査成果の公開・普及活動を積極的に行い、埋蔵文化財に対する更なる理解を得られるよう努めていく必要がある。

（高田浩司）

附 表

附表1 1982年度以前の構内主要調査(1980~1982年度)

年度	遺跡名 調査地区名	種類	所属	調査名称	調査組織	測量面積(cm ²)	文献	備考
1980	鹿島	立会	市	同附属病院棟新設	岡山市教育委員会	8		
1981	津島南 B026	"	市	古窯舍新設	"			
	津島北	"	文法	合併処理清埋設	"			
	津島北	"	文法	合併処理清埋設 社	"			
	津島南 B009 BC09~11	"		基幹整備(共同蔵取付)	"			
	津島南 BD~BE04~07	"		陸上競技場改修 (配水管埋設)	"			
	鹿田	"	災病	高気圧治療室新設	"			
	"	"		動物実験施設新設	"			試掘調査をせず破壊性 面等の調査
	"	"		病理解剖休憩室処理保管	岡山市教育委員会			
	"	"		廃新宮				
	"	"	災	運動場改修	"			
1982	津島 AV06-10 AW05-14 AX08,BE07 BE10	試掘		排水溝整備	"			津島AW14区で弥生時代包 含層確認、協議
	小崎法日黒 津島北 AN14	免掘	法文	配水管渠埋設(NP-1)埋設	岡山大学	24.0	3	(津島岡大第1次調査)
	津島南	試掘	学生	武道館新設	岡山市教育委員会	2.3		
	確認							
	津島北 AY15-16	"	法解	校舎新設	"	7.0		
	鹿田	"	災	標本保存庫新宮	岡山県教育委員会	8.0		
	"	"	医病	外来診療棟新設	"	4.0	添1	
	"	立会	災	動物実験施設関連排水 管・ガス管埋設	岡山県教育委員会			
	鹿田 AE~AK22 AE22~26	"	復	電話ケーブル埋設	岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化 財調査室	"		

文献 ① 光永真一「岡山大学医学部附属病院動物実験施設新設工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 1983 岡山県教育委員会

② 河本 旗 岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査、『岡山県埋蔵文化財報告』13 1983 岡山県教育委員会

3 番号は附表3の番号に対応する。

附表2 1999年度以前の構内主要調査（1983～1999年度）

附表2-（1）発掘調査

総合番号	年度	番号	地区名	構内庫原	所属	調査名稱	調査期間	面積(cm)	概要	文献
2.1983 + 1984	9	鹿 田	AU～BD28～40	医病	外來診療棟新宮〈鹿田第1次調査〉	'7.27～'11.22 '84.1.9～ 8.31	2188	弥生時代中期後半～中・近世集落址	7	
3 1983	10	鹿 田	BG～BH18～21	医病	NME-CT室新宮〈鹿田第2次調査〉	'8.1～'12.30	176	弥生時代後期～中世集落	7	
10 1983	11	津島南	BE14・18 BF17・18,BG14 BH14・15	農	排水管埋設〈津島岡大第2次調査〉	'84.1.9～ 3.5	265	弥生時代早・前期集落址	4	
10 1983	12	津島南	BH13	農	合併処理槽埋設〈津島岡大第2次調査〉	'11.14～ '11.22 '84.1.9～ 3.5	276	弥生時代早・前期集落址	4	
31 1986	1	鹿 田	CN～CL27・28 CT～CY19～27 CX～BD16～25 DD～BG22・23	医師	校舎新宮〈鹿田第3次調査〉	'6.2～'11.29	2390	古代～中世の集落址	10	
36 1986	2	津島北	AV00 AW00・01	学生	男子学生寮新宮〈津島岡大第3次調査〉	'12.1～ '87.6.18 '8.24～9.5	1550	彌文時代後期～弥生時代・19早期の河道、弥生時代の集落址・水田址、古代～近代の水田址	19	
38 1986	3	津島南	BF・BG09	学生	屋内運動場新宮〈津島岡大第4次調査〉	'87.1.10～ 1.22	70	弥生時代前期の溝、中世・6河道	6	
52 1987	2	鹿 田	BB～BH35～42	医病	管理棟新宮〈鹿田第5次調査〉	'10.6～ '88.3.2 '88.3.23～ 3.31	1192	弥生時代中期後半～中・近世の集落址	24	
54 1987	3	鹿 田	DD～DF25 DG～D127・28	医師	校舎周辺の配管〈鹿田第4次調査〉	'11.2～'11.21	30	古代の河道	10	
65 1988	1	津島北	AY06～08 AZ06・07	大白	自然科学研究科棟〈津島岡大第5次調査〉	'6.27～ '89.3.19	1537	彌文時代後期・弥生時代27早期の貯藏穴と河道、弥生時代～近世の水田址	27	
67 1988	2	津島北	AV・AW04・05	工	生物応用工学科棟〈津島岡大第5次調査〉	'9.20～ '89.5.31	600	彌文時代後期・弥生時代35早期の貯藏穴と河道、弥生時代～近世の水田址	35	
70 1988	3	津島北	AV・AW05・06	I.	情報工学科棟〈津島岡大第7次調査〉	'10.12～ '89.3.31	800	彌文後期・弥生時代早期集落址、弥生時代～近世水田址	35	
65 1990	1	津島北	AY・AZ08	大白	自然科学研究科棟〈津島岡大第5次調査〉	'4.3～'4.21	90	古墳時代後期の溝	27	
92 1990 + 1991	2	鹿 田	BW～DC67～71	ア	アイソトープ総合センター〈鹿田第6次調査〉	'11.20～ '91.6.301	690	弥生～古墳時代の溝・上・40塙、銅倉時代の溝・井戸・建物跡	40	

附表

総合 番号	年度	番号	地区名	構内座標	所属	調査名稱	調査期間	面積 (m ²)	概要	文献
96	1991	2	津島南	BD18・19	農	遺伝子実験施設〈津島岡大第8次調査A地点〉	97.7.23～12.25	650	縄文時代の土坑・土器・石器他、弥生時代～近世の構造等	32
96	1991	3	津島南	BN13	農	〈合併処理槽〉〈津島岡大第8次調査B地点〉	97.7.23～12.2	140	弥生土器・石器他、古代～近世水田	32
104	1992	1	津島北	AB～AW01	工	生体機能応用工学科棟〈津島岡大第9次調査〉	97.1～'93.1.29	650	縄文時代後期・弥生時代・平安時代の貯蔵穴・河窓・弥生時代～近世の水田址	47
108	1992	2	津島南	BB～BC10～11	保	保健管理センター・〈津島岡大第10次調査〉	93.2.1～3.31, 4.17～7.31	400	弥生時代後期土坑等、弥生～古墳時代住居・土坑、古墳時代住居址、近世耕地・野菜ほか	25
	1993									30
115	1993	2	津島北	AV～AW11～12	情	総合情報処理センター・〈津島岡大第11次調査〉	94.1～'94.1.11	640	縄文後期～弥生前期堅穴状遺構、弥生中期水田址、古墳時代水田址ほか	36
127	1993	1	津島北	AV～AW13～14	國	図書館〈津島岡大第12次調査〉	94.2.9～3.31, 4.1～11.30	1472	縄文時代土坑、弥生時代～古墳時代溝水田耕跡、古墳時代・難波、中世溝ほか	33
	1994									
134	1994	2	津島北	AB～AX11～12	事	福利厚生施設北棟〈津島岡大第13次調査〉	94.6～11.30, '95.7.10～10.4	816	縄文時代後期ピット、弥生時代水田、弥生～古墳時代耕、近代耕作面	41
	1995									
144	1995	2	津島南	BB～BC12～13	事	福利厚生施設南棟〈津島岡大第14次調査〉	95.2.5～2.14	856	弥生時代の水田、弥生～古墳時代の溝、土坑	46
147	1995	3	津島北	AW00・01	サ	サクライトベンチャーピジネスラボラトリ－新宮〈津島岡大第15次調査〉	95.1.16～4.25	1600	縄文後期の貯蔵穴・堅穴住居・炉・ピット・土坑・河道、弥生早期の貯蔵穴・河道、弥生時代の水田・溝	38
	1996									
153	1996	2	津島南	BD19～20	農・漁	動物実験棟新館〈津島岡大第16次調査〉	96.5.7～15	30.3	A地点：縄文時代と古墳時代の土坑、B地点：中世の溝、古代の軒穴剝、弥生時代の水田	44
154	1996	3	津島北	AR02～04	漁	環境理工学部新館〈津島岡大第17次調査〉	96.5.21～1.9	1451	縄文時代後期の住居址、ピット群・土坑、弥生時代の溝・水田・古代の水田	44
173	1997	1	二 朝		固	実験研究棟新館その他工事・本体工事部分〈福島第1次調査〉	97.5.10～6.20, 7.28～31	269	縄文時代早期・弥生時代中期・中近世包含層・遺構確認	55
174	1997	3	三 朝		固	実験研究棟新館その他工事・ロード部分調査〈福島第2次調査〉	97.11.25～12.5	120	近世・中世・古代の包含層・遺構確認	55
175	1997	4	鹿 岛	BY55～BX81・BY56～57	医	基礎医学棟新館〈鹿島第7次調査〉	98.2.27～8.6	829	古墳時代初期の住居・掘立柱建物等、中世の溝・ピット群・井戸、近世の水田・溝、中世サンセ木製品出土	50
	1998	1								53

総合番号	年度	番号	地区名	構内座標	所属	調査名 称	調査期間	面積 (m ²)	概 要	文献
186	1998	2	津島南	RH11	事	福利施設(南)新宮に伴うポンプ構成設工事に伴う調査(津島同大第18次調査)	98.4.7～4.10	16	古代の溝状遺構	53
187	1998	3	津島北	AZ09・10	理	ローラボレージヨンセントー新宮に伴う調査(津島同大第19次調査)	98.7.27～99.2.18	1019	縄文後期遺構、弥生前期の河道、古墳時代の墓群、中世溝、近世道路状遺構、溝	53
188	1998	4	鹿 田	BP～BS30～32	医病	H.T治療室新宮に伴う調査(鹿田第8次調査)	98.7.28～9.1	156	古墳時代溝、中世溝	53
189	1998	5	津島北	AY07	理	校舎(Ⅰ期)新宮に伴うポンプ構成設工事に伴う調査(津島同大第20次調査)	98.10.19～28	16	黒色土・面溝、ビット、中世溝	53
190	1998	6	津島北	AX09	工	エレベーター設置に伴う調査(津島同大第21次調査)	98.11.6～24	30.2	縄文時代中期土坑、弥生時代早期～中期溝、古代土坑、溝確認。縄文後期石包丁状石器1点出土	53
191	1998 + 1999	7	鹿 田	CD33～37, CK-CF28～37, CG～CJ20～37, CK-CL25～37	医病	病棟新宮に伴う調査(鹿田第9次調査)	98.11.27～99.5.11	2088	弥生時代木田社群、溝、古代耕作痕、中世溝、井戸、柱火群、上塙窓。近世溝、井戸、土坑、墨書きのある杭、児杵木筒出土	53
192	1998 + 1999	8	津島北	AW02・03	理	校舎(Ⅱ期)新宮に伴う調査(津島同大第22次調査)	1999.3.1～7.12	773.5	縄文後期河道・土坑・ビット群、弥生時代河道、木田社群、古墳時代溝、古代溝、木田社群、中世溝、近世溝、土坑を確認	53
210	1999	3	鹿 田	CD～CN10～12, DD～DF16～22	医	共同排水設置に伴う調査(鹿田第10次調査)	99.5.7～99.10.14	244.1	ヒューム管、高圧マンホール、P.Cボッタスカルバー、地盤では古代の杭列、鉄道立杭部分では弥生ビット、近世溝	56
211	1999	4	鹿 田	CD～CN19～42	医病	病棟新宮に伴う調査(鹿田第11次調査)	99.8.19～12.22	2020	弥生時代水田社群、古代池状遺構、中世～近世溝、井戸、ビット群等確認	56
212	1999	5	津島北	AZ15, BA14	大文	総合校舎新宮に伴う調査(津島同大第23次調査)	00.2.3～7.28	1339	縄文後期河道、杭列、弥生前期河道、堰、溝。弥生中期～古墳溝・ビット、中世～近世溝	56

附表2-(2) 試掘・確認調査

総合番号	年度	番号	地区名	構内座標	所属	調査名 称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
4	1983	1	津島南	RH13	農	合併処理場予定地	2.5		弥生時代前期土器片(‘83年度発掘)、	1
5	1983	2	津島南	BP17	農	排水管・中間ポンプ場予定地	3.5			1

附表

番号	年度	番号	地区名	横内座標	所属	調査名稱	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要		文献	
									機械	要		
8	1983	3	津島南	RE～BG14 BE～BH15 BE18 BF16～18	農	排水埋設予定地	2.0		29ヶ所で試掘、弥生時代 前期土器片（'83年度発 掘）		1	
11	1983	5	津島北	AW05	工	校舎新築予定地	3.0	1	土器片出土		1	
12	1983	5	津島南	BC・BD15	事	大学事務局新築予定地	2.0～3.0	0.9	土器片出土		1	
13	1983	6	津島南	BH10	保	保健管理センター新築予 定地	2.0～3.0	0.8	講義出		1	
14	1983	4	津島南	BF22・23	農	農場畜舍新築予定地	2.0～3.0	0.6	土器片出土（1987年度工 事立会）		1	
15	1983	7	津島南	BT16	事	津島宿舎新築予定地2.0	0.9	0.9	土器片出土（1987年度工 事立会）		1	
21	1984	1	鹿	BU30・31	医病	内科棟北側受水槽予定地	1.4	0.5～0.7	中世土器・包含層確認（盛 土保存）		2	
22	1984	2	鹿	田	CT・CU25 CZ19・20・ 23・24	灰窯	次塙短期大学部校舎新築 予定地	2.7	0.8～1.0	中世・古代の遺物出土 （1986年度発掘調査）		2
23	1985	3	津島北	AV・AW99～01	学生	刃子学生寮新築予定地	2.0～3.0	1	縄文時代～中世の遺構・ 遺物（1986年度発掘調査）		5	
24	1985	2	津島北	AX02	教育	研究棟予定地	2.6～3.4	1.2	縄文～弥生時代土器出土		5	
25	1985	1	津島南	BE08	教養	講義棟予定地	3.5	1.2	遺構・遺物未確認（1986 年度工事立会）		5	
29	1985	4	鹿	田	AJ33、AI40 AJ・AK26	医病	外来診療棟環境整備工事 に先立つ施用確認調査	2.2～3.0; 0.9～1.4		弥生時代～中世の遺物		5
35	1986	3	津島南	BF・BG09	学生	屋内運動場新築予定地	2.4 1.2～1.7	1.1	弥生時代前期病・中世河 道敷出（1985年度発掘調 査）		6	
37	1986	4	津島北	AY・AZ07	大自	自然科学研究科棟新築予 定地（1988年度発掘調査）	1.6～3.2 0.6～0.8		縄文時代中期末～後期の 遺構・遺物（1988年度発 掘調査）		6	
45	1987	4	土	生	AP02	事	外国人宿舎建設予定地	2.2～2.8		近世・弥生時代・縄文時 代の遺構面確認		8
46	1987	5	津島北	AV11	情	総合情報処理センター新 營予定地	2.0～3.0	2	黒色土を標高2.2 m前後 で確認（1993年度発掘調 査）		8	
48	1987	6	津島北	AY09	理	身体障害者用エレベー ター建設予定地	3.0～3.5	約1.0	近世・中世の遺物、中世・ 古代の水田地（継続して 発掘調査に及ぶ）		8	
49	1987	7	津島南	BD09	教育	身体障害者用エレベー ター建設予定地	2.5	0.7	縄文時代土器群を確認、 縄文・中世・近世土器出 土（継続して発掘調査に 及ぶ）		8	

総合番号	年度	番号	地区名	構内座標	所属	調査名稱	掘削深度 (cm)	造成土厚 (cm)	概要文獻
61	1988	17	津島北	AN04・06 AW04	I.	校舎建設予定地	2.0~3.5		黒色土を標高3m弱で確認。溝状遺構・水田跡検出。縄文~近世土器出土。(1988年)
62	1988	19	津島市	BD18・19	農業	動物実験飼育施設及び遺伝子実験施設	2.3	1.1~1.2	黒色土を標高約2.3mで確認。溝状遺構・縄文~中世遺物検出
63	1988	20	津島南	BC29	事	国際交流会館	2.5	1.2	近世・中世の遺物出土(1988年度工事立会)
77	1989	3	津島北	AZ17	人自	合併處理施設予定地	4.0	1.6~2.0	中世~明治の水田の跡跡・溝(1989年度工事立会)
78	1989	4	津島南	BD02	学生	学生合宿所予定地	2.0~3.2	1	弥生時代早・前期の粋跡(1989年度工事立会)
79	1989	2	津島市	AZ・BA05	教育	身体障害者用エレベーター	2.5	0.8	縄文時代後期・弥生時代早期の sond込み。縄文時代後期~中世土器片(小規模発掘、面積38.5m ²)
83	1990	5	津島北	AV・AW13	図	図書館新館予定地	3	1.4~1.6	古代水田。弥生~古代の溝(1990~1993年度発掘調査)
87	1990	3	津島南	BC02	学生	学生合宿所ボンブ橋予定地	2.5	1.1	弥生時代前期粋跡、中世土器片
89	1990	4	倉敷 地区		資生	資源生物科学研究所遺跡 確認調査	2.5	0.7	中世後半以降の土器片
90	1990	5	鹿田	BY・BZ68	ア	アイソトープ総合センター予定地	2.3	1.2~1.3	中世土器質土器など(1990~91年度発掘調査)
91	1990	6	津島北	AW・AX11	事	福利厚生施設予定地	3.9	1.4~1.6	弥生~古墳時代の溝、中世土器小片
121	1993	3	津島南	BE~BF・22~23	農	農学部試用耕地実験実習施設	1.5		中~近世耕土
136	1994	3	津島南	BD20	農業	動物実験施設	2.0	0.9	GL-1.4mで黒色土、縄文土器・点出土
140	1995	4	津島市	BE26	事	国際交流会館新館予定地	4.1~2.4	1.6	造成土以下、明治・近世・中世と思われる土層確認。以下は湿地地帯。出土遺物なし。遺構は明治の礎のみ
145	1995	5	津島北	AW02・03	理	環境理工学部新館	2.4	1.2	標高3.2mで黒色土上面、弥生時代の溝状遺構検出
150	1995	6	津島南	BF07	学	ボクシング部ボックス移設	96.3.18	3	標高2.5mで黒色土確認。弥生~古墳時代の溝2条・古代溝1条確認

附表

総合番号	年度	番号	地区名	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
176	1997	5	三朝		医	実験研究施設新宮「事に伴う試掘調査	1.66~2.1	0.8	TP 1では1.4mでシルト質の層、以下砂層がラミナ状に堆積。TP 2では弥生・近世の2枚の黒色層を確認	50
177	1997	8	鹿田	BT57	医	基礎医学棟 鹿田第7次調査回収	2.2	0.9	中世・牟牛時代の包含層を確認	50
193	1998	9	津島北	A209	理	コラボレーションセンター新宮に伴う試掘調査	2.7~3.4	1.3	標高2.7mで黒色土、弥生前期の河道、牟牛時代以降の遺構確認	53
194	1998	10	津島北	AW02・03	理	改修(Ⅰ期)新宮に伴う調査	4.5	1.2	2.1mで黒色土、古代~古墳時代の構造確認	53
195	1998	11	鹿田	CF-CG43-44、CH25・26、CG35・36、CK15	医病	病棟新宮に伴う調査	2.0~2.4	1.0	4ヶ所、中世2面、近世の遺構向を確認、中世段階は遺構密度が高い可能性、古墳時代以前については着専か?	53
196	1998	12	倉敷		費生研	バイオ実験棟新宮工事に伴う調査	1.5	0.4	近世干拓地内、遺構未確認	53
197	1998	13	津島北	AW04	工	システム工学科棟新宮に伴う調査	2.8	1.0	1.8mで黒色土、細文後期の遺構確認	53
198	1998	14	津島北	AW02-03-06、AV03	車	遺跡保護区整備に伴う調査	2.4~3.8	0.8~1.6	TP 1・3・5は最高地状、TP 2・4は低湿地状、TP 1で弥生層、TP 3で弥生層・ビット、TP 4で小世弱	53
213	1999	6	津島北	AZ15、BA14	人文	総合校舎新宮に伴う調査	①2.7、 ②3.5	①0.8 ②1.1	①標高2.2mで黒色土、以下疊積びり砂層=最高地状、②標高1.9mで黒色土・近似層、以下河道状の堆積堆証	56
214	1999	7	津島北	AV08	工	電波塔室新宮に伴う調査	1.2	0.2	現表上以下は基盤となる岩盤層	56

附表2-(3) 立会調査

総合番号	年度	番号	地区名	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
1	1983	13	東山		教育	附属中学校新宮	4.0~5.0		シルト層中	1
6	1983	23	鹿田	A0~AW22	医病	外来治療棟蒸気管配管設	1.3		弥生時代後期土器・分銅形土器・貝塚	1
20	1984	20	津島南	B115~17	半	南北合併処理槽関係配水管理設	1.0~2.2	1.0	磚・土坑検出。弥生土器・須恵器	2
26	1985	6	鹿田	AW~BB23 昭・B124	医病	外来治療棟関係屋外排水管理設	1.3~1.7	0.7~1.3	中世・弥生の遺構・遺物を確認	5

総合番号	年度	番号	地区名	構内座標	所属	調査名 称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文 献
30	1985	12	鹿 田	AG31, AG24 AP23	医病	基盤埋設整地工事 電気配線ハンドホール掘削	1.2~1.7	0.9~1.3	中世包含層・ビット	5
33	1986	12	津島南	BE08・09	教養	校舎新宮	2.3	1.3	中近世の溝・上器	6
40	1986	21	津島南	BG08	学生	ハンドボールコート新設	0.2~2.0	0.8	黒色土確認	6
42	1986	24	鹿 田	CL~CR12 CR~CX13 CX~DA14	医師	廻廊及び回障工事	2	0.8~1.0	中世包含層	6
43	1986	26	津島南	BP07・08	教養	校舎新宮に伴う電気配管	1.8	0.9	中世包含層	6
44	1987	8	鹿 田	BC37	医病	管理棟新宮に伴う基礎坑 確認	2.5		弥生時代包含層・遺構 確認	8
66	1988	17	津島南	BC10・11	教養	テニスコート夜間照明施設	2.2	1.5	黒色土を皮付下約2m で確認、西に向かう落ちを推定	11
74	1989	8	津島北	AZ08	大白	自然科学研究科棟新宮 工事用道路	1.4		弥生時代後期水田・溝 確認	14
75	1989	10	津島北	AU05	工	校舎新宮に伴う電柱架設	1.9	1.0	黒色土確認	14
80	1989	46	鹿 田	CH30・37~44 CJ・CK45 CL28・29	医病	旧管埋地盤地盤整備 外灯基礎掘削	1.2~1.5	0.7~1.0	中世層を確認	14
85	1990	16	津島北	AV04~10	事	岡山市道本町津島東駅拡幅 に伴う補償工事① 穴柱移設	0.4~3.0	0.6~1.4	5ヶ所、黒色土層、条 里溝。(1989年度試掘調 査)	18
88	1990~20	津島北	BC02~04 RD03・04		事	岡山市道本町津島東駅拡幅 に伴う補償工事② 学 生会宿所給排水管設置	2.3	1.2	GL~2.3mで黒色土確認	18
95	1991	9	津島南	RC18	遺	防火用水槽去	2.0	0.8	基礎跡まで掘削。石礫、21 出土	
99	1991	17	津島南	RB16	事	基盤整備(電気) ハンド ホール・アース板	1.7~1.8	0.5	明治層～淡灰色粘土層	21
101	1991	19	津島北	BD15	事	基盤整備(電気) アース 板埋設	1.7	1.0	GL~1.5mで黒色土上面	21
102	1991	40	津島南	BC・BE・BF12	事	南北道路街灯設置	1.5		3ヶ所、GL~1.4mで古 代窯確認	21
105	1992	15	津島南	BD18・19	遺	遺伝子実験施設ハンド ホール設置	0.7~1.5		8ヶ所のうち1ヶ所の データ有効。GL~0.75m ~1.1mで明治層上 面開文後期層まで、 溝2条検出	25
107	1992	28	鹿 田	BG65, BG~ BG66, BG67~ 72, BW・CA1	ア	アイソトープセンター集 水井・ヒューム管設置	1.4~1.5		GL~0.9mで明治層上 面、中世溝	25
110	1992	34	津島北	AV12	事	周囲公園北側駐車場整 備	3	1.7	過成土以下粘土層	25
113	1992	41	鹿 田	C173	医	テニスコート協電柱埋設	1.2	1.0	古代上器1点	25
118	1993	17	津島南	BB~BC・10~ 12	保	保育管理センター新宮に 伴う外牆工事ほか(電気 配線)	1.8	0.6~0.7	明治層以下保育管理セ ンター・本調査と同じ層 が、黒褐色土は-1.5m~ 1.7m、その直下に基盤 層	30

附表

総合 番号	年度	番号	地区名	構内座標	所属	調査名稱	探削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
119	1993	23	津島北	BA07	事	基幹整備 R.I.共同利用施設排水処理施設他設置	3.2		明治～中世層、暗褐色土層確認、古代溝？、織文瓦片？土器片	30
120	1993	28	津島南	BD～BE13	事	環境整備 南北道路沿水路ボックスカルバート整設	1.5	1.0	明治層、中世～近世層を確認	30
122	1993	39	津島南	BB05～07 BC05～41	学生	野球場バッケネット・防球ネット改修	2.0～3.2	1.0	-1.2～2.0m付近で黑色土を確認、以下は黄褐色～青灰色粘土	30
124	1993	33	津島南	BB～BE12～13	事	環境整備 木銀灯設置	1.8	0.5～1.2	10ヶ所、近世～中世層まで掘削、一部で暗褐色土層を確認	30
125	1993	17	津島南	BB11	保	保健管理センター新館に伴う山林改修・電気配線	1.1	0.8	明治層確認、赤土器片	30
126	1993	34	津島南	BD～BE12～13	事	環境整備信号機設置	1.6	1.0	明治層以下、近世から中世層、一部で暗褐色土層	30
129	1994	5	鹿 田	DB60～62	医	護岸改修工事	1.5	0.8	造成土以下明治～近世？層を一層、以下はすべて遺構埋土の可能性あり、溝3条、ピット9箇認	33
131	1994	9	津島南	BD～BE～BP04～07	市	陸上競技場照明灯設置	2	0.96	照明天井（径80cm 深さ10m）オーバー掘削、GL-1.92～-2.00mで黒色土確認	33
133	1994	13	津島北	AV10, AW10, AU11	情	総合情報処理センター新宮電気工事	2.2	1.5	明治1面、近世2面、中世（近世か？）1面、近世糞堆認、GL-1.7～2.0mで黒色土確認	33
137	1994	20	津島南	BB20	農	競却場	2.2	1.5	GL-1.9mで黒色土確認	33
141	1995.11	鹿 田	BF17～18	医病	基幹整備附属病院連絡通路新設	1.5	1.0	造成土以下茶褐色土、青灰色粘質土層、遺物なし	38	
146	1995	14	鹿 田	CB07～08	医病	基幹整備液酸タンク設置工事	2.3	1.0	中世遺構2箇確認、溝3箇確認、中世基盤層がしっかりといる。溝内から中世・古代の1箇器出土	38
148	1995	17	鹿 田	CC～CD08～10	医病	基幹整備附属病院液酸タンクU字溝設工事	1.23	0.85	包含層確認、中世の土器断片採取、既設管、基盤などで遺存部分は区間全長の1/2程度	38
149	1995	23	鹿 田	DP56～67	医	防球ネット取扱工事	3	0.8	径60cmを12箇所、4箇所で1巻片、石器の採取あり、調査区内寄りはGL-2m以下が旧河道か	38

附表

総合番号	年度	番号	地区名	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
152	1996	4	津島南	BC18	農業	動物実験棟新設に伴う造成土取り	2.2	1.9	黒色土層付近まで掘削	44
155	1996	5	津島市	BD16~19	農業	動物実験棟新設に伴うハンドホール設置工事	1.3		4ヶ所、造成土以下5層確認	44
160	1996	12	津島北	AV02, AV03, AV04, AV09, AW02, AW04	サ	サテライトベンチャービジネスラボラトリ新館外灯設置工事	1.0~1.5	0.76~1.1	6ヶ所、明治層2面、近世層2面、中世層?1面、新生層?1面確認	44
161	1996	13	津島北	AV03~AW03	サ	サテライトベンチャービジネスラボラトリ新館外灯設置工事	2	0.95	弥生時代の層まで掘削、古墳時代前期の遺構・遺物確認	44
164	1996	18	津島北	AW03	理	理成理工学部新館予定地電柱移設工事	2		黒色土まで掘削	44
169	1996	25	津島北	AV13	四	附属図書館新館外構工事	1.3	1.0	造成土以下、青灰色粘質土、灰褐色粘質土、灰褐色粘質土を確認	44
178	1997	9	二橋		四	実験研究棟新設に伴う掩埋部分	0.5		側面部分にトレントン3カ所、地山確認	50
179	1997	10	三橋		四	実験研究棟新設に伴う板状T字部分	4.0	1.5	GL-1.5mで包含層確認	50
180	1997	11	一橋		四	実験研究棟新設に伴う木休工事部分	2.0~2.5		工事範囲内未調査のうち1/2掘削前、側面で遺構確認	50
181	1997	16	津島南	BB13~BII13	事	南北道路ガス管埋設工事	1.5		中世層まで掘削	50
182	1997	18	三橋		四	実験研究棟新設に伴う電気埋設管路工事	1.0		1.0mで中世層、包含層は東に向かい上面レベルが上昇	50
183	1997	19	津島南		事	南北道路ガス管埋設工事	1.5		中世の粘土層検出	50
184	1997	24	津島市	BC12	事	福利厚生施設新設に伴う共同蔵新設工事	2.0	0.8	GL-1.65mで黒色土層確認	50
185	1997	29	東山		教	教育学部附属小・中学校他隣障改修工事	1.2	0.79	GL-1.1mで水田確認、溝1条	50
199	1998	15	津島北	BA09	事	構内外灯設置工事	1.47	1.0	GL-1.42mで黒色土上面	53
200	1998	22	津島北	AZ09, BA09	理	コラボレーションセンター支障配管充設工事	1.4	1.0	GL-1.4mで黒色土上面	53
201	1998	24	津島南	BB12, BC12	事	市福利厚生施設工事	1.4	0.95	中世層まで掘削	53
202	1998	31	津島北	AX03~AY06	理	校舎新設に伴うガス管埋設工事	1.2~1.4	0.65~0.95	中世層まで掘削	53
203	1998	34	津島南	BC10	事	学生会館改修に伴うトランク敷設工事	2.2	1.45	GL-1.7mまで灰褐色粘土層、2.2mまで青灰色粘土層	53
204	1998	35	津島北	BA00	事	NTT電話移設工事	1.5	0.9	造成土以下は褐色系粘質土	53

附表

組合番号	年度	番号	地区名	構内座標	所属	調査名	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文部
205	1998	36	此田	BV73, CN78	医	校舎新設に伴う仮設電柱工事	1.2	1.0	中世層まで掘削	53
206	1998	41	津島北	AX03～AY07	環	実験排水管設工事	1.4	0.6～1.4	9地点のうち5地点で 中世層まで、2地点で 古代層、1地点で古墳 時代層まで掘削	53
207	1998	42	津島北	AW02, AW02	環	馬場移設に伴う樹木移植	2.2	1.1～1.3	2.0mで弥生後期層、 2.2mで縄文基盤層まで 掘削	53
208	1998	44	津島北	AV03, AW03	環	校舎新設に伴う生活排水 桟設工事	1.97	1.4	古墳時代層まで掘削。 乳突・土間礫片採集	53
209	1998	45	津島北	AW03	環	校舎新設に伴うガス管理 設工事	1.45	1.0	中世層まで掘削	53
215	1999		津島北		施	構内外灯設置工事	1.15～1.35	0.5～1.2	28ヶ所、うち3ヶ所で 黒色土確認	56
216	1999		津島北	AW02・03	環	校舎(Ⅰ期)新設に伴う 生活排水・実験排水構	0.8～1.5	1.18～1.25	15ヶ所、うち1ヶ所で 中世層まで掘削	56
217	1999		津島北	AZ08・09	理	コラボレーションセン タースタジオ工事に伴うハン ドホール	1.45～2.1	1.03～1.16	2ヶ所、うち1ヶ所で 古墳時代層まで掘削	56
218	1999		津島北	AW02	環	校舎(Ⅱ期)新設に伴う ストーブ設置工事	3.5	1.2	面積25m ² 、黒色土下面 を検査、近代土坑、古 代溝、縄文後期ピット 確認	56
219	1999		鹿田	BV65～71	医	研究棟新設に伴う給排水 機・管	1.2～1.4	0.9	中世層まで掘削	56
220	1999		鹿田	HU65	医	研究棟新設に伴う換水槽	2.2	1.1	面積8.2m ² 、近世溝、中 世溝、ピット確認	56
221	1999		鹿田	BY42～44, BI43～44	医病	基幹整備(電気設備)地 中配管	1.25～1.45	0.45～0.5	中世層まで掘削、時期 不明の遺構埋下確認	56
222	1999		鹿田	CF21～28, CF～CL28, CD～CF28～33	医病	病棟新設に伴う共同溝解 体	1.7		面積18m ² 、鹿田11次調 査3区南側部分で中世 ピット確認	56
223	1999		津島	AZ09	理	コラボレーションセン タースタジオに伴う排水構	1.0～1.2	0.8～1.0	6ヶ所、うち1ヶ所で 黒色土対応層まで掘削	56
224	1999		鹿田	CM46, CW46, BM46	医病	病棟新設に伴う汚水構	2.3	1.2	古墳時代井戸1基、土 坑1基、中世溝等の遺 構確認	56
225	1999		鹿田	CR・CN・CP・ CR・CT58, CV- DA・DC・DD・ DP59	医	グラウンド防護ネット ポール	2.0～2.3		11ヶ所、南から6ヶ所 は河底状、7～10ヶ所 は最高地帯、最北端で は河道状	56
226	1999		鹿田	ET51	医病	病棟新設に伴う汚水構	2	1	造城土以下7層確認、 古墳時代層まで掘削か	56

※発掘調査、試掘・確認調査については全てを、立会調査については掘削が中世層以下に及んだもののみを掲載している。

文献番号は附表3・4に対応する。

附表3 埋蔵文化財調査室刊行物

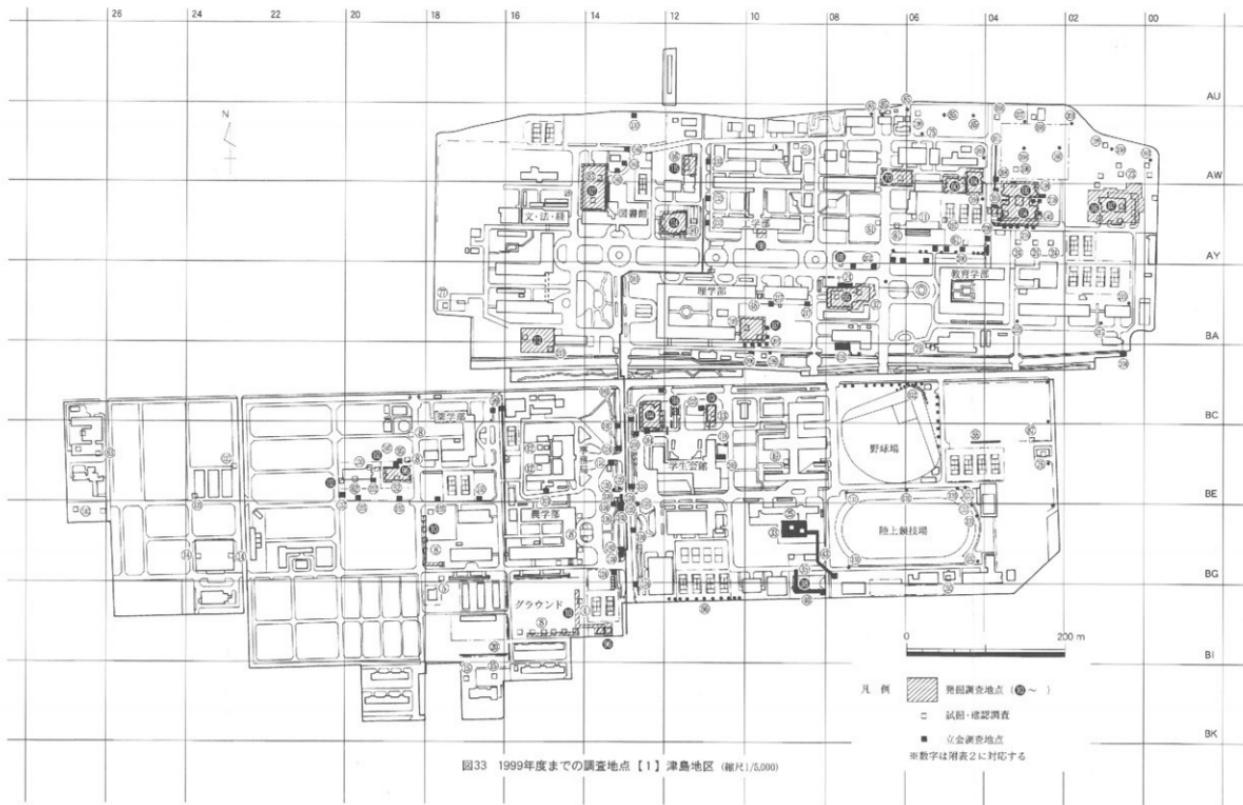
番号	名 称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報1 1983年度	1985年2月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報2 1984年度	1985年3月
3	岡山大学津島地区小橋法日黒遺跡(AW14区)の発掘調査 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1集	1985年5月
4	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告Ⅰ(農学部構内BH13区他) 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第2冊	1986年3月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報3 1985年度	1987年3月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報4 1986年度	1987年10月

附表4 埋蔵文化財調査研究センター刊行物

番号	名 称	発行年月日
7	鹿田遺跡 I 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊	1988年3月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報5 1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第1号	1988年10月
10	鹿田遺跡 II 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊	1990年3月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報6 1988年度	1989年10月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第2号	1989年8月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第3号	1990年2月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報7 1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第4号	1990年7月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第5号	1991年3月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第6号	1991年8月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報8 1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡 3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊	1992年3月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第7号	1992年3月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報9 1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第8号	1992年8月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第9号	1993年3月
24	鹿田遺跡 3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊	1993年3月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報10 1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第10号	1993年11月
27	津島岡大遺跡 4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊	1994年3月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第11号	1994年3月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第12号	1994年10月

附表

番号	名 称	発行年月日
30	岡山人学構内遺跡調査研究年報11 1993年度	1995年2月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第13号	1995年3月
32	津島岡大遺跡5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第8冊	1995年3月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報12 1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第14号	1995年10月
35	津島岡大遺跡6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊	1995年12月
36	津島岡大遺跡7 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第10冊	1996年2月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第15号	1996年3月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報13 1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第16号	1996年10月
40	虎田遺跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊	1997年3月
41	津島岡大遺跡8 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第12冊	1997年3月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第17号	1997年3月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第18号	1997年9月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報14 1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月
46	津島岡大遺跡9 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第13冊	1997年12月
47	津島岡大遺跡10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊	1998年3月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第19号	1998年3月
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報15 1997年度	1999年1月
51	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第21号	1999年3月
52	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第22号	1999年9月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報16 1998年度	2000年1月
54	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第23号	2000年3月
55	福昌遺跡1 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第15冊	2000年3月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報17 1999年度	2000年8月
57	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第24号	2000年9月
58	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第25号	2001年3月



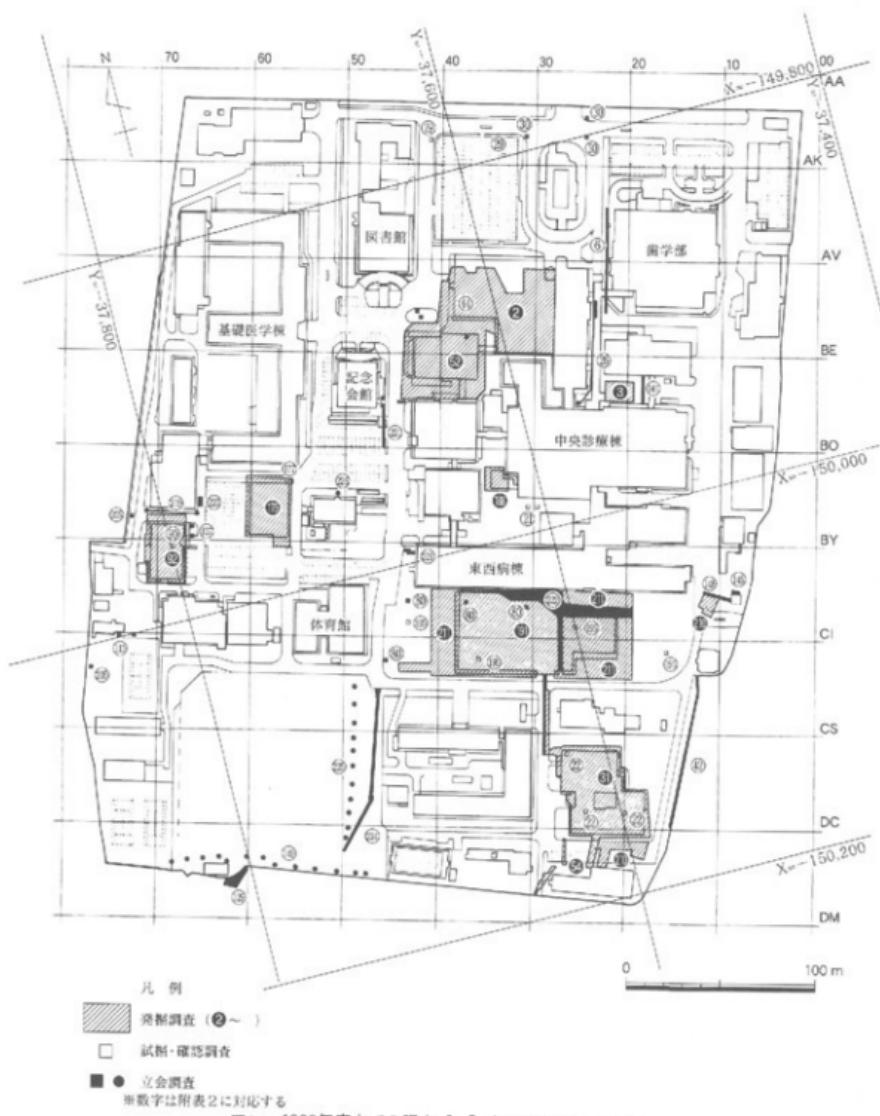




図35 1999年度までの調査地点【3】三朝地区 (縮尺1/3,000)

2001年10月29日 印刷
2001年10月31日 発行

岡山大学構内遺跡調査研究年報18 2000年度

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市津島中3丁目1番1号
(086)251-7290

印 刷 西日本法規出版株式会社
岡山市高桐西町1-23
(086)255 2181(代)